



255号  
新潟発

# 臨界事故と 私たち

- ◆ 東海ウラン再転換施設での臨界事故について 高木仁三郎
- ◆ 9・30 —— そのとき茨城県では
- ◆ 臨界事故に想う 新潟/北海道/東京/鹿児島
- ◆ 事故後の経過と原子力関係記事
- ◆ AGORAZEIN 歩み続ける新潟の女たち
- ◆ グループ紹介 そらまめカンパニー ◆ あごらめいと 佐藤志津さん
- ◆ 緊急報告 チェチエン・キルギス・そしてロシア 寺沢潤世
- ◆ 沖縄から 普天間基地移転問題に全国的な取り組みを!

原発と私——そして私たち 1

東海ウラン再転換施設での臨界事故について 高木仁三郎 3

9・30——そのとき次城県では 日立市・太田美恵／水戸市・酒井はるみ／土浦市・西中美佐子／県公報から 20

新潟から 「柏崎」からの発信 桑山史子／巻町は今！ 小林博子／臨界事故に思う 佐藤志津 26

北海道から 臨界事故翌日、泊原発増設反対行動へ 谷百合子／水道の専門家として感じたこと 佐々木春代 32

東京から それは真つ直ぐ私に——斎藤千代／臨界事故とY2K 芦澤礼子 34

鹿児島から 緊急座談会・原発なしで暮らそう！ 小川みさ子／浜田正枝／島原良子／高崎ひろみ 38

## 臨界事故に想う

AGORAZEEN 新潟の女性はいま——重い慣習の中で歩み続ける女たち

今井 恭／植木知枝／倉元正子／斎藤千代／鈴木勢子／南雲和子／丹羽昭子／藤田美恵子／室川 則 40

グループ紹介 「子育て応援誌」でネットワーク そらまめカンパニー 54

めじやーなりすとのめ ちょっと変だよ、その「性」感覚 与口幸子 56

あごらめいと さわやかな行動派 〈女のスペース・にいがた〉佐藤志津さん 58

## 新潟の女たち

〔緊急報告〕 チェチェン・キルギス・ロシア、そしてイスラム復興主義 寺沢潤世 59

TOPICS 危機に立つ沖縄／子ども虐待防止、法制化へほか 82

集会から '99にいがた女と男フエスティバル／これからの新潟を語ろう——新潟の政治状況とジェンダーほか 86

気になる英語 トランス・ベスタイトVI 奥川 睦 88

沖縄から 普天間基地問題に全国で積極的な関わりを！／「うない」たちの果敢な抵抗／ジュゴン保護基金 90

語りかけたいあなたへ26 線香花火 大里知子 92

あごら読書室 市民科学者として生きる／〈2000年危機〉から身を守る本 94

あごらのあごら 96

イラスト・山下桐子

## 原発と私——そして私たち

新潟の女は慎み深い。控えめで意見を言わない。

その新潟の女たちが、柏崎で、巻町で、激しい反原発運動を繰り返した。

巻町ではついに住民投票で勝利した。

困難を重ねた反原発運動にとって、〈東海村臨界事故〉は、一見、神風のように想える。

政府は「原発は安全、原発は必要」の大キャンペーンを、さすがに控えた。

報道は、JCOの呆れるほどの放漫を伝え続けた。H2ロケットの失敗とともに、それは〈技術立国ニッポン〉のプライドを粉々に打ち砕いた。

しかし、問題は原発だけだろうか。ロケットだけだろうか。

明治以来、追いつき追い越せ、無謀な大戦争まで勝てると信じ込ませた日本政府の伝統は、今も脈々と引き継がれている。便利なもの、利潤を生むものを良しとしてきた戦後の日本人。

面積わずか〇・六％の沖繩に七五％もの基地を押しつけて高度成長を謳歌してきた日本人。

臨界事故は、私たちの生き方そのものを問い直す、大きな警鐘ではないだろうか。

雪深い新潟には、今も多く of 慣習が残り、女性はその一つ一つとたたかいながら生きている。

巻町や柏崎のたたかいのように、それは声高に報道されることはない。が、押されつ放しだった女性たちも、一步、一步、押し返す力をつけてきた。

世界最大の原発基地、柏崎を持つ新潟の女性たちにとって、〈臨界〉は、ことに胸に刺さる。

原発と女性差別——それは一見、無関係のようだが、根底で深く関わっている。

この小さな特集から、それを読み取って頂ければ幸いである。

# 臨界事故に想う

九月三十日のJCO東海事業所転換試験棟で発生した臨界事故には、尋常一様でないショックをどなたも受けたと思う。

事故の全容は今もまだ発表されていないが、これが単なる東海村だけの、茨城県だけの出来事ではないとは、等しく感じておられることだろう。

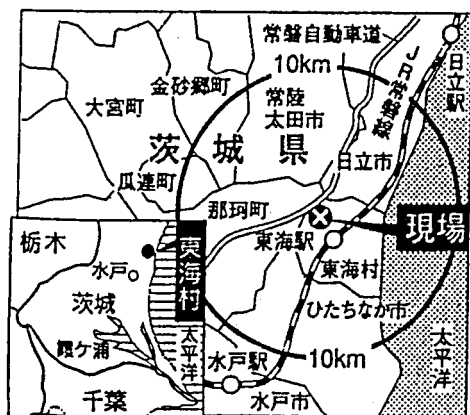
この事故について、科学者として、明快な分析をいち早く発表された、高木仁三郎さんの解説と、全国各地の〈あごらめいと〉の証言と意見を、ご紹介する。



# 東海ウラン再転換施設での臨界事故について

## 1、事故の経過および性格について

九月三十日十時三十五分、原子炉燃料の加工工程の一部であるウランの再転換を行うJCO社（茨城県東海村）のプラントで放射線／放射能事故が発生した。当初はいかなる事故であるか、工場側の認識は薄かったが、次第に原子力事故の中で最悪の臨界事故であることが明らかになってきた。しかし工場側は、全く臨界事故が起こることを想定していなかったたので、臨界事故に気づくのが遅れた。また臨界事故に対する何らの対策も用意していなかった。そのため、事故は悲惨な方向へと発展していった。

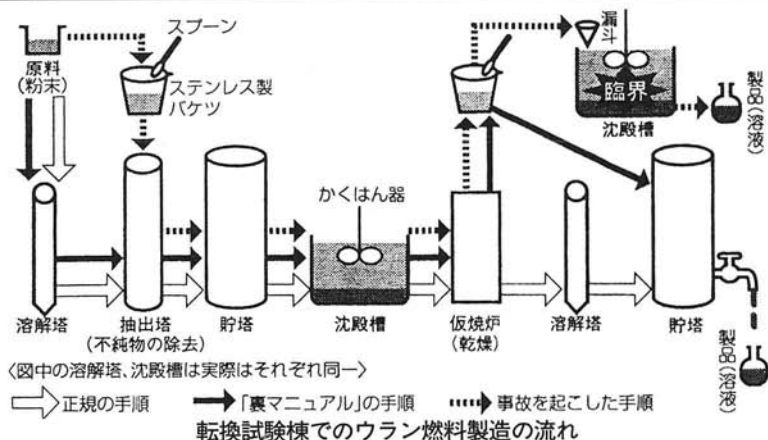


れ以上の破滅的事態にいたらなかったのは、今となつては幸運と言ふべきだろう。しかし、これは、科学技術庁、原子力安全委員会をはじめ、政府の原子力の安全監視に対する責任体制の根本、ひいては原子力政策全体が根底から間違つた基盤に立つていたことを明らかにした事故であつた。

## ◆臨界事故とは

臨界とは、核分裂反応が、原子炉内のように連鎖的に起こつて継続されていく状態である。この事故では、原子炉施設でもない核燃料工場の一角に、突如として裸の原子炉が出現したと思えばよい。

例えば、ウランの中の核分裂を起こす（「燃える」）成分であるウラン-235に宇宙線の中性子などがあたると、一定の確率で核分裂が起こる。その時、また中性子が発生する（一つの分裂あたり二〜三個）が、一般にはこの中性子は他のものに吸収されたり遠くに飛び去ったりして、反応は継続しない。しかし、ある濃度と量でウラン-235が集中し、これに適当な反射材（中性子を反射して遠くに洩れ出すのを防ぐ物質、ここでは水）や減速材（中性子のエネルギーを落とし、核分裂を起こしやすくする物質、ここではやはり水）が加わると、このような臨界状態が実現する。



臨界にも二通りあって、主に寿命の短い中性子が関与して、一挙に爆発的に進行する核爆弾に於けるような即発臨界（二秒よりはるかに早い時間内に核分裂反応がねずみ算的に起こる）と、寿命の長い中性子が関与してややゆつたりと反応が進行する原子炉に於けるような遅発臨界とがある。

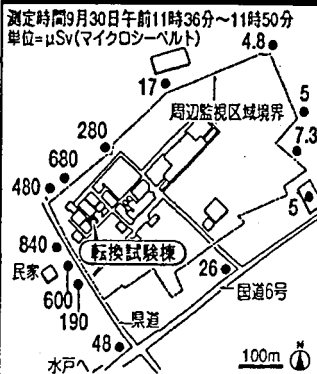
今回、約十八時間という長い間反応が継続したのは、後者の遅発臨界という現象によってであるが、一番最初のバーストと呼ばれる瞬時の「青い光」の現象は、即発臨界によったのであろう。

### ◆臨界の持続

臨界事故は、化学工程中の一部として、濃縮ウランを硝酸に溶かした液をバケツを用いて沈殿槽に移送したときに生じた。一八・八%というかなり高い濃度に濃縮されたウランを、規定に反して大量に沈殿槽に入れたために、沈殿槽があたかも原子炉のように機能し、核分裂の連鎖反応が始まり、継続したのである。

核燃料工場における臨界事故は、原子力の歴史の初期にアメリカやロシアなどの軍事施設や一部研究機関で発生したが、最近では全く起こっていないかった。また、一般に臨界事故では、最初のバーストで核物質が吹き飛んで分散してしまい、臨界は収束してしまうが、この事

事故直後の1時間当たりの放射線量



### シーベルト

被ばくした放射線量を人体への影響度で表した単位。吐き気、白血球減少など人体への急性障害は、被ばく量二五〇ミリシーベルト（〇・二五シーベルト）を超えるとあらわれる。一・五シーベルトを超える被ばくでは、死亡する人もいる。

作業員は、少なくとも八シーベルトの放射線量を浴びたとされる。この量は、広島島の原爆から七〇〇メートルから八〇〇メートルの距離の放射線量に相当する。

東海村付近の線量は、事故後、一時間あたり〇・八ミリシーベルトを記録しており、普通の人が浴びる年間の放射線量（一ミリシーベルト程度）に近い。

故では、そのようなことが起こらず、ウラン溶液が高濃度で沈殿槽内にとどまり続け、沈殿槽を取り巻く冷却水がちょうど中性子の反射材の役割をするという条件も重なって、裸の原子炉状態が長時間持続した、特殊な状況だった。

「青い光」の発生と直接作業にあたっていた三人の作業員の症状からして、現場では臨界事故が起こったのではないかという疑いがもたれ、そのことは科学技術庁にも事故の四十分後には伝わっていたにもかかわらず、最初の臨界時の十時三十五分以降も臨界が持続しているという意識は、現場（JOC側）にも科技庁側にもなく、すべてに対応が遅れた。

中性子線の放出が敷地外まで長期にわたって続くなどという事態は、これまで想定されていなかった事態で、そのための備え、例えば中性子の計測装置すら現場にはまったくなく、事態も把握できなかったため、危機的な状況が持続し、多くの避けられ得たはずの被曝も生じた。このことについては、会社側（会社には事故を発生させたことの第一義的責任は勿論あるが）というよりも、国側に大いに責任があり、その他後述するような無為・無策の体制も含めて、国（科学技術庁、原子力安全委員会、原子力委員会、通産省……）に責められるべき所がきわめて大きい。

## 事故の経過（◆は政府の対応）

9月30日

10:35 JCO東海事業所転換試験施設

で、濃縮度一八・八％のウラン

溶液を沈殿槽に入れる作業中に

臨界事故発生。作業員三名被曝。

38 茨城県公害技術センターのア

ラームランプ、約二分間点滅。

現場から二キロの舟石川測定所

で通常の約十倍の放射線を測

定。

42 JCO職員、構内のグラウンド

に避難。

線量測定、JCO事故対策本部

召集。（臨界を認識）

46 救急車がJCO事業所に到着。

当初、作業員三名は放射線被爆

による急性障害であることが報

告されなかったため、病院の特

定に手間取る（水戸病院へ）。



臨界状態が持続していることが原研等で議論され始めたのは、おそらく十五時頃からで、政府の報告によれば、JNC（旧動燃）が中性子の計測を始めたのが十六時三十分頃、JOCが原研の測定器を借りて敷地境界周辺の測定を始めたのが、十九時過ぎである。この頃になって、ようやく事態の深刻さが認識されたと思われ、原子力安全委の緊急技術助言組織において、原子力安全委員二名の現地派遣が決まったのが、十八時三十分。現地に到着したのはなんと二十一時四十分頃だった。

### ◆決死の終息作戦

第一回の現地対策本部会議が開かれたのが、十月一日の一時四十分。ここで臨界状態の継続が確認されて、その早期収束策が語られたのだらう。そして、沈殿槽の水の抜き取りが試みられることになり、まず写真撮影班が二名、特攻隊的に入り、過剰な被曝を浴びながら写真撮影し（二時三十分頃）、その後さらに十六名の決死隊が水抜き作戦（建物の外側でバルブ操作、後にパイプの破壊）を行なって、幸運にも核反応は四時三十分頃、終息した。（水抜きで果たして臨界状態が終息するかどうか確かな成算はなかった）。この間、約十八時間「裸の原子炉」は燃え続け、中性子とガンマ線を放出し、また核分裂生成物を生成し

11 08 JCO職員、外へ避難。

19 ◆JCOから科学技術庁に事故の第一報。

33 茨城県庁にJCOから連絡。

34 東海村役場にJCOから「臨界事故の可能性がある」と連絡。

35 県原子力安全対策課へ連絡。

39 那珂町原子力対策課、「窓を閉めて外出を控えるよう」街宣。

39 幼稚園・小中学校に窓を閉めて待機を指示。

43 施設内にて放射線量測定、通常四千倍。

43 東海村消防本部が茨城県警、ひたちなか西署、東海村交番に事故の一報。

12 00 ひたちなか西署、対策本部を設置。

10 同署、現場から半径二百メートルを立入規制。

茨城県警に総合警備本部。

続けた。その間、そしてその後も、人々はこの影響を様々な形で受け続けたわけである。

## 2、被曝と避難

### ◆作業員の被曝

初期の段階で、四十九人の労働者及び住民が中性子線によって強く被曝したと発表され、後にこの数は、六十九人と改められたが、事故発生時にJCO東海事業所にいたのは百二十三名とされるから、この人たちは基本的に中性子線を浴びた被曝者と言うべきである。このうち、事故当初現場で作業していた三人の労働者は、ほとんど致死性の線量を浴びた。最大の被曝者は八十七シーベルトの被曝をしたとされる。驚くべきことにこれら三人も含めて、多くの作業員は線量計もフィルムバッジも着用しておらず、中性子被曝によつて体内のナトリウムが放射化して生じたナトリウム-24(半減期十五時間の放射性物質)をホールボディー・カウンターで検出することによつて、被曝が確認されたのである。

また十月一日早朝、臨界状態を止めるための沈殿槽の冷却水抜き取り作業を、運転者も含めて二十三人の労働者が、さらに再臨界を防ぐ

15 東海村が災害対策本部設置

30 東海村教育委員会が管内の幼稚園・小学校・中学校・高校に、

校舎の窓を閉めて屋内で待機するよう指示。

東海村役場が住民に防災無線で屋内退避を呼び掛け。

41 ◆小淵首相に第一報。

50 ◆科技庁、記者発表。

13 43 ひたちなか市、原子力問題連絡会議を設置。

56 JCO、半径五百メートル以内の地域に避難勧告を出すよう東海村に要請。

14 30 ◆科技庁から原子力安全委員会に報告、災害対策本部を設置。

15 40 ◆科技庁事務次官が記者会見。

00 東海村役場、三百五十メートル圏内約五十世帯の住民に退避を要請。

◆政府が事故対策本部設置。

ための沈殿槽へのホウ酸水注入作業を六人の労働者が行なった。労働者に対する年線量限度（五十ミリシーベルト）を超えた人が七ないし八名もいた。最大の被曝者は、約百二十ミリシーベルトという、緊急時の作業限度（百ミリシーベルト）をも大きく超える線量を浴びた。

これらの作業は、科技庁と原子力安全委の了解のもとにJCOが行なったわけであるが、臨界の停止が急を要したとしても、中性子に対する遮蔽の工夫等を施せば、かなり低減できたはずで、十分な被曝管理をせずに「決死隊」的に水抜き作戦を強行した会社と、させた科技庁・原子力安全委は、ここでも大きな過ち、ないしは犯罪的行為を犯したことになる。

これらの全体を含めて、事業所関係の百名を超える被曝者のそれぞれ、の被曝状況と総被曝線量がどれだけだったかは、報告されておらず、詳しい状況が不明なため推定も容易でないが、適切な避難・防護等の指導が行なわれなかったのは確かで、これらの人たちの今後の健康状態が深刻に懸念される（臨界終息の六時三十分時点で、なお七十八人が敷地内にいたと報告されている）。

## ◆住民の避難

事故現場からの中性子線と核分裂生成物の放出によって、住民は大

15:20 警察の判断で、三キロ圏内の立入禁止。

被曝労働者、無菌室へ。「青い光を見た」と証言。

25 東海村、現場から離れた小学校・幼稚園七施設に帰宅を許可。

30 ◆原子力安全委員会が「緊急技術助言組織」の招集を決定。

◆首相官邸別館三階危機管理センターに「官邸連絡室」設置。

16:00 茨城県が事故対策本部。

那珂町の観測ポストで放射線量が再び上昇。

25 那珂町が、町内の小中学校などに出していた待機勧告を解除。

30 那珂町が事故対策本部を設置。

JCO施設敷地で中性子線の測定開始。

17:00 那珂町が町民に屋内退避を呼び掛ける。

きな危機に立たされていたにも関わらず、政府・原子力安全委員会緊急技術助言組織）は、きわめて動きが鈍かった。むしろ、東海村のほうに機敏に事態に対応した。十二時三十分（事故発生後約二時間）に、住民は外に出ないように村内広報を開始、十五時には施設から半径三百五十メートルまでの住民に避難要請を出した。この三百五十メートルは、狭すぎる設定だったが、政府はこの決定になんの関与もせず、住民を放ったらかしにしたことがもつと大きな問題だ。

避難に関しては、政府は、県がようやく二十二時三十分、十キロメートル圏内の住民の自主的屋内退避を要請したとき、緊急技術助言組織がその相談にのっている程度のことしかしていない。

なお、この十キロ圏の屋内退避要請は十月一日十六時三十分には県知事により解除されているが、この時点では、核分裂生成物の放出に有効な手は打たれておらず、無謀な「安全宣言」だった。同じことは、十月二日になされた東海村村長による三百五十メートル内の退避要請の解除にも言える。核分裂生成物と中性子による放射化生成物が帰宅住民に影響を与えない保証などなかったし、これらの危険性に対する注意等もなされなかった。

政府部内でもいろいろな議論・検討はあったようだが、表に出てきた結果としては、これらの住民に対する防災対策に、政府はまったく

30 東海村丹石川コミュニティセンターに避難した住民約百十人に対し、放射性物質の検査。

55 茨城県警が「JCO玄閼前の測定で中性子の数値が上昇している」と発表。

18 00 原子力安全委員会緊急技術助言組織会合開始。

40 那珂町、現場の半径三百五十メートル以内、六世帯十九人を近くの公民館に退避させることを決定。

45 東海村の学校で待機していた児童・生徒がすべて帰宅。

19 00 東海村の避難民が百四十二人に。

中性子線の測定値四・五ミリシーベルト/時。年間の四〇五倍。

20 06

◆原子力安全委員会「再臨界を起こしている可能性があり、風

無策で、住民を大きな危険にさらしたままであったのである。

とくに、三百五十メートルの避難地域の設定に関して言えば、単純に中性子線量だけ考えても、この範囲外、たとえば四百メートル地点でも、十八時間の臨界反応継続中に一般人の年間許容量以上を浴びてしまったはずで、状況の不確かさ（臨界が十八時間で終わる保証は何もなかった）、核分裂性気体の放出の影響などを考えれば、避難範囲を一キロメートルとしても狭すぎたかもしれない。今回の退避計画の問題点の中でも、とくにこの点が今後大きく問題にされねばならないだろう。

### 3、事故原因

事故の直接的原因は、規定によって沈殿槽には一八・八%の濃縮ウランは二・四キログラムまでしか加えられないことになっていたのに、作業員が十六キログラムのウランを加えたことだ。これによって、沈殿槽が臨界状態に達した。報道では作業員が作業を短縮するため、ステンレス製のバケツを素手で扱って作業したと伝えられ、それが事故の主因をなすヒューマンエラーのごとく、盛んに言われている。

バケツを使って、素手でウラン溶液を扱うことは確かに信じられない

下に避難している 住民は別の場所に退避するよう」要請。

21:00 ◆政府対策本部、初会合。

22:28 J R常磐線、水戸〜日立間運転見合わせ。

.. 50 常磐自動車道東海パーキングエリア閉鎖。

10月1日

0:50 茨城県対策本部、半径十キロ以内の全世帯に屋内退避を指示（十万七千世帯・三十一万人）。

対象地区は水戸市、日立市、ひたちなか市、常磐太田市、那珂町、瓜連町、大宮町、金砂郷町、東海村の二百三十四地区。

1:15 ◆農水省、農水産物の安全性検査を指示。

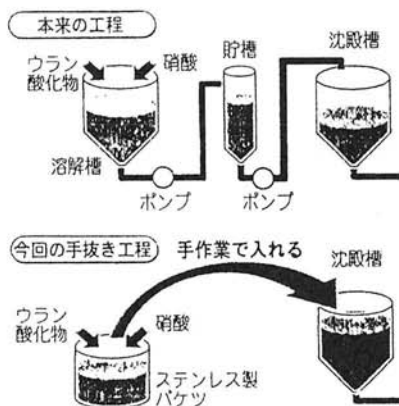
◆警察庁、事故対策本部を設置、情報収集。

◆文部省、半径十キロ以内の幼

いし、マニユアルには「裏マニユアル」があり、さらに実際はそれをも逸脱して、「時間稼ぎ」のための作業が行われた（作業図参照）ことは、もちろん重大な規則違反行為であるが、このことが臨界の直接の原因ではない。臨界の原因は、一八・八％という高い濃縮度のウランを扱っているにもかかわらず、作業者にもそれを監督する監督者側にも、まったくその認識がなく、五％以下の濃縮ウランと同じように扱って、過剰なウランを臨界防止のための形状管理をしていない一つのタンクに集中させたことである（なおこのJCOは、普段は日本の軽水炉原発用の低濃縮ウランの再転換工程を主として扱っているが、この事故の時には、転換試験棟において、高速増殖実験炉「常陽」のための高濃縮ウランを扱っていた）。

本来この種の施設は、臨界事故の潜在的危険性を持つので、取り扱以上のミス（ヒューマン・エラー）があっても絶対に臨界を起こさないように、容器の形やサイズが制限されて設計されている必要がある。これを臨界防止のための形状管理というが、この形状管理を施していなかったことが決定的な欠陥であった。

また、仮にすべてに形状寸法の制限が施されない場合（商業プラントでは、ユニットの形状寸法が制限されて効率が落ちるのを嫌う傾向がある）でも、操作ミスがあっても臨界が起らないよう二重のイン



稚園、小中学校、高校の休校を指示。

J R 水郡線、水戸～大子間運転見合わせ。

1 18 県知事、陸上自衛隊に災害派遣要請

2 00 東海村舟石川測定所で放射線最大値記録。

30 県教委、屋内退避対象地域内の幼稚園・小中学校、高校の休校、

ターロックをかけることが設計の常識であるが、この常識がまもられず、国の安全審査でもそれで許されてきたのである。

安全審査のもととなる「核燃料施設安全審査基本指針」（原子力安全委員会決定）では、

指針10…臨界安全 核燃料施設における単一ユニットは、技術的にみて想定されるいかなる場合でも臨界を防止する対策が講じられていること。

指針12…臨界事故に対する考慮 誤操作等により臨界事故の発生するおそれのある核燃料施設においては、万一の臨界事故に対する適切な対策が講じられていること。

となっている。これらを厳密に解釈すれば、このJCOの施設は、このいずれにも欠格で、安全審査を通らなかったことになるが、この指針自体も具体性がなく、解釈の幅があるもので、実際の安全審査においては、「審査委員の見識」によって、「技術的に発生するおそれのある」ケースは制限され、手順書の制限通りやっていれば「技術的には臨界は起こり得ない」として済まされ、指針12の具体的適応は免除され、また、事故の想定からも臨界事故は免除されてしまっていた。

安全審査がいかにも恣意的なものか、佐藤安全委員長の言葉を引用しよう。「この審査指針というものは言うなれば審査の際の審査に対する

公共施設の休館を指示。

58 沈殿槽の冷却水抜き取り作業開始。二人一組で六時四分まで九

回実施。

3 40 陸上自衛隊化学防護隊と除染車が勝田駐屯地到着。

6 30 中性子線量率が検出限界値以下に低下。

8 40 沈殿槽へのホウ酸水注入作業を開始、三班に分けて作業、十七リットルを注入。

9 20 ◆原子力安全委員会「臨界については一応の終息」と発表。

10 57 ◆野中広務官房長官記者会見「危険水域を脱した。対応の遅れは認める。認識が甘かった」。

12 30 ◆科技厅、事故の国際評価尺度を国内最悪の「レベル4」と発表。

15 02 ◆野中官房長官、半径十キロ圏内の屋内退避解除を発表。

る手引きでございまして、なんら法令上の根拠を持っているものではなくて、判断の基礎は、お集まりいただいた専門家の方々（安全審査委員のこと）の最新の技術的知見によるといというのが建前でございします。」（第一回事故調における発言）

これは、中性子の検出系や臨界を停止させる装置（ホウ酸の注入系など）が何一つ備えられていなかったことや、いわば街中にこの施設の立地が認められていたというような信じられないことが起こった原因である。

もっともこれらのことは、このJCOの施設にだけ言えることではなく、多くの同種の核燃料サイクル関連施設に言えることであり、「お集まりいただいた専門家の方々の知見」に最後はすべてが依存してしまうことは、すべての安全審査に共通である。しかし、これらの人々の判断の誤りにまで、責任が及ぶことにはなりそうもない。

#### 4、事故の規模と評価

私は、当初不確かな情報に基づいて、粗い見積もりをし、上限の値を述べ、十月九日の高木学校Bコースでは、「この事故は日本の原子力開発史上最悪の事故であり、日本政府は国際的な事故評価尺度でレ

16：30 県、屋内退避を解除。

10月2日

15：50 JCO社員が「現場の周囲の遮蔽のために土嚢を積み上げている」と避難住民に説明。

東海村、三百五十メートル以内の避難要請を解除。

18：30 東海村、三百五十メートル以内の避難要請を解除。

◆政府「農畜水産物に対する影響なし」と発表。

22：45 ◆政府は事故第一段階はほぼ終息したと判断、対策本部縮小。

10月3日

6：25 舟石川コミュニティセンターに最後まで残っていた住民三世帯十一人が帰宅。

※原子力資料情報室、たんぼぼ舎新聞資料などから抜粋



ベル4としているが、レベル5とすべきである」とした。

また、中性子線量を考えただけでも、三百五十メートルの避難域の設定は狭すぎたし、臨界終息後もヨウ素などが漏れ続ける可能性が十分なのに、有効な手が打たれていないことなども指摘した。その後の事態の展開と、新しく公表されたデータによっても、基本的にこれらの指摘は裏付けられたと考えている。

ただし、当初見積もったよりは、その後のやや詳しいデータの入手と検討によって、核分裂の数については、低めに修正すべきであると考えている。住田原子力安全委員等の見積もりとして、核分裂の数にして10 E18までの反応が起こったという暫定的な見積もりが報告されている。これは燃えたウラン—235にして、十分の一ミリグラムの桁ということになる。他の専門家の見積もりもだいたいその周辺にあるようだ。

この見積もりは、外で測った中性子線量からの見積もりだが、その見積もりの仕方にはかなりの不確かさを伴う理由があり、Na—24などの放射化の実測データなども考慮すると私はもう少し高い値も考えられるとみていて、現在は10 E18—10 E19として考えている（燃えたウラン—235にして数ミリグラム）。これによる核分裂性の希ガス等の生成・放出量は、10 E15—10 E16  $\text{Bq}$ と見ている。ヨウ素の各種の

## 原子力発電所の事故の 国際評価尺度

### レベル1 逸脱

運転制限範囲からの逸脱。

〈例〉もんじゅ（九五年）

### レベル2 異常事象

所内のかんりの放射性物質による汚染／法定の年間線量当量限度を超える従業員への被曝。

〈例〉美浜第二（九一年）

### レベル3 重大な異常事象

〈所外〉放射線物質の極めて少量の外放。公衆の個人の十分の数ミリシーベルト程度の被曝。

〈所内〉所内の重大な放射線物質による汚染／急性の放射線障害を生じる従業員の被曝。

〈例〉東海再処理（九七年）

レベル4 所外への大きなリスクを伴わない事故

放射能は、短寿命のものまで加えると10 E 14から10 E 15で、例えばこの四分の一が放出されたとしてもその放出量は、環境に無視し得ない影響を与えうる。もつともこれらの数字は、今後の調査の結果を待つて、精密化されるべきもので、あまり断定的には言えない。

しかし、この事故では、上記に加えるに、中性子線の長時間にわたる放出によって、住民が影響を受けるという事態が生じた。これは、国際評価基準に言う「所外へのリスクを伴う事故」というべきで、これはレベル5である（レベル4は所外へのリスクを伴わない事故）。

いずれにしても、これは日本の原子力の歴史上最悪、世界の歴史でも指折り数えられる事故で、政府関係者の首が飛ぶような事故と言わなければならない。

## 5、事故の責任と教訓

上述のことから明らかなように、事業者が全体として組織的にこの事故に責任があることは当然であるが、臨界事故を起こさないような設計になっていなかったにもかかわらず、この事故を認可した科学技術庁と原子力安全委員会にも重大な責任がある。またこの工場は住宅地にあつて、臨界事故を起こしたときのことを想定した立地審査など

〈所外〉放射性物質の少量の外部放出。  
公衆の個人の数ミリシーベルト程度の被曝。

〈所内〉原子炉の炉心のかんりの損傷／  
従業員の致死量被曝。

〈例〉サンローラン・デ・ソー（八〇年）

レベル5 所外へのリスクを伴う事故

〈所外〉放射性物質の限定的な外部放出。  
数百から数千テラベクレル相当

の放射性物質の外部放出。

〈所内〉原子炉の炉心のかんりの損傷。

〈例〉スリーマイル島（七九年）

レベル6 大事故

〈所外〉放射性物質のかんりの外部放出。  
数千から数万テラベクレル相当

の放射性物質の外部放出。

レベル7 深刻な事故

〈所外〉放射性物質の重大な外部放出。  
数万テラベクレル相当の放射性物質

の外部放出。

〈例〉チェルノブイリ（八六年）

は、まったく行われていなかった。このことにも、監督官庁である両者には重大な責任がある。

さらに、事故に至った現場の安全意識の徹底した欠落ぶりは、監督を怠った行政官庁の安全意識の欠落に他ならない。そのうえに、事故後の措置、防災対策においても、政府は、住民や作業員の安全に対して著しく鈍感な対応に終始し、責任能力の無さを露わにした。

ここで、この事故の背景を振り返ると、最近日本の原子力産業においては、重大な事故が頻発し、また検査データ、製品データの捏造、改ざん等が相次いで明らかになっている。科学技術庁はその都度、検討委員会等をつくって改善策を提言し、また一部罰金などの処分が行われた。しかしこれらの対策にもかかわらず、事態はなら改善されるどころか一層悪化し、つい到此までの事故に至った。科学技術庁による「事故調査委員会」には、もはや何も期待できない（なんの国民的議論も経ずに、動燃を核燃料サイクル開発機構と看板の付け替えをして温存させた「動燃改革検討委員会」の委員長と同じ吉川弘之氏が委員長をしている一事をもっても明らかで、委員はすべて科学技術庁が勝手に決めている）。市民が参加した公正な第三者機関による、徹底した事故原因の究明、および原子力産業全体の再点検が必要だ。

特に今回事故を起こしたJCOのプラントと類似の核燃料加工工

### 国内の核燃料施設（全十三か所）

〔青森県・六ヶ所〕

①日本原燃再処理事業所

（再処理・建設中）

②日本原燃再処理事業所

（廃棄物管理）

③日本原燃濃縮・埋設事業所

（ウラン濃縮）

④日本原燃濃縮・埋設事業所

（廃棄物埋設）

〔茨城県・大洗〕

⑤日本原子力研究所大洗研究所

（廃棄物管理）

〔茨城県・東海〕

⑥核燃料サイクル開発機構東海事業所

（再処理）

⑦JCO東海事業所

（再転換加工）

⑧三菱原子燃料（成型加工・再転換加工）

⑨原子燃料工業東海製造所（成型加工）

⑩日本原子力研究所東海研究所

（廃棄物埋設）

場は、日本に多数あり、それらの多くにおいて臨界事故の想定がまったくなされていないだけではなく、安全管理上も手抜きが目立つ。

「安い原子力」は、いわばそのような手抜きの上に成り立ってきたのである。

今回の事故の重大さに鑑みて、これまでの日本の原子力を産業たらしめてきた基盤のすべてにわたって、安全のみならず、経済、社会、防災などすべての観点から全面的に見直し、さらに原子力に大きく依拠した日本のエネルギー政策の全面的見直しが緊急の課題となった。

◆一九九九年十月二十三日 高木学校Bコース第二回連続講座「エネルギーと生活」(3)「原子力発電と放射性廃棄物／緊急報告・東海村ウラン臨界事故」配布資料から抜粋。〈原子力資料情報室〉提供。

◆原子力情報資料室には、他にも東海村臨界事故や原発に関する資料がたくさんあります。

連絡先は〒164-0003

中野区東中野一―五八―一五 寿ビル三階

TEL 03・53330・9520 FAX 9530

http://www.jca.apc.org/cnic/

Eメール cnic-jp@po.ijinet.or.jp

〔神奈川県・横須賀〕

①日本ニュクリア・フュエル(成型加工)

〔大阪府・熊取〕

②原子燃料工業熊取製造所(成型加工)

〔岡山県・人形峠〕

③核燃料サイクル開発機構人形峠環境技術センター  
(ウラン濃縮)

〔加工施設〕 7

再処理施設 2(うち建設中 1)

廃棄施設 4

※一九九八年十二月末  
原子力安全白書による

## 事故後の経過と

### 原発・原子力関係記事

（JCO）●地元 ◆政府 ▼原発

10月

3日 ■ 科技庁JCOに立ち入り検査。「裏マニュアル」の存在判明  
4日 ◆ 政府対策本部、全国二十か所の原子力関係施設を一斉点検  
5日 ◆ 政府、原子力防災法制定の方針を発表。

6日 ■ 茨城県警、JCO家宅捜索。「安全教育せず」と判明。◆ 小淵首相、現地で農水産物の安全をPR。◆ 原子力安全委員会、ウラン加工施設の安全基準見直しを決定  
7日 ● 那珂町、住民の血液検査を独自に実施することを決定。

8日 ◆ 科技庁がJCO施設を七年間無調査だったことが明らかに。  
9日 ■ 被曝副長が「臨界研修は23年前に一回だけ」と供述。

10日 ▼ 関西電力が石川県珠州市

の原発予定地買収にゼネコンを介在させていたことが判明。

11日 ■ JCO、事故後も十二日目まで排気装置を止めなかったことが判明。

12日 ■ JCO周辺で微量ヨウ素を検出。▼ 北海道電力、泊原発三号機建設計画の道民意見聴取会を延期。

13日 ● IAEA（国際原子力機関）が茨城県訪問調査。

15日 ■ 沈殿槽にバケツでウランを投入する作業は事故の前日に発案されたことが、科技庁の調査で判明。◆ 原子力安全委員会事故調査委員会、被曝者数を六十九人に修正。◆ 政府対策本部が、事故発生当日の中性子線被曝避難範囲の拡大（三百五十メートルから五百メートルへ）を見送っていたことが明らかに。◆ 労働省が労働安全衛生法に基づき、原子力関連施設の安全教育を義務付け。

16日 ■ JCOが許可量（二・四キロ）を大幅に上回る一回十六キロ程度のウランを日常的に扱う違法作業をしていたことが判明。

● 東海村がJCOと親会社の住友金属鉱山に損害賠償請求を通告。

18日 ● 東海村農家約四百戸がJCOに六億八千六百万円の損害賠償を請求。

19日 ■ JCO被曝社員三名、労災申請。（26日認定）

21日 ◆ 原子力防災法案の骨子判明。

23日 ■ JCO、臨界事故の転換試験棟をコンクリートで遮蔽することを発表。

27日 ▼ 京都で大規模停電発生し、福井県の高浜原発三基が停止。

29日 ● 茨城県と東海村、那珂町が「被災地住民登録」（実質的な被曝者登録）を開始、百二十名が登録。

30日 ■ JCO、九三年に「バケ

ツ使用メモ」を作成が判明。

11月

1日 ▼ 関西電力、高浜原発三号機のプルサーマル計画延期を福井県に報告。

3日 ■ JCO、ウラン溶液入りのバケツを日常的にコンロで加熱していたことが判明。

4日 ■ 裏メモも「組織ぐるみ」とJCO宮嶋取締役が供述。

■ 事故現場の敷地境界付近の被曝量は年間限度の百倍以上と科技庁調査で判明。◆ 今回の事故は、世界で過去二十件発生している核燃料施設の臨界事故の中でも最大規模（日本原子力研究所の分析）。

5日 ◆ 放射性ヨウ素の推定放出量は過去最大と発表（科技庁調査）。

8日 ▼ 新潟県、柏崎刈羽原発のプルサーマル計画延期を東京電力に要求。

◆ 全国の民間核燃料施設の半数は労働安全法違反と労働省が公表。

# 9・30——そのとき茨城県では

## 日立市の場合

太田美恵

### 1、情報はどう伝わったか

夕方日立市の自宅に帰り、娘から聞いて、テレビをつけて初めて知った。娘は東海駅付近のジャスコで買物、私は所用で東海村を当時刻に通過したが、平素と何の変わりもなく、全く何も知らなかった。東海村役場に居た知人は、（頃庁内であわただしい動きがあったので、何か起こったらしいと思ったが、小雨の中、濡れながら帰宅している。

### 2、自治体の対応

日立市では、夜の十一時半頃、広報車が屋内退避を告げて走っていた。行政の上部組織（国・県）の情報があるのが遅かったらしいが、夕刻時、小雨の中を歩き回っていた人がたくさんいたので（私もその一人です）退避の情報は遅すぎたと思う。

### 3、日常的な備えはできていたか、広報はあったか

JCOを日立製作所の下請け工場と思っていた人は多く、私もその建物が何かを知らず、直線距離で数十メートルの所を毎週通っていた。原子力関係の建物には、それと外部からはつきりわかる目立つ標識をつけてもらいたい。また、事故が起こった時の心得などほとんどの人が知らず、無防備でした。広報はほとんどないに等しい（遅い。事業所、商店などでは何も知らなかった所が多い）。

### 4、住民の反応、怒りの声

①現場から半径十キロが危険地帯と言われ、テレビで放映されていたが、具体的な町名がわかったのは、事故が起こって七〜八時間後だった。日立市内でも十キロ圏内と圏外があり、自分の住んでいるところはどちらなのか早く知りたいのになかなか知らされず、とても不安だった。被曝した後で初めて、自分のいた場所が危険地帯と認識できるということになる。被曝しても体感できない、怖さが迫ってこないのは、体感できる地震や台風よりかえって怖いと思う。

②中性子の測定が午後四時すぎ。(中性子は水との関係で危険性が増す) 当日は小雨だったので、ぬれたまま下校した児童、妊婦などがあり、専門知識が現実の中に生かされていなかった。

③雨が降っていて屋内退避の広報が聞こえにくいところがあったので、サイレン等を鳴らし続けたり、ヘリを飛ばしたりして、もつとはつきりわかるようにして欲しかった。

④メディアの対応が悪い。NHK以外の放送局は通常どおりの番組を流していた。この時点で各民放が緊急特別番組を組んでいれば、もつと多くの人に危険を知らせることができたと思う(十月六日・朝日新聞茨城版 日立市のフリーターからの投書)。

⑤東海村では英語のアナウンスがあつたけれど、他市町村は外国語での案内はなく、日本人でさえ不安なのに情報の少ない外国人は困っていた。

⑥「予測できなかった」という言い訳は、周辺住民には納得がいかない。起きてはならない臨界事故に対してこのような対処さえしていないメーカーは廃業の道しか残っていない。村長は施設の再開は考えていないと述べているが、この際、断固とした態度で臨んでもらいたい(十月六日・



朝日新聞茨城版 東海村の六十四歳の男性からの投書)。  
⑦事故原因より対処法を流してほしい。

⑧NHKでは同じ情報をくり返していたが、現場では交通・通信の乱れがひどく、テレビに頼るしかない時もあった。危険区域の道路事情、鉄道なども、地方局を通してテ

レビで流して欲しい。

## 5、国のエネルギー政策に対する意見

環境汚染のおそれのある原発、火力発電から、風力発電のように環境に影響の少ないものに切り換えて欲しい。安全より利益優先のエネルギー政策が問題。なぜ風力発電ができる所に火力発電や原発をつくるのかと識者に聞いたら、「パテントが国内の物のほうが利益が多いから」という答えが返ってきた。

また、国民がもう一度自分の生活を再点検して、省エネの生活をめざすべきだと思う。自動販売機等、外国ではあまり見られない。缶などもゴミ問題につながるので、便利を追求しない生活をそろそろ考える時にきているのではないか。

## 水戸市の場合

### 酒井はるみ

東海臨界事故——私たちの無防備

その日（九月三十日）はいつもと変わった日というわけではありませんでした。私は翌日から開かれる「日本女性会議1999はままつ」に参加するため、常磐線赤塚駅（事

故地点より二十キロ）発十二時三十八分の電車に乗り、特急、新幹線に乗り換えて時刻表通り新幹線で浜松に行きました。水戸市赤塚の家には久しぶりに東京から帰った息子が週末を過ごしており、同居中のもう一人の息子は、東京からの友人と珍しいことに釣りを楽しむべく車で海に向かいました。

東海村の臨界事故をはじめて知ったのは、久米宏のニュース・ステーションででしたから、夜十時頃で、事故発生からすでに十二時間が経過していました。半径三百五十メートル以内の住民に避難勧告が出ており、この番組の途中で半径十キロメートル以内の住民への屋内退避要請が出ました。慌てて水戸の家に電話すると、自宅にいた息子はまだ事故を知っておらず、海に出かけた息子は、あろうことか、半径十キロすれすれを運転してきたのに知らなかったというのです。問題は水戸市が何の広報もしていないことであり、国道や県道の電光掲示板などで、事故を知らせていなかったことです。行政の危機管理能力のあまりの無さに腹立たしきどころか怒り心頭でした。

私たちは、ほんの一年半前に動燃（現核燃料サイクル開発機構）の放射能漏れ事故を経験しています。その時の国



退避住民アンケート

の愛知電線アークで、一日分かった。同業者は東海村で、十ヶ所ののりへりにあたる肌道町など三つの町の住民、もともと不安に感じているのは「酸っぱの有無」だった。ほとんどが事故に不安や怒りを口にしたことが、東海村同業者の半数強は関連施設の構内土地を「やむを得ない」と回答。原子力関連施設で働く人が多い東海村の周辺の複雑な住居感情をうかがわねば。

## 「見えない恐怖」へ不安

五、あか十七で、うち十  
 は東村村に往す。  
 一 派評 日本旗子刀方野  
 所、や前助の動意、彼村集  
 サクル開張候へば、はた  
 知れてゐるが、事故は起  
 せられて二三日経てで事  
 を承つてゐた人が多  
 災を承つてゐた人が多  
 東村村に原方調理地  
 が中してゐる民は、  
 事故が起るのは千石占  
 の前十三五外、東郷  
 村は長が事故を生をう  
 たは、平均約二時間  
 後、午後一時間、約  
 二、三時他の町では、  
 二、三時間、約二、三  
 間に、西に奔出、東郷  
 村は、午後三時半、  
 防風林で、町を走る  
 二、三時、約二、三

Category	Count	Percentage
名前だけ	20人	20%
素朴内容を含めて知っていた	17人	17%
知らなかった	63人	63%
その他	2人	2%
<b>合計</b>	<b>100人</b>	<b>100%</b>

[illegible]

10月3日茨城新聞

や県の対応の鈍さに怒り、その怒りがまだ消えない今、二度目の事故に遭い、住民・県民への対応のまずさを前回と寸分違わず再び経験させられてしまったのです。行政は旧動燃とJCOとは対応は全く違うのだというのですが、住民である私たちにとっては被害者となる点において、何ら変わることはありません。東海村臨界事故は、原子力行政がいかに経済効率中心で企業等を優遇してきたか、いかに地域住民や県民、国民の存在を無視してきたかを、改めてはつきりと私たちに突きつけてきたといえます。

今回の事故ではつきりしたことは、地域住民の身の安全という視点から、行政は企業体であれ、国公私の実験施設であれ、あらゆる原子力関連組織体に対して、全く等しく対処しうる網羅的で十全の危機管理態勢を持たねばならないということです。それが、可能とならない間は、国民尊重という点から、あらゆる操業を停止するべきです。

翌十月一日、半径十キロ圏内の学校は休校となり、私の勤務する茨城大学（国立）も、当該地域在住学生の出席扱いとするよう要請がありました。しかし、勤務者は扱いが違いました。当該諸公立校は、危険を犯して全員が出勤した学校、教師に自宅待機を認めた学校など、校長によつ

て対応がマチマチだったそうです。

私の勤務する大学では、公務員として勤務している者の欠勤は出勤扱い、定員外職員やパート職員は上司の配慮で出勤を差し控えた場合でも、年休扱いとするというのが当局の対応でした。今回のケースが人事院の就業規則のどれにも当てはまらないので、年休で処理するしかないということです。私を含め、原発や核兵器に反対している者でも、そこまでは考えていなかったことに愕然としたことでした。また、当日は電話回線がビジター状態で、職場への問い合わせや欠勤の連絡などのアクセスはできなかったということでした。

そもそも茨城大学が被害を蒙った際の、避難・退避勧告はどこから来るのだろうか？ 文部省？ 人事院？ それとも住民という点から県？——わからないことだらけです。現在は教職員組合の執行委員なので、組合としてこの問題を明確にしていくことになります。

現在、日本には原子力関連施設が至るところに存在します。日本に住む人々が現状で危機に対処することができるように、国や地方自治体の動きを監視し必要な要請を続けること、また私どもの経験から対応の糸口を捕らえること、

そして企画してくださった『あごら』などを通じて情報の交換や共有をすすめ、お互いに助け合って人的被害をより少なくできる方法を構築していきたいものと思っています。

## 土浦市の場合

西中美佐子

我が家は事故現場から五十〜六十キロメートル離れているが、十キロしか離れていない学校の寮に息子がいる。学校では昼頃には窓をしめて、部屋に待機するよう指示したらしい。その翌日、朝一番に息子は土浦の自宅までタクシー等を使つて帰ってきた。息子も私も、心配して九州から電話してきた両親も、開口一番「あそこ（原発関連施設および政府等）は信用できないから」である。

ただし、私の周りの人の反応は、原発に対する知識や、性格等によつて大きく異なるように思う。職場でも、非常に心配し、ずさんな仕事ぶりに怒る人と、そうでもない人に分かれるような気がした。

こんな危険な仕事は「安全第一」でなく「早く簡単に安く」と、町工場的感觉でなされていることに戦慄を感じた。

原発による電気は安いといっても、こんな危険と背中合わせではゴメンだ。少々高い電気代を払ってもいい。原発を

## 東海村のウラン加工施設（JCO）の事故について

十月七日 茨城県公報

このたびの東海村ウラン加工施設の臨界事故に際しましては、事業所周辺の皆様をはじめ、多くの住民の方々に大変なご不便、ご心配をおかけいたしました。

一部の住民が被ばくされる結果となったことは、まことに残念であり、県としては今後、これらの方々の健康管理などに万全の対応をしてまいります。

一日も早く今までどおりの平和な日常生活が戻ってくるよう祈っております。

県といたしましては、今後、引き続き、事故への対応に全力を傾けるとともに、さらに、原子力安全対策に万全を期して、安全で安心できる県民生活の確保に努めてまいります。

### ◆事故の概要を質問形式でお答えします

Q (株) ジェー・シー・オーは何を行なっている会社ですか？

A 原子力発電所で使用される燃料をつくる工程の一部である「再転換」という業務を行なっています。「再転換」とは、濃縮された六フッ化ウランをいくつもの工程を経て二酸化ウラン粉末に転換することです。

Q 臨界事故とはどのような事故なのでしょう？

A 核分裂が連続して起こっている状態を臨界といいます。こ

なくす方向で考えてもらいたい。高木仁三郎氏の本を再読して、知識を増やしたい。

の状態を制御できなく、外部に放射線を出してしまうようなことを臨界事故といいます。原子力発電では、原子炉の中で臨界の状態にしますが、完全に制御できるところで行なっています。Q 子どもが外で遊んでいました。放射能の影響が心配ですが、どうしたら良いのでしょうか？

A 健康相談の窓口を設けていますので、ご心配でしたら念のためお問い合わせください。

Q 外で遊んだり、布団を干しても大丈夫ですか？

A 東海地区や大洗地区に放射線測定局を設置して、放射線を二十四時間連続して測定しています。事故を起こした施設周辺の放射線測定局で、測定値が一時的に高くなつて、またもどるという現象が九月三十日の事故直後から十月一日の午前五時ころまで続きましたが、それ以降は平常の値になっていますので心配ありません。もちろん、外で遊んだり、布団を干しても大丈夫です。

Q 野菜や肉、飲料水などは安全なのでしょうか？

A 事故後に県および関係機関が、施設から約十キロメートル圏内の分析を行なったところ、人工放射線核種（核分裂により人工的に生成される物質）は検出されず、安全であることが判明しました。

また、久慈川や那珂川から取水している水道水や、東海村などの井戸水を測定したところ、人工放射性核種は検出されませんでしたのでご安心ください。

## 東海臨界事故の衝撃—— 世界一の原発基地「柏崎」から

桑山史子

私は東海村臨界事故を知り強い衝撃を受け、十月一日、市民ネットの運営委員会宛てに緊急会議の招集を呼びかけずにはいられませんでした。

### 1、市民ネットワークと住民投票を実現する会

〈柏崎刈羽市民ネットワーク(市民ネット)〉は、映画『ナージャの村』の上映を機に市民の声を市政に、と「プルサーマル反対」を掲げ、医師、歯科医師、芸術家、僧侶、医療関係者、会社員、主婦らが出会い、昨年の七月に発足しました。私は医師と共同代表に推され、民主的歩みを模索しながら、責任の重さに苦悩し、自由討議を経て市民運動を展開しました。アンケート、意見広告、チラシ配布や市長と市民の対話集会も開催しました。そして、二十三の原発の団体が私たちの呼びかけに応じ、超党派の〈住民投票

を実現する会〉が発足し、初のプルサーマルの住民投票条例請求の署名運動を決定しました。

吹雪舞う一月七日から戸別訪問、街頭署名、反対チラシや妨害的風評の中、お年寄りから子どもまでプルサーマルを語り、数々のプルサーマルドラマが生まれました。

市民の熱い思いは、有権者の三分の一、二万六千六百九十(実数二万五千二百五十八)人の署名を集め、三月十二日、市長に条例等の請求をしました。

議会では、賛成九、反対十九、市民の願いは否決され、国策の名のもとに中断されたのでした。

### 2、プルサーマル住民投票条例請求後の市民ネット

私たちは、署名に込められた多くの人たちの熱い思いに支えられ、新議員を誕生させ、今後の活動目標を求めました。七月にプルサーマル容認議員との対話集会、チエルノブイリで小児甲状腺ガンの治療に打ち込む菅谷昭氏の講演会等を開催しました。

この間、全国からのご支援、市民からの物心両面の応援、

市民ネットの和に支えられ、励まされて行動できたことは皆様のお陰と心より感謝しています。

### 3、柏崎女性の意識の変容

柏崎の女性は、「ひかえめ」等と評されながら、先輩女性多忙な中堅女性、子育て中の若い母親たちが市民運動を支え、市政に声をあげたことは、柏崎の歴史に記される画期的なこと。嬉しく思います。「かしわさき女性プラン推進市民会議」の取り組みや他の諸団体も互いに協力したことが、柏崎市民の徐々なる意識の変容となり、二十一世紀の市民時代に向けて歩みを進めるものと確信しています。

### 4、東海臨界事故と市民ネットの運動と活動

私たちは、今までの活動や経験があるからこそ、東海村の屋内退避、交通止めの暗い風景に柏崎を重ね合わせ、私たちの運動について討議し、次なる行動を展開できたと思います。

十月六日、市長に申し入れ書提出。九日、小淵総理、科

学技術庁長官、通産大臣、平山県知事宛てに申し入れ書を郵送。同日、教員全国平和集会の第二分科会で提案発表。十六日、チラシ配布、受任者への報告送付。二十三日、信州原水禁集会に提案発表。二十七日に市民ネット主催の市長と市民の対話集会を開催しました。

私たちは、マスコミの報道内容や東海報告、現地視察等を分析し、さらなる行動を起こしたいと思います。

### 5、プルサーマル中止と市政に市民の声を

柏崎市長は世論を受け、プルサーマル導入を一年延期することを表明しました。私たちは世界の脱原発情勢、たび重なる原発事故、核のゴミ処理に不安を持ちつつ、これを機にプルサーマル中止を強く訴えます。原子力災害の恐ろしさを知り、東海の教訓を生かした具体的な防災対策の見直しを柏崎市や国に求めています。

### 6、世界一の原発基地、柏崎からの発信

私たちは男女が共に参画する社会実現に向け、明るく安

心でできる生活をめざします。教育、福祉、環境、また東京電力の出資で造成を計画されている環境共生公園への現地視察、学習会、コンピューターの二〇〇〇年問題の学習会等を重ね、市政に市民が声を出し、柏崎の民主主義を本物にしたいのです。さまざまな市民運動を展開しながら、世界一の原発基地柏崎なればこそ、まずプルサーマル反対、国が原発廃止から新エネルギーへの政策転換を打ち出すまで発信し続けたいと思います。

——きれいな緑と豊かな土を守り、

命と心を大切にする市民運動をめざして——

（プルサーマルを考える柏崎刈羽市民ネットワーク）

## 巻町は今！

小林博子

私は、一九七四年から巻町に住むことになりました。そのころから巻町には、原発の話が出ていました。実際巻町は、東北電力から原発建設に伴う補助金や漁業補償を受けたという歴史があります。町行政は、いつも原発問題で揺れ動いています。そのことは、町の活性化や企業進出等に

も少なからず影響を与えてきたと考えられます。

一九九九年八月三十日、突然町長によって東北電力巻原発予定地の一部が原発反対派住民二十三名に売却されたという発表は、一般住民にも大きな衝撃を与えました。

巻町は、二〇〇〇年一月に町長選挙を控えています。そのため、〈巻原発住民投票案を実行する会〉のメンバーは、四月の町議選で敗北、過半数を制することができなかったことに危機感を募らせ、今回の町長選でも万が一負けて、町有地が東北電力に売却されることを恐れての行動でした。町長は、「これで町としては事実上、原発問題に終止符を打ったことになるだろう」と会見で話しています。

巻町の原発計画の経緯を「新潟日報」から見えました

七二年 東北電力が巻原発計画を公表

七七 巻町議会、建設同意決議

八〇 町長同意表明

八一 国の電源開発基本計画に組み入れられる

八二 東北電力が原子炉設置許可申請

国の安全審査始まる

八三 東北電力、土地取得不調により審査中断申し入れ

#### 九四 原発推進公約の町長三選

〈巻原発住民投票を実行する会〉を旗揚げ

#### 九五 自主管理による住民投票実施

投票率四五％、うち九五％が反対票

#### 九六 出直し選挙で〈実行する会〉代表が町長に当選

全国初、住民投票実施 六五％が原発反対

#### 九七 町電源立地担当窓口廃止

#### 九九 原発予定地の一部を〈住民投票を実行する会〉メンバーに売却

このように巻町の原発問題は、四半世紀という長きに渡って進められてきました。今、このように町有地売却という形で事実上原発問題に終止符が打たれたかに見えます。しかし、これを機に、巻町の町政はまた波乱を巻き起こす結果となつてしまいました。

巻町九月定例議会で町有地売却益千五百万円を含む本年度一般会計補正予算案が否決されました。補正予算には、福祉センターの整備・五月に風害に遭った農家への被害対策費等が盛り込まれていました。予算案が否決されたことは、町民の生活に直接関わるだけに批判の声が上がっています。

そんな中、来年一月の町長選に現職の他に前農政課長が出馬表明をしました。前農政課長は「原発論争で町は疲れている。もめない町政を」を公約に掲げています。現町長の「原発最終決着」に対し、前農政課長は「住民投票で原発は終わった」と原発問題を避け、町の活性化を争点とし、「私が町長の間は巻原発建設はない」と明言しています。しかし、将来的には「住民の原発建設の声があれば、再度住民投票を行い、住民に判断を委ねるべきだ」とし、先の住民投票結果が絶対ではないことを語っています。さらに、原発推進派が支援していることもまた事実です。

巻町で町有地売却劇が繰り広げられている九月三十日、茨城県東海村で放射能漏れがあり、三人が被曝して倒れたというニュースが報じられました。その時の巻町の反応は、今一つ緊迫感が薄い思いがしました。身近にいる町民の反応もそうでしたが、町長自身、新潟日報のインタビューに対し、「不幸な事故だ。巻町は、住民投票での町民の選択が間違っていないことが証明された。農水産物への被害も甚大と聞いている。推進派の唱える『原発は安全だ』の理論は崩れた」と話しています。原子力被害の怖さを巻町

に置き換えて、今後のあり方を考えるのではなく、巻町にはまだ原発はないから「東海村の事故は他人ごと」と捉えているようにしか私には感じられませんでした。

チエルノブイリで原子力事故が起きた時、原子力の破壊力のすごさ、人体だけでなく地球規模に関わる影響力の怖さを感じました。

が、しかし、まだ国外のこと。直接自分には関係がないとして、安易に客観視していた日本国民と、東海事故への巻町の反応は同じではないかと思いました。

今回の事故は、原子力の怖さを改めて国民全体に認識させ、その影響力の重大さを実感させたと考えます。

日本のエネルギー現状を考えた時、原子力に頼らざるを得ないことは残念ながら事実のようです。太陽光発電や風力発電も開発されてきていますが、まだまだ実現にはほど遠いのが現状です。原子力に頼るには、まず安全性の問題を最優先に考えることを願いたいと思います。

人間の作るもの・人間のすること、完全ということはありません。原子炉にしても、建物にしても老朽化は防げません。気がついたら日本沈没などということにならないことを祈りたいものです。

## 東海村臨界事故に思う 佐藤志津

六十七名の被曝者、周辺三千九百五十人の避難、二百メートル以内の立ち入り禁止、三キロ周辺の道路封鎖、十キロ周辺住民の屋内退避——という(株)JCO東海事業所ウラン加工施設での臨界事故が九月三十日に発生した。もともと臨界事故を想定せず原発のような施設とは違って十分な安全域が設けられていなかったこと、臨界状態の把握が遅れたこと、退避勧告が遅れたことなどにより、多くの被曝者を出してしまった。

周辺住民は数時間、ガンマ線と中性子線にさらされ、体内から放射化されたナトリウム24が検出された。中性子線に直接さらされたと考えられる周囲五百メートルの範囲には、百七十軒以上の民家やゴルフ場や畑、公道があり、中性子線の飛行痕跡はさらに三キロ先でも確認されている。ところが施設周囲の住民が退避した場所は事故現場から一キロ。彼らは、全く無駄な避難をし続けたことになる。

制御のきかない臨界状態が、原子力事故史上例のないほど長時間持続し、しかも現場には誰も近づけず、状況の把



握さえできない。したがって、容器の損壊や破裂、それに伴うウランや核分裂生成物そのものの飛散という事態も当然想定内に入れなければならない。作業員は、その間近に行って、大量の中性子線被曝を避けるために二分おきに交代しながら、何度も試行錯誤を重ね、バルブを開けたという。それでも臨界が収まらず、パイプを破壊し、冷却水を抜き、やつとのことで臨界を終息させた。こうした作業員たちの「決死」の作業があつた。そして被曝者を増大させた。

三名の大量被曝者、うち一人は死に至つてもおかしくない線量を被曝したという。他の二名も放射線急性障害で入院したままだ。また、事故の実態が明らかになるに従い、当初四十九名だった被曝者が六十九名にもなった。しかも事故直後に突入した十八名と後にホウ酸水を入れるために入った六名は「計画的被曝」だから、その中に含まれていないという。

企業の「合理化」のために、日常的な「安全基準違反」が行われ、そのための「裏マニュアル」まで作成されていた。社員はその「裏マニュアル」を違反行為だとは思つていなかったという。実際に作業する人間にはそのことを伝えず、そこから遠く離れ、何食わぬ顔で、その作業に指示

命令をしていたと思われる会社上層部の人間に、私は大きな憤りを覚える。「事故の被害を最小限に抑えようと思い、自分が被曝するかどうかなんて考えていなかった」——事故発生直後に突入した社員の言葉である。原子力施設の現場で働く労働者は直接的には加害者なのかもしれないが、被害者でもある。同じ働く者として、彼らの「こんな苦じゃなかった。こんなことは聞かされていない」という叫び声が聞こえてくる。労働者に「企業戦士」を要求するだけでは物足りず、安易なリストラを行う企業の姿勢がこうした事件を引き起こしたのだ。多くの反対の声を無視して、労基法や派遣法を改悪し続ける現在の労働行政の行き先が、こうした原子力の事故だけではなく、多くの労災事故を再発させないと誰が保証できるというのか。

どんな机上の「安全基準」を講じても、原子力施設での事故は常にその「想定外」で起こるということが改めて明らかになった。もはや、原子力行政は原子力政策そのものの全面的見直しを行い、そこからの撤退を選択すべきである。それを実現するのが、今に生きる私たちの課題であることを改めて決意させた「東海村臨界事故」だった。

## 臨界事故翌日、泊原発増設反対行動へ

谷 百合子

ついに核爆発事故が起きた。住民の皆さんの健康が気がかりである。

原発を良しとしてきた人びとは、どう考えているのか。例えばたくさんの方の被曝労働者を出したJCOの重役たち。ずさんな管理を見逃していた科学技術庁の役人。長いものに巻かれて住民の安全を軽視していた村長たち。もうあたたちのウソは実証された。

札幌では事故の翌日、北電と道庁に四十名弱の女たちがつめかけ、言いたいことを伝えてきた。十二日も北電泊三号機増設反対・東海村核事故でデモをする。今こそ皆で原発・核燃を攻める時！

北電社員が手を回して公聴会の根回しをした。裏工作をやればやるほど、ウソが見えてくる。原発・核燃をなくして、ほんとうの生き方をしよう！

(札幌市)

## 水道の専門家として感じたこと

佐々木 春代

私は水環境、特に水道部門の専門家です。札幌市職員を三十一年やっており、六年ほどまちづくりと都市問題に取り組んだ以外は水道一筋でやってきました。

さて、東海村の事故は、ちょうど出張の帰りに羽田の待合いテレビで知りました。

真つ先に感じたことは、作業員に作業工程の意味合い、全体工程の中での位置づけを教育していなかったのでは、ということ。会社ぐるみで、過失ではなく、明確な犯罪行為をしていたということが明らかになってきましたので、感じたことは全くその通りだったわけです。

ですから、今回の事故は、事故というよりは、事件であって、もう論外なのですが、どのような場合でも人間が介在する限り、間違いを犯すのも人間なら、危険を察知して対処するのも人間なので、対処できるように人間を

教育するのは、どんな現場においても鉄則です。

設計をやった立場からは、万一の事故を想定した対応措置が必要ということです。私の経験で言えば、浄水場の施設や設備の設計の際、バルブ故障で水が止まらなかった場合、あふれ出る水の量を想定しその影響を最小限に食い止めるための対策を講じておくよう提案したのですが、時の直属上司は「二重三重に安全対策を講じているので、そのような事故は起きようが無い」と、頑として受け入れませんでした。事故はあつてはならないものですが、万一あつたとしたら、被害はこの程度ということも予測しておくことが必要です。

国等の監督官庁の責任によって、施設設置時点はもとより定期的検査が必要なのですが、ずさんであつたことも明白になってきています。ただこの場合、なんと言つても事業者のモラルがなければ、監督官庁の人員をいくら増やしても、限界があるのも事実です。危機管理の観点から、監督官庁は事業所の安全対策についての指導監督とともに、万一の事故時の被害予測に対しての指導監督こそ必要ですし、そのことが情報公開されることが肝要でしょう。

情報公開を前提として、一般論としてはリスクの観点を

私たちは持つ必要があります。生まれた瞬間から死ぬまで、人間にとって絶対安全ということはあり得ないのですから、例えば事故時の被害予測とその対応を認識したうえで、その諾否を含め、次のステップを論じていく必要があると思います。

(石狩市)

#### ▼泊原発三号機増設「反対」「慎重」が七六％に

北海道新聞社は十月十六・十七の両日、北電泊原発（後志管内泊村）三号機の増設計画について全道電話世論調査を行った。同計画に対し、反対・慎重派が計七五・六％（反対二一・六、慎重五四）を占め、賛成・容認派の計二四・四％（賛成三・四、容認一七・六）を大幅に上回った。茨城県東海村の臨界事故や北電の賛成工作問題以降、三号機への考え方が変化しかとの問いには五二・二％が「変わった」、二二・八％が「増設に一貫して反対なので変わらない」、一一・二％が「一貫して賛成なので変わらない」と答えている。「もつと慎重に議論を」と答えた人のうち、臨界事故と北電の賛成工作で「慎重に変わった」としたのは六七・七％、「増設反対」の回答者も、臨界事故などを機に「変わった」人が二六・六％いた。それまで三号機に対して柔軟な姿勢だった人が、厳しい姿勢に転じたことがわかる。

（十月二十日 北海道新聞から）

それは真つ直ぐ私に—— 斎藤千代

九月三十日、仕事先の宿で、深夜、テレビをつけた。

NHK総合。繰返し危険範囲を伝えるモノトーンな声。

不可解だった事実がしばらくして見えてきた。東海村で、

ついに事故!「四十年前から、市民はあれほど反対し続け

てきたのに」という口惜しさが燃え上がるその向こうで、

「これで推進の勢いは落ちる」——希望の光もチラと灯った。

その瞬間、この何年か、心の中から消していた一人の女

性の目の光が、声が、強く心に迫った。

\*

四十を過ぎたその人は、アルバムを一枚一枚めくってつ

ぶやいた。「この人も死にました」「この七人も」「この四人

も……」——アメリカ・ニューメキシコ州、アルバカーキー

から五百キロ、無人の原野をバスに揺られてたどりついた

ナバホ居留地。ウラン採掘現場を訪ねる旅で、宿主は、あ

ふれる思いを語り明かした。先祖伝来の聖なる山、掘れば

世界の終わりと伝承されて来た山すそを、集落こそって掘

らされた。「何か」を掘り出した残土は山積みになる。伝統  
のティピの代わりに、その土で土壁の家を造らされた。

採掘に当たった男たちがまず死んだ。そして土壁の家の

中で暮らし続けた子どもが、老人が、女性が、一人ひとり

消えていった。

「あなた方はなぜネオンサインが必要なのですか。なぜ

エスカレーターが。なぜエレベーターが……」

やさしく穏やかな女性の、まなざしだけは厳しかった。

「もっとひどいこともありました」——続く話には、耳を

疑った。七一年に、三人の若者が、生きながらバーベキュー

にされたという。食べられたわけではない。が、屈強の若

者が猛火の上で身悶えするのをヘインディアン・ダンス」

と白人たちは手を打って笑いさざめいたという。

「二八七年ですか?」「いいえ、一九七二年、十年前で

す」「なぜ、そんなことを」「娯楽です。このあたりには娯楽

場もないので」「訴えなかったのですか」「できなかった。誰

も英語を話せなかった。私はそれから必死で英語を覚えた。

でも、今でも集落で英語が話せるのは私一人。だから、私

たちの悲しみが伝わらない」

先住民の集落は居留地と呼ばれる。英語では *reservat* *land*。政府と取り決めた、ほんの数百坪にしか住めないのだ。五百キロ四方を自在に駆けていた人びとの困い込み。原爆と原発の思想は、その時すでに始まっていたのだ。

\*

十月初め、『朝日』の「ひととき」に三十代女性の投稿が載った。「日本の電力の三割は原発。一日三割を節約すればいいのだが、冷蔵庫も掃除機も洗濯機も、もはや手放せない」という趣旨に、「ネオン」は必要か、深夜テレビは……」反論をすぐ投稿しようと思いつながら、しなかった。

十月七日、日本山妙法寺の寺沢上人は、チェチェン・キルギスの危機を説いて、「五月のハーグ国際平和会議で千載一遇の好機を逃した」と繰り返された。ハーグには日本からも沖縄、大阪はじめ四百人の活動家が参加、「世界秩序のための十の基本原則」の第一に「日本国憲法九条の理念を各国で採り入れる」が掲げられた。大成功を喜んでいたので、「会議はチャッティングに終始した。市民運動は敗北した」と、上人の言葉は厳しかった。穏やかで心温かなチェチェンの村人たちが反戦行進をした翌日、ロシア軍はその

全員の虐殺した。女性は余さずレイプされた後の虐殺だった。その実状を見た上人は、「市民の行動以外ない。一刻も早くすべての武器を捨てることを全世界に要求しなくては」という思いがたぎり満ちあふれていたのだろう。

顧みると、戦後五十年、私も一日も安らかな思いをしたことがない。平和を希って全身全霊、努力を重ねたつもりでいる。しかし、現に、臨界についてナバホの思いを伝えようと思いつながら投稿しなかった私。大型冷蔵庫に換え、食物を腐らせている私。一つ一つの小さな怒りが、東海につながっている。「臨界の怖さは無限」と、反核・原発に立ち上がった湯川博士。中性子発見者の母国で起きた最悪の事故を陰で支えた一人が私なのだ。

怖いのは核だけだろうか。人気絶頂のコンピュータも、その落とし穴が二〇〇〇年問題でクローズアップされた。それは、危険は二〇〇〇年一月一日だけではないことを明らかにした。倍、倍の勢いで成長するコンピュータ社会の正確な成長予測はない。小学校からパソコンを必修科目にするという日本。暗算も記憶力も衰えた人間が、停電の度にうろたえる可能性は考えられているのか。

インターネットにしても、使用人口が千倍万倍と増える

につれ、想像を超える悪用も次々に開発されていく。そして英語は今や世界人の必須学習語に。英語を母語とする者の圧倒的な支配の下で、話せる者、話せない者、ハードを持つ者、持たない者の格差も拡大する一方だ。

欧米は二十世紀を「奴隷と植民地を無くした世紀」と評価したという。奴隷も植民地も、それ以前の何百年かの産物。共に十分すぎる収奪を果たして終焉したに過ぎず、それに根ざす差別と利権の思想は、ますます勢いを増した。その土壤を引き継いだ二十世紀は、石油が自動車と飛行機を生み、それは戦車と爆撃機になった。そしてウランから原爆と原発が生まれた。人間と自然を破壊した二十世紀の過ちを、次の世紀に回復し得るだろうか。

政治が悪すぎる。それを批判しながら、信頼できる政府も国会も持てないのは、疑いもなく私たち自身の責任だ。

「ネオンは必要ですか」——臨界事故が思い出させたあの一言をかみ締めて、行動するほかないと思う。

## 臨界事故とY2K

芦澤礼子

「結局日本人はサ、二〇〇〇年問題で原発や核兵器が爆

発しないと、その危険さがわからないんじゃないの」——物騒な発言だが、これはブラック・ジョークではない。この数年来、沖縄をはじめとする平和問題に取り組んできたグループで学習会をした時の発言だ。「人が死ななきゃわからないかもね」と言いたくなるくらい、世間の動きは鈍い。周辺事態法、盗聴法 e t c……に反対して行動していたこの夏も、この鈍さに何度歯噛みしたことか。

東海村臨界事故後、世間の風向きは多少変わったように見える。世論調査でも原発推進「反対」が飛躍的に増えた。かといって「不便はイヤ」なのが、世間のホンネでは、実質の変化はとも期待できない。狭い国土に五十二基も原発を抱え、「原発なしでは暮らせない」と教育されてしまった日本人は「なしでも暮らせる」と発想を根本的に転換する機会がなければ、臨界事故直後は騒いでも「便利な生活には代えられない」と、すぐに忘れてしまうだろう。

そこで、冒頭の二〇〇〇年問題(Y2K)の話に戻る。

今までの反原発運動に加え、今回の臨界事故の二か月ほど前から「原発と核にお正月休みを!」という市民グループのキャンペーンが始まっていた。また、二〇〇〇年問題を市民の立場で考えようという〈Y2K市民ネット〉も立ち

上がつていた。事故後、これらのグループが主催する市民集会をはしごして回ったが、どこでも「臨界事故でY2Kにおける原子力施設の誤作動の可能性は一桁上がった」と言っていた。もはや誰もが「ヒトゴト」では済まされない。私は一時期、相当焦った。原発一基に使われるコンピュータは約十万個、ひとつのマイクロチップの誤作動が事故の引き金にならないとも限らない。点検作業はきつと二〇〇〇年には間に合わないだろう。事故が起こればどうなるのか。「人が死ななきや危険さがわからない」と言っても、やっぱり犠牲者が出るのはたまらないし、私だって死ぬのはイヤダ！

十月末に〈Y2K市民ネット〉の集会で中川一郎さんの講演を聞いて、その焦りが多少落ち着いていた。中川さんはカリフォルニア州バークレイにお住まいの精神科医で、Y2K対策が最も進んでいる米国の事情に詳しく、「今からだってできることがある」と強調した上で、Y2Kは今までのエネルギー浪費型生活を根本から問い直すきっかけになると語った。それには、個人だけではなく、コミュニティ単位でのデイスカッションと準備が欠かせないという。地域全体で食料備蓄などに取り組みながら、生活の質的転換をしていくというわけだ。コミュニティが崩壊しかけた日本

にとつては、別の意味でもチャンスかもしれない。

鹿児島島の小川みさ子さんは、ソーラーシステムを家に取りつけ、昼間は九州電力に電気を「売っている」そうだ。みさ子さんほど徹底してない私でも、この暑い夏にクーラーなしで過ごした実績(?)をつくり、ちょっと自信がついた。電力の七割は企業の消費だそうだから、余分な冷暖房は使わないよう投書するのも有効かもしれない。「一九八七年当時の電気使用量に戻れば原発は必要ない」という情報なども、みんなで共有していくことが大切だ。

電力会社は原発がどう転んでも不経済ならやめざるを得ないだろう。二〇〇〇年が転換の契機に本当になればいいのだけれど……ついでに核兵器にもオサラバできれば、もっといいんだけどね。

◆〈Y2K市民ネット〉の連絡先は

TEL 03・3291・5131 (市民ネット情報

センター) <http://www.mediaforest.com/y2k>

十二月二日現在、全国で四十四グループがある。

◆「原発と核にお正月休みを！」国際署名を継続中。

お問い合わせは〈Y2K WASHキャンペーン〉へ。

TEL 03・5345・5618

## 緊急座談会 原発なしで暮らそう！

A 小川みさ子(鹿兒島市議) C 島原 良子(川内つゆくさ会)  
 B 浜田 正枝(喫茶店店主) D 高崎ひろみ(反原発ネット・川内)

A ついに日本でも大変な事故が起きてしまったわね。うんざりの議会空転中にテレビ速報を見てビックリ。さっそく原子力資料情報室や全国ネットに連絡して、何ができるのか情報交換し、もういてもたってもいられない思いで、FAXや電話が飛びかい、皆して徹夜で申し入れ書づくり。

B ビックリしたね。五十二基の原発ばかり気にして、日本にウラン加工工場が八か所もあるなんて知らなかった。もっとビックリなのは、町工場のような民間施設で高濃度ウランを扱ったこと。社員は「放射能の恐ろしさ」に自覚がなくて、「裏マニユアル」がさらに手抜き工程となつて、臨界事故が起きてしまったというじゃない。

C はじめ、被曝者三人からどんどん増えていって、原発関係の事故ではじめて

国の被害対策本部がつくられた。私、ハッシューベルトの放射能を浴びたと聞いて、目が点になった。だって八百〜千レムよ。〇・五〜二十五レムで晩发性傷害といつてガン発生率が高くなり、六百レム以上じゃ全員死ぬそうですからね。重症の作業員の安否が気になるわ。

A 今後は、通産省や科技厅、そして原子力安全委員会などの対応をチェックしなくちゃね。「起こり得ぬ事態」とか「想定外の事故」が起きたのは「人為ミス」とか「会社の責任」と、責任逃れされちゃ困るわね。共犯なんだから。

D そうよそうよ。動燃の九五年「もんじゅ」の事故や、九七年東海村核燃料施設爆発事故が起きてても、「防災の見直し」や「安全協定の見直しや締結」がされないどころか、七年前から定期検査もされていず、バケツ使つてたつていうじゃ

ない。動燃はイメージダウンしたので名前を変えたのよ。そんなことがまかり通るのも、日本の原子力産業のおこりよね。

B 臨界つて意味が今度の事故でよくわかった。放射能つて見えないし、におわないし、アラームでも鳴らないと誰も気づかないというのが怖いね。九電のCMの大林宣彦さん、こんな事故があつても自分が何やつてんのか気づかないのかな？

D 御用学者だつて、いまだに「原発の事故じゃないのだから、何も十キロ圏内三十一万人が避難することなかった」とか、「JRまで止めることなかった」なんて言っているんだもの。あきれちゃう。

チェルノブイリやスリーマイルの事故よりレベルが低いって本当かしら？と不安になるわ。

C 人工島(あごら252号に掲載)も同じだけど、御用学者や土建政治家がわ



んさかいて、命よりお金だからね。

A 事故の対応の遅れには、またかと思つたわね。学校長のほうから役場に電話したとか……もう時間が勝負なのにね。一律にすみやかに知らせてほしいわ。野中官房長官は自分の認識の甘さを反省してか、あとでやりすぎと非難されようとも、と言って、十キロ圏内避難勧告を出すことになったのよね。

B とにかく、私たちが訴えてきたヨード剤の備蓄。九月三十日だけで何と五万錠売れたそうよ。これを契機に脱原発政策をとらなきゃ、世界中の笑い者になるよ。

D ホントに。原発を廃炉にしても、すでにたまっているやっかいな廃棄物の処理方法だって確立してないんだものね。コスト計算にも入ってないしね。

A 事故のたび、ヨード剤の備蓄、根拠のない防災範囲見直し、増設阻止など質問してるんだけど、お題目のように「国が国」と繰り返す市長に、しつこくかみついてます。八月二十五日の川内原発

一号機トラブルと二号機定検のための停止で、私たちは原発なしで停電もしない八夜を過ごしたのよ。自信をもって原発なしで暮らそう！ 廃炉をみんなで訴えていきましよう！（まとめ 小川みさ子）

### （緊急申し入れ）

鹿児島県知事 須賀龍郎殿

川内つゆくさ会

島原良子

日本婦人会議鹿児島県本部

蓮尾悦子

自然の灯をともし原発を葬る会 小川美沙子

いのちと未来を考える紅茶の時間 山中 薫

チエルノブイリ支援かごしま 川口柳子

私たちは、原子力発電所、核燃料施設に

おける予期せぬ事故に危機感を抱いている女性たちを中心とした市民グループです。

昨日九月三十日午前十時三十五分に発

生した茨城県東海村の核燃料（ウラン）

加工施設での国内初の臨界事故で、原子

力政策に不安を抱く国民の恐怖感が極限

に達したということは、論を待ちません。

私たち鹿児島県民は、川内市に二基の

原子力発電所を抱えており、昨年十一月には、十五年の営業運転来、初の自動停止、この八月二十五日には、初の自動停止という思いがけない川内原発のトラブルに遭遇し、原発の増設計画・プルサーマル計画の中止を訴え続けてまいりましたが、今回のこの事故は世界の潮流と逆行した、原子力政策を推しすすめる日本への最後の警鐘ともいわざるを得ません。そこで緊急に、通産省、科学技術庁、原子力安全委員会ほか関係機関に下記、要請していただきたく、ここに申し入れます。

### 〈記〉

- 1 事故の徹底究明とその情報公開。
- 2 事故現地住民の救援対策の強化。
- 3 原発事故の防災範囲八〜十キロ圏内の見直し。
- 4 自然エネルギーへの転換の緊急とり組み。
- 5 原発のプルサーマル計画の中止。
- 6 西暦二〇〇〇年問題に関する原発停止の徹底。

# 新潟の女性はいま—— 重い慣習の中で 歩み続ける女たち

〈出席者〉

今井 恭／植木知枝／倉元正子／斎藤千代／鈴木勢子  
南雲和子／丹羽昭子／藤田美恵子／室川 則

1997年7月26日 新潟ワシントンホテル

戦後強くなった女は、いま破竹の勢いのように見えます。けれども、さまざまな慣習が地方にはまだまだ残っていて、都会と地方では、十年から十五年ものへだたりがある部分さえ感じられます。

女性史研究などに早くから取り組んできた新潟の女性たちにさえも、大きな桎梏（しごく）が——。

これは二年前の記録ですが、貴重な発言が山ほどありますので、ご紹介することにしました。

## 学校も自治体も、自衛隊を支援

鈴木 私自治体、上越・青海町が自衛隊に子どもを入れている父兄の会というのを、公的な予算を取って支援しているんです。父兄という言い方もおかしい、と議会で質問したんですが、この組織は全国組織で、各自治体が応援していることに、町議会の議員をしていて気づきました。隊員になると二年二百万、二年で四百万貯まるということに、魅力を感じている親もいるそうですが、県立高校に「自衛隊に入りましょう」というポスターを貼っているのもおかしい。

丹羽 上越地区の高田や新発田地区は旧連隊のあったところで、今も自衛隊があるところだからかな、という気がします。私は新潟市内の県立高校に勤務しており、五年間進路担当でした。自衛隊から募集の挨拶に学校へ来られました。結局一人も行かなかったし、ポスターも貼らなかつた。鈴木 地域性もあるのですかね。

室川 以前には求人が多かったので自衛隊員のなり手がいなくて、卒業予定者の家の戸別訪問をしていたことがあり、当時の募集担当者に「違法ではないか」と申し入れたと聞いています。最近はわかりませんが、就職難ということが入隊する生徒がいるのではないのでしょうか。

斎藤 手話で、自衛隊は「十六」という数字で表わすのだそうです。十六というのは昔の新発田連隊が十六連隊、模範的な強い軍隊だったからだという話を聞いたことがあります。地域性もあるのかもしれないですね。

日本は、軍閥のことも旧軍隊のことも、きちんと検証していないので、自衛隊もいつまでも望ましい姿にならない。日本が戦争への道、戦争の現実を明らかにして謝罪し、軍備を全く持たない国の理想像を示して、二千万人の犠牲の上に、日本は軍事力のむなしさを知り、生まれ変わったの

だ」と言い続けていけば、戦場や戦災で命を失った方々も救われるし、被害を受けた人びとの心も安らぐのでは、と思えます。「どこの国からどんな圧力をかけられようとも、非武装中立を守り抜く」というかたちで謝罪しないで、出征したすべての人を軍国主義の手先のように言い続けたら、遺族は耐えられない。平和運動の側にも問題があるのでは、と反省しています。「自賛史観」は、そんな風にして駆り出された兵士の事にも、戦争を推進した原動力にも、迫っていない。また、戦前も、戦中も、戦争への抵抗の歴史もたくさんあったのに、それも記されていない。A級戦犯の岸さんが戦後十二年で首相になったなんて、外国の人に話すと、まさか、冗談でしょう、と必ず言われます。植木 そのへんからきちんと研究し、子どもたちにも繰り返し教えていかないといけないのですね。

南雲 平和教育そのものが抑圧されるようになった今は、ほんとに恐ろしいですね。

**女性が労働に深く関わりながら、発言権はない**

鈴木 〈新潟女性史クラブ〉のレポートを読むと、新潟県

の女性たちは、先駆者であつたと言われていますね。

齋藤 北陸や信越の女性の就労率は全国有数で、一位が福井、石川が三位、新潟も高い。伝統的に女の人たちが、農業をしたり、行商をしたりして働いてきました。働いてきたから、実力者でもあつたし、発言権もあつたはずなのに報われていない。

植木 働いてきてそれなりに家庭や社会に経済的に貢献しているのに、公的な発言をする場所では尊重されていないということはどういうことなのでしょう。経済と女性の地位が比例せず、地域や家庭の中で、女性はいつまでも旧態依然とした状態にある。

斎藤 東北地方の女性とも共通項があるように思います。忍耐力が強く、耐えることが美德とされる。「家」や「村」の縛りも強い。

倉元 貧しいということは、教育にもつながると思います。

室川 新潟県は今、大学進学事業を推進して進学率を上げようとしています。進学率で男子は全国的に見てそれほど劣っていませんが、女子が最低レベルで、結局女子の進学率を上げれば、課題は達成されると思うんです。しかし、女子生徒が進学したいと言っても、親のほうで女子は四大

まで行く必要がない、短大で結構だ、という土壌がまだまだあると思う。

鈴木 経済事情だけでなく、親の考え方も関係している。

倉元 明治の頃に他と比較にならないくらいに小学校の就学率が劣っていて、十数パーセントしかなかったといいます。貧しいなかで、子どもがたくさんいて誰を学校にやろうかという時に、女の子には労働をさせて、金のかかる学校には男の子をやるという環境だった。

室川 女子の就労率が高いということは、就労しなければ家庭の経済が維持できないから、やむをえず働いてきたということもあるかもしれない。

藤田 新潟県ではM字型の谷が低いと言われています。カーブが「台形」に近いということです。子どもを見てくれる年寄りがいるなど、核家族でない家庭が多いということではないかと思っています。

鈴木 でも、最近では農村でも、同居の祖父母が子どもの面倒を見ることが通じなくなつた。実体は違つてきているんです。新潟県では年寄りの自殺率が一番高い。役に立たないなら、生きていてもしょうがないという考え方もある。

倉元 難病と言われている病人で、呼吸器をつけなければならぬということになったとき、つける選択をするのは圧倒的に男性が多いそうです。統計をとったわけではないけれど、女性をつける人が少ないという事実は、どういふふうにかえたらいいのでしょうか。

植木 年金と関係があるのではないですか。給料取りだった男性は、年金があるから大切にされる。

倉元 そうではなくて、誰かの世話にならざるを得なくなると、女性はどこかで自ら身を引いてしまうのではないかしら。統計的に表れないところに、女の現実があるように思います。

斎藤 それは重要な指摘ですね。

## 経済至上主義の中で阻害されがちな高齢者

鈴木 新潟県は端から端まで三百キロくらいあるけど、糸魚川市のように国道が海に沿っている地域では、交通事故が多いんです。海岸沿いの民家と民家の間に海岸線に沿って国道をつけたから、向かいの家に行くのにも、国道を横断しなければならぬ。一直線なのでメインストリート事

故を起こす。その中には、事故をよそおった自殺も多い。事故で補償のお金が残せるからじゃないかと言われている。遺書もないので不明ですが、年寄りの事故死があまりにも多いんです。

斎藤 ええっ……絶句します。現代の檜山節考ですね。

鈴木 斎藤さんが長野県の土石流災害について『あごろ』に書かれたので、私も六月に慰霊に行つて来ましたが、十二月の真冬に六十歳前後の女性が働かなければならない現実について、考えさせられました。山間地の真冬の工事現場で働くこの現実って何だろうと思った。

斎藤 二十代、三十代でも、女が工事現場で働くということとは大変な事ですね。今頃の若い人がやれないから、「辛抱強い戦中派」みたいな人たちが行つてやっていると聞いて、あれは本当にショックでした。六十になった人が何でそんな山奥に行つて働かなければならないのか。そういうことに日本の女性運動は光を当ててないでしょう。私自身、何十年も女性運動をやりながら、そこまで手が届かなかつた。すごく恥ずかしかった。申し訳なかつた。

北京会議以降は、女性運動がとくに脚光を浴びて、エンパワーメントとかアンペイド・ワークといった話になると、

ひどく熱心になる。そういう主流に乗らないと、女の運動をやつてないみたいな風潮になっているのが怖いですね。

一番本質的な事を考えるべきだと私は思う。今うかがった檜山節もどきなども、なんともすごい話ですよ。それが、今日の日本の現実なんですね。

鈴木 経済的な理由で働かなければならない人ももちろんいると思う。でも、最近気がついたのですが、経済的には働かなくてもよいのに、家に居づらいということもある。

斎藤 お嫁さんとの折り合いが悪いために？

鈴木 そうばかりとは言えないけれど、家族構成全体で、元氣だったただで現金を得てこようというのが、暗黙のうちにあってはいませんか。女も家の中で役に立っていたいし、存在感も欲しいのではないかと思うのだけど、家制度そのものにそういうところに追いやるものがある。

斎藤 昔は少なくとも老人は尊重されていたのに。

鈴木 私は一九四四年生まれですが、私の祖母たちは子守をしたり、蚕を飼ったり、農家では家の仕事もいっぱいあった。私が生まれた時は、父は出征して、家にいなかったし、母は畑をして働いていて、私は曾祖母さんに育てられました。曾祖母さんでさえも仕事があった。

今の家庭を見ると、孫自体がお祖母さんの存在を許さなくなっている、と最近気がきました。農協の婦人部などは、皆さんとてもリッチで、海外旅行などをして、着飾って指輪などをして出かけていくけど、実際、そういうことができるんですね。農協が農民を食い物にしている面もあるのですが、それに農家の女性がのっかっている。そういういいものを身につけるために働く。蒲原の場合は農業だけで生活していけるのに、私たち山間部に住んでいるものは専業農家はまずいなくて、ほとんど兼業で、現金収入を得ています。だから、元氣だったら五十歳、六十歳になっても土木作業に出ていく。3Kに若い人が来ないので、日本の公共工事というのは、だいたいそういう年寄りや地方の出稼ぎ労働者で成り立っている。底辺で支えているのはエンジニアでも何でもない人たちなんです。これは何なんだろうと思う。

家族という家制度も疑問ですが、一人ひとりが家族という形を作っているだけで、本当の家族ではない。昨日も『朝まで生テレビ』に鳥山敏子さんと弁護士山田さんが出演していました、鳥山さんは「十四歳の冷血と少年法」というテーマに対して、「こんな題だったら来なかった」と

怒っていました。大島渚監督が「今マスコミや社会がおかしくなっている。A少年の親と学校の先生がまず謝るべきだ」と発言したのに対して、鳥山さんが「謝るって誰に謝るんですか」と言ったら、大島氏曰く「私たちにですよ。」

私たちに迷惑をかけているから。(ため息、あちこちで。「少年が脅迫文を書いた心の中にまず入っていかないと、同じことを繰り返してしまう」と、鳥山さんは反論していましたが。

南雲 国際医療福祉大学の宇田教授は、精神分析学の教授ですが、この少年にも問題がある、と言っていましたね。

鈴木 「一見豊かな家族構成に見えるが、本当の家族ではない」と鳥山さんは言っていました。私たちの子どもの頃と違って、こんなに豊かになって、知識に触れて知識を眺めながら、みんな知ったかぶりをしている。子どもの事もみんなわかっているつもりで家族構成をやっている。

女性問題もまさにそうです。国連とか北京とかの情報には非常に一生懸命になっているが、足もとはどうか。長野の土石流事故を地元では女性問題とは別に捉えているが、斎藤さんはそれをきちつと捉えている。上越市では外国人花嫁が多いが、それは農家の配偶者がいなくて向こうから

来ているのです。北京帰りの人たちは世界の女性と手をつなぐとしていられるけれど、自分の住んでいる足もとの問題をどう捉えているのだらうと、時々慨嘆したくなります。

## 「角を立てたくない」生き方の中で

鈴木 中央から流れてくる女性問題、女性史。明治の新潟の女性たちは先駆者だったのに、今は情報を受けているばかりで、発信していない状態ですね。これをどうやったらという方法はまだわからない。上からのものを受け入れるだけだったら、まさに男性社会と同じだと思う。

斎藤 お上の指示通りのシステムの中で女性学をやるから、すごいエネルギーで勉強しているのに、世の中を変える原動力にならない。それがもどかしいですね。

植木 就労率の経済力と女性の社会的地位につながるという問題に戻ると、働いてお金を持つてくることは喜びだし、生活するものにとつては有利なことですが、何が不足しているかというと、いわゆる人権意識が足りないのではないか。「私はこう思う」という発想の前に「お隣はこうだから」という生活の仕方が感覚とつながっている気がする

るのです。

鈴木 女性議員は上越が一番少ない。村社会では皆と半年雪に埋もれて、一緒にならないと生活できない。男は皆で連帯、同じ傘の下に入っていたほうが全体がうまくいくという考えがこびりついている。変革とか新風とかはとんでもないという考えです。したがって妻もそうで、九一年統一地方選の時、上越二十市町村に女性議員は一人もいなかったんです(以前いてその後ブランクがあった)。私はシングルマザーなので、高学歴の専業主婦に「離婚した女性」という見方をされた。働いている女性たちは「議會を身近に感じた」とか、「頑張つて」とか、同じPTA仲間が出た、という見方をして応援してくれたのです。

「皆が同じ方向で、同じに染まっていたほうが雪国は生きやすい」という村社会の環境は、教育からしてそうです。上越、下越の学校はすごい。昨秋、元校長が教育長になったので、十二月議會の一般質問で「男女混合名簿の推進を」と資料を用意して提案したら、答弁は「小、中一斉にやります」と言うので、それ以上言えなかった。それから半年経ちましたが、全然進まない。教育長のところに行ったら、校長会の先生方が「何を考えているのか」という。これで

変えて行くのは大変です。高学歴だから意識が高いとは思えない。

斎藤 そういうことは、女の運動を長年やっていて、私もとても感じます。高学歴の女性はたいていお連れ合いも高学歴で大企業に勤めているから、住んでいる社会が違う。奥さんも準社員みたいな役割をしている。

植木 私もあなたと同じなのよ、と周りにあわせるほうが生きやすい。だから言いたい事も言えなくて、涙を流しながら……という生活もいっぱいあるんですね。雪掘りとかは一緒にやった方が住みやすいのは確かですが、ある部分においては「村社会に合わせない」ということも、とても大事だと思う。すべてが合わせなきゃならないということではないと思うんですが。

鈴木 自分がない人も多い。

植木 あるんだけど言えない人もいるのでは？

室川 出さない方が楽だということもありますね。

鈴木 高校時代の同級会に行くと、夫がどうだとか子どもが大変だという話ばかりで、個人の話が全然ない。高校時代素晴らしかった人なのに、*Life* *Time* が全然ない。そして夫、子どもを送りだして、それからライフワークをいろいろ



ろやる。

私の町は企業城下町で、人口の七〇%が一つの企業に関連しているんです。社宅でPITAを通して友達になるんですが、思想、イデオロギー抜きのカルチャーはすべて盛んで、夫には勧めるけれど、自分は入らない。そのほうが無事なのです。何年かすると転勤なので、地域を良くしようとする気持ちも少ないと思います。議会も、過半数は子会社も含めて企業が握っているから、反鈴木で固まる。新潟全体が似たりよったりという感じです。

## 女性「男を支える力」としてしか評価されない

室川 自分を出さないと、経済力と発言力が結びつかないということになると、自分自身を考えてみても、与えられたり選ばれたりした仕事となると一生懸命やるけれども、率先してやることになると避けることがあり、自分でもずるいなと思うことがあるんです。うまく男性社会を利用していることもあるし、何か発言する時でも「私が言わなければ」という気持ちにはなかなかならない。

それがどこから生じるかと時々考えるんだけど、例えば

アメリカの人たちを見ると、男女とも自分の言いたいことは言っている。育て方からきているに違いないと思っただんです。親に「子どもを育てる過程で何を重要だと考えていたと思うか」と尋ねたりもしますが、「最初の子どもの時から、自分はこう思っているとか、何をしたい、こうされるのがいいやだということを書え、と繰り返し言ってきた。男女区別した育て方をしていない」と言う。それでどうすれば良いかはわかりません。

藤田 女の人は黙って、男の陰になって働いていれば良いんだと言われてきたから、女の子はあまり人前でしゃべるなということがありました。私の親はそんな事は言わなかったけれども。

私は反発して、小学校から児童会で発言してきたけど、黙っていた子は賢いと言われていました。中学生のとき、修学旅行のきまりで、白いブラウス、紺のジャンパースカートを着ていくことになっていましたが、持っていないかった女子が私を含めて三人いました。説明会のとき、先生に言おうと言っていたのに、「スカート持っていない人」と言われたら、手を挙げたのは私だけで、私は似たような紺のスカートをはいって行っただけです。あとの二人は皆の前で意志表示

をしなかったので、裏切られた思いでした。子どもの頃から、女の子は人前では余り言わない方が良いと言われているのが続いている。

室川 都会の新興住宅地などだと、夫は会社勤めというところで、区の仕事、地区役員など、女性がやることも自然発生的に多いと思うけど、地方ではどこを見ても男性ばかりです。そういう役割をまわす時でも、誰も女性には期待しないで、やるべきとも考えていない。

今井 私の町内で《花と緑の町づくり会員》というのがあって、私の名前を書いたら、組長さんが「お宅だけ名前が女だけどこれは間違いじゃないか?」と言ってきたのですが、夫は仕事があるのでとても花と緑の町づくりなんて行かないと思う、私の名前にしたので「いいえ、間違いではありません」と答え、そのまま名簿で出したのですが、二、三年後気がついたらちゃんと夫の名前になっていた。よっぽど気になっていたんですね(驚きと笑い声)。

女は数のうちに入っていないのですね。黙って茶碗を洗ったり料理をしたりして、お祭りの時は酒の肴作ったりお酌したり。掃除や後かたづけをすれば「いい人」で、表に名前がでるようなことを、いまだに女はしやいけない。

鈴木 責任がとれないと思われているのかしら。

今井 《花と緑》の会費は年間二百円で、それくらいなら私だって稼いでいますからね。

鈴木 そういうことを疑問にも思っていない。

室川 女はやるものではないと思いいこんでいる。

倉元 先ほど斎藤さんの言われた北京会議以降の女性たちのことを、新潟に当てはめて考えていました。例えばエンパワーメントなどは、よそから輸入してきた考え方もしれないけど、新たな思想を知ること、それまで気づかなかったこと、変だと思っても言えなかったことを言葉にすることが出来る。よそからきた情報を刺激として、「私の考えは正しいのだ。表現しても大丈夫なんだ」と共感することも大事なのは。鈴木さんが言われたように、暮らしの中から、足もとから行動するのが本来の姿ですが、それを待っていたら、待っている人たち同士がバラバラになってしまう恐れがある。だからよそからの情報の力を借りて、自分の気持ちを確認して掘り起こし、同じ気持ちの人を見つけていくということが重要です。そういう意味で、今はまだ知識としての情報が増えていく状態だと思います。そこにとどまっていはいけないのですが、そういう最

先端の情報、新潟県ではまだ十分に伝わっていない。知らないことが多いのです。世界の情報を知ったということは、大きな力になっていると思う。

斎藤 「エンパワーメント」を、そういうふう理解し、実際の生活に応用していくのなら、理想的だと思います。さすが新潟ですね。そして、いい先達がいらっしやるのですね。南雲 気付きの部分を知った人が、それを自分の言葉で話し、周りの人にも知ってもらうのが大事ですね。

鈴木 上越ではまさにそうで、どのくらいで見えてくるのかわからない。でも、一九七五年の第一回世界女性会議、メキシコ大会あたりから行動計画が出されて、やっと国でそういう動きになって、この頃になって県や市町村にまでそういう行動計画が降りてきました。なにも知らなかった人たちの耳にも届きはじめて、何かやろうとしている。

倉元 行政から発信されたとしても、それを受けて、今度は私たち自身のために何かやらなければならぬ。今がその時期ですが、女性たちの動きはにぶいですね。

藤田 私自身がやはりそうでした。私は弟と二人姉弟で、小さい頃から親に「女らしくしなければならぬ」と言われて、反発を感じていました。大人になってから女性学人

門の講座を受けて、「私が思っていたことがこれから学問として勉強できる」と思ってからやり始めました。早い遅いはあっても、気づいたときからやっていくということが大事です。お互いに語り合う中から仲間が増えていくと思う。

### 外国人花嫁との交流から見えてきた地域の問題

今井 私は今シレンマに陥っています。上越市には外国人花嫁がいっぱい来ていますが、その方たちと交流会を持っているんです。日本語教室とは関係なく、一か月に一回愚痴を聞いたり、習慣について話し合っているだけの会です。彼女たちは儒教の国から来ている人が多いので、婚家の人たちは「昔の日本の女の人のようだ」とべた褒めで喜んでいたので、やがて、彼女たちが交流会に出たり、日本語教室に通ったりして出歩くようになり、目覚めてくると、夫の両親からどんな圧力をかけられて摩擦が激しくなってきたようなのです。私は彼女たちの不満に全面的に同意してしまっているので、お嫁さんたちは元氣になって帰っていくのですが、それがまた摩擦になってしまふ。しかし、古くからの、アジアの人びとの伝統を否定したくない。彼女た

ちの不満は全部私の昔の不満であり、現在に至るまでの不満であつたからよくわかる。上越地方では、山間部だけでなく、平場にも多くいるし、その方たちの夫は田畑はあつてもほとんどがサラリーマンです。

鈴木 二世も生まれていて、その子どもたちもこれから問題を抱えるのではないでしょう。スーパーなどにいくとよく見かけますが、中国、韓国、台湾の人たちはほとんど見かけは変わりませんが、フィリピン、スリランカの人たちは肌の色が違っているのですくわかる。

今井 中国、台湾、ほかにもありますが、向こうで働いていた日本人男性がその女性と知り合い、結婚した例もあるようです。

鈴木 現実には、離婚も発生しているんです。子どもを抱えて母国へ帰れない人もいます。クリスチャンは上越の教会が駆け込み寺になっています。しかし、収入が低いと生活できないので、結局夜の仕事になってしまう。

こういう話を、話し合いたいと思つていましたが、今日、お隣の町に『あごろ』を読んでいる人がいるのを初めて知つて、よかった。

室川 『あごろ』はある問題が起こると、一般情報源とは違

う観点から、つまり弱い人の立場から書いてあるんですね。なんというか、触手があちこちにのびていて、異なった角度から事件を分析しているのがわかる。私は今まで何をしていたわけでもなく、今日も参加することをためらつていたので、これまで雑誌を読んできて、『あごろ』には「あーなるほど」と思わされることが多かったので、読者を続けてきたと言えます。私の場合、女性学などとはとても言えないけれど。

斎藤 最近『あごろ』は女性問題から遠ざかったと言われていますが、女性問題を問いつつていく中で、『沖縄』も『被差別部落』も『在日』も、根っこは同じと言ふことに気がついたんですね。女性問題だけをやっていくと、うっかりすると「強い女」の武器だけになりやすい。女性問題の学習で自分が力を得たら、自分よりもつと弱い人、発言できない人の力になれるようになりたい。そうすれば問題が一つづつ解決していくのではないのでしょうか。

私はとても気が弱くて人前で話もできなかったけれども、アサティフトレーニングやコンシャスネススレージングを受けて、少しずつ、喧嘩もできるようになりました。ものを言えない苦しみも、かつて自分がそうだったから、

よくわかる。「このようにすれば元氣が出てくるのよ」ということを、伝えあつていきたいと思ひます。

倉元 女性学は狭いものではなく、もつと深く、広がりを持つてゐるのですよね。『あこら』の広い視野にくらべると、私自身が少し狭く捉えてゐるところがあるかもしれない。

鈴木 人間学と言つてもよいですね。

倉元 私たちの中に、自分と同じ立場に立つていない人を見ると、「違う」ということで区別してしまう傾向がある。いろいろな形でいろいろなことをやつていけばよいという、しなやかさが必要ですね。

斎藤 女の問題をやつてゐる人はほとんどの人が、原発環境まで理解してゐるけれど、その逆は必ずしもそうではない。なぜなのだろうと、ずーつと考えてゐるのですけど。

南雲 今日黒岩秩子さんの〈不登校児の子をもつ親の会〉に行つてきました。十五歳の娘が不登校中なのですが、話の中で「女の子はまだよい。考え方をかなり柔軟に変えていけるから。不登校になつた中学生の男子は『こうあらねばならないと言う考え方』が身に染みついていて、そこからはずれたことで女子の二、三倍も苦しんでいる」という

話が出ました。私自身はそういう育て方をしなかつたのですが、実際、男子には「何々が当たり前」という社会の枠に強く捕らわれてゐるところがあると思ひます。

鈴木 本当に男の問題は女の問題でもありますね。一緒に人間として考えていかなければなりません。

子どもたちの援助交際についてはよく言われますが、その親たちの世代はどうなのかは余り問われない。援助交際の相手は中年の男性で、私たちのパートナーの年代の男性たちがその資金源になつてゐる。

斎藤 世界のどの国でもそうだけど、売春は年々低年齢化してゐる。日本もそうで、中学生にまで降りていつてゐるのでしょうか。売春防止法は成立した時から天下のザル法と言われていて、四十五年たつた今でも改正されない。私たちの力不足が残念ですね。もつともつと運動する層を厚くしないと状況は変わりませんね。

## 学校図書館法は「改悪」

丹羽 教職についてから三十年余り組合活動を続けてきましたが、流れは非常にがっかりするほうに変わつてきてい

るんです。例えば六月に「学校図書館法」を一部改正する法律が四十四年ぶりに国会に提出され、成立しました。各高校では「司書」が図書館の専任として働いていますが、今度この法律が通り、「司書教諭」が二〇〇三年までに配置されると、職を失う結果につながるのでは、という不安があります。

「司書」の友人が国会に行ってきた、次のように報告しました。国会議員に陳情に行くと、「学図法は素晴らしいじゃないですか」と言われる。各学校に「司書教諭」が配置されるわけですから、単純にそう思っているんです。文教委員会を傍聴しても私語は多いし、採決の時だけ出席して賛成票を上げるような光景を見て大変ショックを受けました……と。

新潟県では事務職として採用すると国から補助がでるので、「司書」を行政職として採用しています。小さい学校では私費の場合もあるんです。今度学図法が通ると「司書教諭」がその仕事に当たることになります。それは教員ならば講習等で一教科二単位を取ればなれるし、「司書」で教員免許を持っていればプラス十単位で資格が取れます。今年の夏休みから、文部省は「司書教諭」の大量養成をはじめ

ています。二〇〇三年までに十二学級以上の小・中・高校に司書教諭を置くことになっていますが、子どもの数が減っているから一般の教員をそちらの方に振り向けたいのではないでしょうか。教員に、クラス担任も図書専門家の仕事も持たせようとしています。教員が兼務で仕事をやって図書館が充実するとは思えません。実質は現状よりも後退する法律であると思います。附帯決議として、今勤務する「学校司書」が職を失う結果にならないよう配慮する、と書いてありますが、文部省の答弁を見ると、結局何の保障もない。私たちは図書館専任の職員として勤務している「司書」が「司書教諭」になるのが当然だと思っています。

もう一つ問題があります。高校の「司書」は行政職として採用されていますが、生徒が登校する土曜日は出勤し、指導に当たっています。その分を、夏休みに「まとめ取り」できる慣行が続いてきました。しかし、今年四月一日から、労基法がらみで全てサービス残業になると通告されています。今回は従来どおりというたかいを組んで夏休みに入りましたが、今のところまだ県全体の実態は不明です。植木 学図法といっても私たちには分からないし、改正されるのだからよくないと思ってしまう。現場にいない

とわからない。

斎藤 そんな大変な問題を、今まで知りませんでした。新聞やテレビだけでは情報が偏ってしまうんですね。今、生徒さんは図書館を利用しますか？

丹羽 私たちの学校は割と入っています。新しい本も借りていきますが、主に学習の場として使われています。高校の図書室は冷房が設備され、夏休み中も生徒が来て勉強をしている。

鈴木 『新潟日報』の「窓」の欄に県立図書館や高校の図書予算が少ないと問題提起されていました。進学率を上げようと言っても、肝心の図書館などにお金が回っていない。

丹羽 組合でも「司書」が「司書教諭」に移行できるシステムを要求して欲しいと訴え、運動を継続していますが、見通しも見えてこないし、力となっていない気がする。

南雲 私の子どもたちが通っていた小学校は、子どものクラスの担任が兼任で図書の仕事をやっていました。しかし、本の整理くらいしかできないので、親たちが見かねて結局図書のお手伝いをするようになりました。担任はとも図書の仕事までは手が回らない。

斎藤 今の学校図書館の問題を、なるべく広い層で考える運動にしましょう。それは一般の図書館の改善にもつながっていくのではないかしら。

地方に行くと、必ず図書館に寄るのですが、どこでも女性問題は社会問題の一角に、ほんの数冊あるだけです。

各地の図書館に「あごら」を入れていただければ『あごら』も続刊できるのです。ご近所の図書館に「希望図書」として、ぜひ申し込んでください。読者の中には「図書館で見て」と言う方も結構多いんですが、現在は全国で二十館ぐらいいにか入っていない。女性センターでさえ全部には入っていないんです。なんか警戒されているようだけど（笑）。「お上」のお墨付きのない運動って、地方では東京以上に苦しいですね。

今日はお目にかかれてよかったです。いつも片思いのようにして作っているの、読者の皆さんがどう読んでおられるのか、皆さんの声をもっとどんどん響かせてください。皆さんのお話は都会地の人には考えられないとても貴重なお話で、もともと地方の情報を伝えていかなくては、と思いました。ますます交流しあって、お互いによい活動をしたいですね。

（まとめ 室川 則）

## グループ紹介

ニ

こういうのが  
ほしかたふ



ニ

あーいし〜  
ほにたつわ〜

にいがたのこせだ  
よ〜くるわも

# 「子育て応援誌」で ネットワーク

## そらまめカンパニー

私たち〈そらまめカンパニー〉は、子育て中でもいきいき遊び・学び・働きたいと考える人のために、県内情報を中心とした子育て応援誌を作成し、母親も父親も積極的に関わる子育てについて考え活動しています。

新潟で子育て情報誌が初めて誕生したのは、一九九二年六月「グリーンピース」という会報中心の県内子育てサークルの会報上で「新潟県の子育て情報を集めた情報誌を作りませんか」と呼びかけたのがそもその始まり。そのころ全国ではあちこちで母親たちの作った子育て情報誌が誕生していました。呼びかけて集まった十六人は、「グリーンピース」のメンバーと新潟市の女性センターの主催事業「子育てと社会参加」の受講生。私たち〈そらまめカンパニー〉の誕生です。

女性センターの保育室をベースに、先輩である仙台や大阪に出版のノウハウを教わりながら、まず県内の三百人の母親にアンケートを取り、情報を集め始めま

した。出版や原稿書きは初めてという人がほとんどで、共通しているのは全員子育て中の母親であるということ、そしてもっと地域に密着した子育て情報誌が欲しいという熱い想いを抱いていることです。子どもが生まれ、外出もままならない子育て真っ最中の母親にとつて、本当に欲しい情報とは「身近な人の体験から得られる共感」「徒歩・自転車園内で子どもと一緒に利用できる施設」「育児の仲間作り」です。しかし、それらのきめ細かい情報は、既成の首都圏中心の育児情報誌には載っていません。人の作ってくれるのを待つていられない、それならば自分たちで作ってしまおうというのが、全国で始まった子育て情報誌作りのです。

新潟でもアンケートの集計をもとに取材が始まりましたが、まず自分たちが何者なのか、何のために取材をおこなっているのかを説明するところから始めなければならず、不慣れを抱かれたり、取材





拒否にあつたりと悪戦苦闘。ようやく一年の取材・編集を経て、九十三年十二月二十五日、メンバーの熱い想いがたくさん詰まった子育て情報誌の自費出版にこぎつきました。題名はいくつかの候補の中から「単なる情報誌ではなく、みんなの子育てを応援したい」ということで、『にいがた子育て応援誌 親子で楽しむいきいきガイド』に決めました。

ところが書店に置いてもらうのがまた

ひと苦労で、営業に本を持ってあちこちの書店まわり。その甲斐あつて四千部はたちまち完売しました。それ以来、年に一冊のペースで出版を続け、今年の七月には第七号を出版しました。

子育て情報誌の出版のほかに、母親の育児支援のための託児付きロードショーや、よりよい子育て環境を考えるための講演会も企画・運営しており、去年は小児科の毛利子来先生を迎えて「子どもも

て? どう付き合う?」というテーマで話していただきました。

また私たちの活動をきっかけに、上越や長岡、新潟、加茂、小千谷でも子育て情報誌を発行するグループが生まれました。去年初めて県内の子育て情報誌を発行している皆さんに呼びかけて「私たちのエンゼルプランを考えよう」

というテーマで「第一回にいがた子育てサミット」を開催し、県内のネットワークを広げることができました。

今年も新潟市の女性フォーラムのワークショップとして「子どもたちの居場所を考えよう」というテーマで「第二回にいがた子育てサミット」を開催し、子育て中の母親の声を、もっと行政に伝えていきたいと思っています。

活動も七年目に入り、資金調達や営業の苦労、継続することの難しさ等の問題を抱えています。読者からの反響や励まし、いろいろな人たちとの出会いやネットワークの広がりが、活動を継続していくエネルギーとなっています。そしてなによりも子どもを持って初めて知った「子育てのしにくさ」を次世代に伝えないように、もっと子育てのしやすい環境作りを目指して活動をしていきたいと思っています。

(近藤文子)

◆連絡先はTEL/FAX 025・267・8230 (近藤)

## 与口幸子

(新潟日報学芸部)

「あいつ、出張のたびに行ってたんだぜ」

「Aさんが、服を脱いで、いざこれからつとところでポケベルが鳴ったんだって」――

同僚の買春体験が笑い話として、第三者、それも女性の私の耳に入ってくることに、入社当時はかなり驚いた。今ではそんな同僚の名前を何人も挙げる事ができるなんて、もう、とほほ……って感じだ。何も新聞社に限った話ではないのかもしれないけれど、仕事のできる奴だ、後輩思いの人格派だ、などと言われている男性記者が、買春をし、しかも自分の行為を臆面もなく口外するという感覚には、どうしてもついていけない。罪悪感はあるでない。今時、売るほうも手っ取り早い金稼ぎでやってるんだから、それを買ってどこが悪い、そういう意識なのだろう。そんな感覚で、記者として人権問題をどう扱っていいかと思ってるんだ！　なんて思わず言ってやりたくなる。もともと、「悪い趣味みたいなものだから」という女性もいたりすることを思えば、眉をひそめている私を、周りは頭の固い奴だと見ているのかもしれない。

浮気は男の甲斐性だの、男は一度に複数の女を愛せるだの、男は出さないと体に悪いだの、とかく男性の性は甘やかされてきたと言われる。昔と比べて女性が増えたとはいえ、依然として男性中心のマスコミ職場は、特に男性の性に甘い風潮が根強いように思う。社内で自衛隊関係の広告には異義を唱えたとしても、女性蔑視丸出しの週刊誌広告の掲載は日常のこと。新聞社主催のミスコンもある。身近な話題でも、温泉街の泊まりがけの研修会で連れだってストリップショーに行った話を聞かせてくれる男性もいるし、女性がいようがランジェリーパブを二次会場に選ぶ人もいる。わからない感覚だ。

少し前にテレビ局関係者で盗撮や痴漢などの犯罪行為が相次いで発覚した。社内事情は知らないが、

背景にはそんな職場環境が影響しているのではないかと推測してしまう。

こんなことばかりを並べると誤解されそうなのでお断りするが、もちろん女性の性を商品として認識している男性ばかりではない。むしろ、そうでない男性のほうが多いだろうし、私などよりも、よほどジェンダーに敏感な男性記者もいる。ただし、声をあげる人は多くはない。

先日の西村真悟衆議院議員の問題発言の際も少々違和感を感じた。核武装発言と強姦発言が問題視されたわけだが、問題が発覚した当初、私が目にした限りの報道では、いずれも前者に問題の重点が置かれ、後者はおまけという感じだった。防衛政務次官という彼の立場と、今後の国際関係に与える影響を思えば、核武装発言を重大視するのは当然だ。でも、それにしても強姦発言の扱いには物足りなさを感じたのだ。

「罰せられんのやったら、オレらみんな強姦魔になってる」とは、つまり、自分は可能であれば進んで人権を侵害する人間であると宣言しているということで、「征服とはその国の女性を強姦して自分の子どもを産ませること」とは、過去の歴史を反省して豊かな国際関係を少しずつ築きあげてきた人びとの努力を無視した発言だ。そもそも、女性の性を男性が支配する性としてしか認識していない。核武装の意見自体は政治家の一意見として認めることはできるが、強姦発言は絶対に認められない。そういうベルの発言だった。

しかし、「売っているのを買つてどこが悪い」という冒頭の感覚の記者が大勢いるとすれば、西村発言にさして不快感を覚ええないのも、オレら扱いされたことに怒りを感じないのもさもありなん。それがうがちすぎているだろうか。

志津さんが女性問題に関心を寄せたのは、八九年の金井淑子さんを招いての連続講座がきっかけだったと、振り返る。

夫婦のあり方、職場での男女平等とか対等とは……を考え、疑問を持ち始めていた頃だった。思いを同じにする仲間たちと「女性問題」の学習を深めていく中で、「フォーラム・ミズ」というグループを結成。私が志津さんに出会ったのは、そ

らと  
あめい

さわやかな行動派——  
〈女のスペース・にいがた〉

佐藤志津さん



の頃だったように思う。物怖じしないハキハキした口調にさわやかな印象を持ったことを憶えている。

九四年のA子ちゃん事件（レイプ事件）やセクハラ事件を支援し活動していく中で、職場にまで相談電話がくるようになり、お互いゆっくり話し合いや相談できる場所と時間が必要だ、ということを感じ、この年の春に〈女のスペース・

にいがた〉を発足させた。夫からの暴力、職場でのセクハラ問題等を中心にした電話相談または来所相談を受けているうちに、労働問題の相談も増えてきて、ユニオンの必要性も感じるようになり、九六年十一月には〈女のユニオン・にいがた〉を発足。このようにその時々、必要を感じることはすぐ行動する。机上論だけに終わらず、即、行動に移すということ

ろがすごいな！と思わせる。

ある時「あれ？ 志津さんの姓が変わってる」と気がつき、離婚したのかな？ と思ったら、夫婦別姓にしたのだと、まわりから聞いた。やったね！という思い。私は結婚するとき、どっちの姓でも良かったし、その頃はまだ、こだわりもなかったので、遊び感覚でジャンケンで決めた。結果は夫の姓を名乗ることになっ

たが……。

つい最近、どうして別姓にしようと思ったかを探ねた。「姓を変えろということ」は自分の人生を相手に預けてきた、という感じがした。結婚し対等ではなかった男のほうが半歩も一歩も前に出て社会と繋がっているのを見て、悶々とするものを感じた。その呪縛を解くには、もとの姓に戻って、仕切り直しをしてみたい」と、半年間考えた末に踏み切ったのだそう。

男性だというだけで、女性を低く見たり、無視したり差別している。そんな男社会にノーと言っていく。女性自身も自己決定できるようにならなければいけない。一つひとつの問題や疑問、矛盾を解決していくことが大事。それが社会を変えていくことに繋がる。これからも社会的な支援活動が続けながら、女性同士の連帯を図っていきたい——と力強く言われた彼女がとても頼もしく見えた。新潟の女性問題に大きく波紋を投げ掛けた一人と言えよう。

（尾形とき子）

# チエチエン・キルギス・ロシア、 そしてイスラム復興主義

寺沢潤世

ロシアとかコーカサスは、古来日本人にはなじみ深い地名ですが、その実態についての知識は希薄です。中でもカフカス(コーカサス)のイスラム国家、チエチエン共和国には、多くの日本人はほとんど関心を持っていません。しかし、チエチエンは、ロシアとイスラム社会の現状と未来を映す鏡とも言えます。『あこら』では、これまで三回にわたり、国際的人権活動家、日本山妙法寺の寺沢上人のお話を掲載、チエチエンの母と子への募金活動や手紙の交換もしてきました。二年にわたる激しいロシアの攻撃から自国を死守したチエチエンに喜んだのも束の間、ロシアはまたもチエチエンに対する激しい攻撃を開始しました。八月と十月、日本に情報を伝えるに來られた寺沢上人のお話を紹介します。

## I 世界はなぜチエチエンを救えないのか

(八月十九日 於・四谷区民センター 主催・あこら)

去年八月にチエチエンに行きまして、その後十か月ほどずっと諸国行脚の旅僧でした。パキスタン、インド、ネパール、中央アジアを回り、コーカサスの紛争地帯を全部回って……。目標は不戦・非武装のネットワーク作りです。

先日、チエチエン軍がダゲスタンに進攻した時は厳し

かったですよ。バサーエフ司令官とは私も一緒にいたんですが、自由行動一切できなかったです。ダゲスタンに進攻した彼の弟の部隊が全滅したと、ラジオリバティの情報で知ったのは四日前のことです。

今チエチエン軍は三千人近くいるんです。ということは

チエチェン戦争中とほぼ同じ。ロシア軍は太刀打ちできない。チエチェン戦争は結果的にチエチェンが勝利しましたが、実際に戦った兵士の数は三千人くらいなんです。あのチエチェン戦争を体験したロシア兵は誰も行きません。よほどのならず者でもなければ。厭戦気分には満ち満ちている。だから、エリツィンが言ったんです。「コソボの手法を学んで、上から(空襲)だけで解決する。地上軍は入れない」と。

でも入れてますよね。今ロシア軍は三万人も集まっているんですが、ここ一週間の間にさらに動員している。

ダゲスタンの反政府軍支援について、チエチェンのマスハドフ大統領は、「自分たちは一切関与していない。政府軍は一切入っていない」と表明。チエチェン政府の外務省代表の女性も「陸続きのアジヤスタンにいるチエチェン人が参加している。勝手に行くのは政府は押さえられない」と話しました。

資金はイギリスのイスラム団体から来ているということです。チエチェンの孤立を打開する手段はもうなくなっている。それをイスラム復興主義が利用しようとしているのです。

## 追いつめられた不満分子の行き着く先

チエチェンはカスピ海に出たいんです。完全に孤立して、もはや二進も三進もいかない。突破口としてダゲスタンを併合して、カスピ海に出れば外に出られる。石油パイプラインとかそういうことよりも、陸路を完全に閉ざされたチエチェンが、ロシア側の包囲から生き残る生命線がカスピ海なのです。

もう一つは、復興主義の人たちの本当の思想はロシアを潰すこと。戦争が起これば、一挙にコーカサス連合独立国を打ち立てられる。ところが、チエチェンの外務省代表の女性に言わせると、チエチェンとダゲスタンとは本質的に社会秩序が違うという。チエチェンは完全な単一民族です。言葉も同じ。ところが、ダゲスタンは二十いくつの多民族の社会で、言葉も習慣も村々で全部違うんです。もしも戦端が開かれれば、血みどろの世界になる。言葉も違う多民族をまとめるのは、過激なイスラムのイデオロギーですが、チエチェンの場合にはイスラムと言っても新しい。しかしダゲスタンはがっちりとした伝統的なイスラム社会で、全然体質が違うんです。

チェチェンは戦争でここまで追いつめられ、全く打ち捨てられていた。この五年間、破壊され尽くした町や村の復興もなく、国際社会も見捨てた。国際援助も一切無し。独立を認める国も無し。もう行き場がない。その中で不満いっぱいの子供たちの行く所はイスラム神権しかないのです。それを復興主義がうまく利用している。アフガニスタンも同じですよ。

今、ロシアは、今までで一番経済的に破綻していて、突っつけば崩れる。あのロシアという山がね。だからチェチェンを攻めているんです。彼らがねらっているのは、コーカサスをずたずたに分裂させること。再起不能にさせること。それによって国民の不満をそらそうとしているのです。

### 崩壊寸前のロシアを陰で支えるヨーロッパ

ロシアには憲法もあれば大統領もいて、政府もあるけれど、国家収入はオランダ以下ですよ。それをヨーロッパが、ロシアがあたかも実在しているように、意識的に情報操作しているんです。実態を認めてしまったら、ヨーロッパが吹っ飛ぶ。これまでの外交政策が全部失敗ということですからね。だから、ロシアはチェチェンを叩く大戦争を国際

社会の建前でしなくてはいけないんです。ロシアはまだ存在しているということを世界に示すために。

普通の常識で言えば、こういうことが起きれば全面戦争になるのです。しかもこれまでのソ連の歴史から見た時には、徹底的に全滅させるというのが常識ですね。しかし、全面戦争はやれないんですよ。やったら自国が崩壊するということをロシアも知っています。チェチェンも追いつめられている。そして、ロシアもぎりぎりに追いつめられているのです。

この非常事態を何とか打開しようと、私たちは八月二十三日にモスクワで緊急円卓会議をやるんです。NGOとしてこれまで平和活動やってきた人たちと、ダゲスタン関係の人もチェチェンの人もみんな集まって、情勢分析して、何ができるか意見交換して、戦争を起こさせないように外側から知恵を絞ろうということです。ロシア政府は何もやれませんよ。だから市民が何らかの形で下から築き上げて、解決策があるのかないのかを探ろうと言うわけなんです。

今のロシアの政情では、エリツィン周辺だけで独走はできません。それをさせないようないろいろな圧力がモスクワの政争のなかにも政党のなかにも、ジャーナリストのなか

にもあります。イスラム過激派がこの時期にロシアを潰すために挑発しているんだとしたら怖いことですが、それにロシアが乗らないだけの器量があるかどうかわかりません。本当に難しい。世界で一番危ないのは今ここですよ。ロシア連邦の分裂の始まりかも知れない。

## 千載一遇のチャンス逃したハーグ平和会議

私は五月のハーグ国際平和会議に出たんですよ。一万人集まったのです。二十一世紀に戦争を廃絶するというすばらしい歴史的な使命のもとに。だけど十年間のユーゴの紛争の極限のコソボ紛争を目の前にしながら、それを越えていく本当の戦争否定の理念と行動が生まれなかったと思う。私は不満なんです。なぜ、NGOが、NATOが、平和運動が、何もできなかったのか。それをとことん反省して、突き詰めていく議論さえ生まれなかったのです。

私はいつも感じますが、日本国憲法は日本だけではなくて世界のあらゆる国の平和生存権をうたったものです。それが紛争勃発する前の紛争防止のために機能していないんですよ。湾岸戦争の時も、コソボ空爆の時も、チェチェン戦争の時もそうです。平和生存権を基盤にした平和憲法の

平和主義こそ、非武装のあり方ですね。そのあり方が、理念が、ほとんど機能しないんです。それを機能させるためにNGOが動けばよかったのに、NGOさえ動いていない。湾岸戦争の時、私たち非暴力主義者はサウジアラビアとクウェートの国境に陣どって、非暴力、不戦で旗を立てた。人間の盾になって紛争勃発を止めようとしたのだけど、その理念を実践化する国際的な行動が国際的な市民運動の中からもう一つ盛り上がらなかった。非武装による市民の紛争防止こそが、今一番問われている課題だと思うのに、二十世紀の今日では、全部失敗してしまった。それを確立せずして、戦争廃絶はできない。NATOみたいな独占的軍事的手段を持った人たちが、力で平和を作るのか、市民の力で平和を作るのか。非暴力的な紛争防止のメカニズム、行動原理を市民が構築できるかどうか、二者択一の所に今いると思うのです。が、ハーグ平和市民会議の紛争防止のセミナーでは、残念ながらそれが出てこなかったのです。

コソボ空爆には、もう時遅しでね。全部NATOがやった。ヨーロッパの平和運動を支えてきた人たちが、今度は空爆ですよ。欧米の新聞では、NATOが国連軍になってコソボに入ってから、住民虐殺が紙面一面に出た。とこ



ろが、チェチェンの時はどうして出なかったのだろう。コソボに勝るとも劣らない残虐な住民虐殺が毎日あったわけでしょう。この問題がはらむ危機の大きさとスケールの大さはコソボどころではないのです。ロシアが崩壊したあたりはどうなるのか。もうすでに、国家としては体を成さないロシア。それに対しての準備は、全く無策なのです。

### 欧米の『民主的市民社会育成』は、単なる整形手術

ロシア連邦がこの危機を乗り越えられないと、ロシアは分かれるのではないですか。シベリアはシベリア、極東は極東に。一番危機感を持つのはスラブ民族です。スラブと非スラブの対立が火を吹くと、ロシア中に広がる。特にスラブの人たちの危機感から本当のファシズム的な、スラブのヒットラーが生まれるかもしれません。どれほど危機が迫っているか。それをヨーロッパは見て見ぬ振りしている。

この問題が抱えている問題は、コーカサスどころの問題ではなくて、ロシアが完全に分解すると全くアナキーな世界になってしまう。その時に世界的な経済へのインパクトはどうなるのか、核はどうなるのか。核兵器を管理する所がないということになる。どうするつもりでしょうね。

コソボ戦争の時に反米・反ヨーロッパでロシアのナショナリズムが燃え上がったでしょう。もう一度ロシアの権威を誇示しよう。あの時点で、ロシアは「空爆を止めなければ核を使う」と言っていたんです。コソボ空爆が続くならロシアは核を使うしかない。そんな所までいったんですね。それは、ものすごくショックでしたよ。このことは普通の新聞には出なかったのですが。

ヨーロッパやアメリカの言うデモクラティックな市民社会育成というのは、整形手術をやっているみたいなのです。「あなたの顔は嫌いだから、私がこんな顔にしましょう」と言って、あっち切ったりこっち切ったり。こういう社会改造は不自然ですよ。でも、ヨーロッパはそれをずーっとやってきているんですよ、何世紀も。

### バーチャルリアリティで平和は生まれない

日本も悪くなっていますね。危険な国になっている。常識がないですよ。何をあわてて今さら国家主義にならなくてはならないのか。国会で反動法案がどんどん出しましたが、「あれは国際水準ではあたりまえで、外から言われているんですよ」と言って、通しているんじゃないですか。

日本は文化そのものが病んでいて、まともな思考が社会の中に伸びないんだね。平和運動そのものがね、これまで運動論が間違っていたという反省がない。敵味方という考え方、そういう運動論そのものが間違っていたと思いますか。戦後から安保、ずーっと今日までの発想を百八十度転換すべきではないかと思う。

私はインターネットはますます認めたくなくなりまして。冷戦後最高のゴールドチャンス、世界的な集約の機会だったハーグで、なぜ平和運動がその時期を逃したか。

平和運動が全部コンピュータの前に座っちゃったんですよ。インターネットというバーチャルリアルティーの中で世界を変えられると思っちゃった。集まってきたも、チャットイングやっているだけ。何にも出てこない。私はパソコンをやれないからそう思うんだけど、この状況は恐ろしいですよ。ハーグには一万人も集まって通訳が一人もいないんです。あの会議を全部英語で押し通しちゃった。インターネット会議、英語圏主導会議ですよ。

社会を変えていく、人の心の意識を変えていく、といく力は、今の平和運動は持っていない。一番重要な自己の思索をする時間がコンピュータに吸い取られている。情報は考

えなくても集めれば出来上がると思っているのでしょうか。もっと深い幅の広い文化そのもの、社会意識そのもの、さつき言った展望といえますかね、市民運動の文化というようなものが全然進歩していないというか、遊離しているというか。日本の国内だけの、内向きのところだけでガチャガチャ動いているみたいで、ハーグには日本から四百人行ったけど、何か浮いてたんですよ。

## 二十一世紀こそ「平和文化の創造」を

ベトナム戦争もアフガンも、コソボもチェチェンも、全部を比較反省した上で、一番いいことだなと私が思ったのは、二〇〇〇年のテーマを国連でもユネスコでも、「平和文化の創造」に決め、向こう十年を「青少年のための、平和と非暴力文化の十年」と決めたことです。とても希望がある。これを利用したらいいと思いますね。

二十一世紀に戦争を廃絶しようという会議が、一昨年モスクワであつたんです。二十世紀は奴隷廃止があつた。奴隷貿易もアパルトヘイトもなくなつた。植民地主義もなくなつた。二十一世紀に成し遂げなければならないのは、戦争そのものの廃絶と武器売買の廃絶だ。

それに向けて、実際の紛争地帯の実状を知っていなければならぬのですが、実際に犠牲になった非武装の市民の実態は、ほとんど知らされていないし、犠牲になった人たちの声を反映させる場もないんですよ。トップとか、チャンチャンバラバラやった連中がテーブルに座って、和平交渉をやって、外国が介入している。コソボにしたって、完全に外国だけの秘密外交ではないですか。コソボの人たちが彼ら自身の声で、彼らの運命を発言する場はどこにもない。彼らの運命はどこかで話をしている人たちに翻弄されているわけです。紛争で犠牲になった人たちの声をまとめ、未来を構築する声として、会議に持つていこうというのが、ハーグに臨む私の気持ちだったのですが。

どこへ行っても難民に会い、話をして、そこで痛感したのは、百万、二百万という難民は「声なき物質」であって人間として扱われていないということです。和平交渉に参加する権利も、代表を送る権利もない。十年経っても、二十年経っても、自らの運命を選択する権利さえもないんです。国際的救援活動にしても、国連の平和交渉にしても、紛争の犠牲になった市民は援助活動の対象物ではない。この対象物に対する援助合戦があるだけで、全部登録されて、

物をもらって、誰かが解決してくれるのを待っている。どこへ行ってもそれが今の状況なのです。

もう一つは紛争処理というのが大変なんです。アフガンにしても、ベトナムにしても、パキスタンにしても、紛争後も戦争に勝るとも劣らない苦しみを、戦争で国土を破壊された人たちは持つわけです。いったんそういう悲劇をくぐった人たちの心がもう一度人間の心を取り戻すのに、そして破壊し尽くされた社会を再建するのに、チェチェンは五年経っても成功していない。そして犯罪社会、武器社会になっていく。アフガニスタンもそうですかね。

国土を再建するのに、戦争で使ったお金の一〇パーセントも使われていない。戦争の時に儲けた人たちが再建にお金を出すかというと、出していない。全部他の善意の募金です。戦争によってガツポリ儲けた人は儲けっぱなしなんです。そんなうまい話ないですよ。戦争当時国もあまり出さない。他の国、日本なんかが後始末をするわけですね。そういう構造そのものを是正していくための方法もハーグ会議にぶつけていきなかつたのですけど……。でも本当の犠牲者は出てこなかつたし、紛争の当自国の実態はどうであつたか、という話もあまりなかつた。

戦争後の人間の回復、社会の再建、国土、建物の再建にどういうシステムがどれだけ必要なのか、一般市民の参画できる和平交渉、紛争再建のプログラム、原理というのは国際会議で話さなければ、二十一世紀に戦争を廃絶するという流れは生まれない。全部机上の空論で終わっているんです。軍縮の問題、人権の問題、国際法の問題、そんな事は誰でも知っている。話す内容は決まっているんです。実際に即した二十一世紀の戦争否定の流れをどうつくるかというところにならなかった。それが私は実に残念なんです。

日本で私が感じるのは、文化そのものが病んでいるという事。不毛な論争ばかりして、運動そのものも不毛なんです。それを変えるのには、社会の文化そのものを、幅も奥行きも深い所から作り変えていかなくてはいけない。

平和の文化とは何か。平和の文化を創造するとはどういうことなのか。そういう観点では軍事費も、海外派兵の政策も、全く逆行している。地球規模で今、平和の文化を築こうという動きがあるならば、その流れを利用しながら国内運動も批判していく視点が生まれていいと思うんです。

ピースメーキングには、欧米は相当の資金を持っているわけですね。それは、国のイメージをよくするための国策

です。戦争をする一方でPKOや援助をやりながら、自分の国のイメージを良くするという、外向けの平和解決なんです。救済物資を配るのも、羊に餌をやっているみたいなものですね。国家再建にしても、コソボに一千億円です。ほかに社会資本再建の民需が十一兆円。それはほとんど米國資本が請け負う。ところがアフガニスタンはどうなのですか。復興合戦でね、莫大な予算を持った復興の人たちがどんどん来たけれど、危なくなったらみんな消えていった。欧米は「ヨーロッパ的社会を作りましょう」という意図で救援に来る。チェチェンもそうですね。日本だって敗戦後はアメリカンデモクラシーですね。

### 多民族、多宗教社会の共存

二十一世紀にもう一つ考えるべきことは、イスラム教のことですね。イスラム教にはしっかりしたものがあるんですよ。イラクの湾岸戦争後の態度にしてもホメイニのアメリカに対する対応の仕方にしても、全面肯定はできないけれども、わかる部分はいっぱいあるんです。

イスラム原理主義に対抗するイスラムの新しい動きは、まだ勉強の過程ではないでしょうか。日本に黒船が来た時、

攘夷思想に固まって国家主義を作り、一般民衆が受け入れた面があるでしょう。それは結局、反欧米、反近代として出てきた。風土から生まれた一つの精神主義です。

仏教も、日本における仏教は、近代化においてはほとんど役割を果たさない厄介なものです。明治維新の廃仏で息の根を止められて、日本の本来あるべき精神文化の健全さが失われてしまった。その後遺症が今の今まで来ていると私は見ているんですよ。日本の文化はここまでいびつになって、精神文化と言えるものがなくなってしまった。

パキスタン側のカシミールは、多民族です。中央ユーラシアも全部多民族社会です。バルカンからカシミールまで、この多民族社会の共存と宗教や文明の対立を越えた平和文化の在り方というのが一番大きい課題のように思います。

## II チェチェン、キルギス、イスラム復興主義

(十月七日 於・本郷寿会館 主催・市民平和基金)

多民族・多宗教社会がすべて共存して、相互に尊重し、学びあいながら、武力抗争を拒否する文化を創るのが、二十一世紀の平和文化の創造だと思う。それが無いがために武器輸出国は秘密情報によって対立を煽り、紛争を作って、武器を売る。この悪循環が、どこまでも切れないのです。

日本が近代化の過程で学んだり、失敗したりした紆余曲折や、第二次大戦であそこまで壊れてしまった社会が、戦後に復興していくプロセスにおける失敗も成功も、今のユーラシアの紛争地帯の人たちにとっても役立つのではないかと思うんです。アメリカは人類史上最強の帝国ですが、アメリカに言われるとおりの国際貢献とか軍事協力ではなくて、日本の歴史体験そのものが、他の紛争経験国に本当は役立つのではないかと思うんですけどね。

八月にお別れしてからモスクワに飛び、NGOで集まって対策を練り、戦争抑止のアピールも出したのですが、ついに一番懸念していた状況に突入しました。

チェチェンの一般の人たちのことを思うと、たいへんな苦難の民族だなと思うんですね。一九九四―六年のチェチェン戦争は私もつぶさに体験しましたが、コソボに勝る

とも劣らない残虐な住民虐殺が続いた戦争でした。しかも、国土は無差別爆撃で破壊し尽くされたのに、国際社会からほとんど見捨てられ、いろんな国際援助団体や国際社会がチエチェンに何かしようすると必ずロシアの外務省が妨害し、巧妙な内部攪乱と経済封鎖、世論・情報操作でチエチェンを追いつめていった。そんななかで、戦後復興もままならず、完全に孤立しきったチエチェンが今再び全面戦争に直面しようとしている。まったく気が重くなる事態です。

### 戦争は絶対に望まないチエチェンの人びとなのに

チエチェンに住んでいる人たちは誰もこんな戦争を望んでいません。自分たちが食べていけるように隅々まで畑を開墾して、種を植えて、やっとパンを食べられるだけの小麦粉を生産して、孤立状況のなかで生きている。国土再建で手いっぱいなんです。

我々もチエチェンのなかに入って実態を調べて報告し、進言すべきだったんですが、ロシア側の巧妙な孤立政策と攪乱政策で、チエチェンの内部に、どんどんチエチェンの犯罪者が送り込まれたのです。

そんな中で、停戦直後、国際赤十字の職員たち十人ほど

が寝てるところを機関銃で襲われた。誰が殺したか、未だ判明しませんが、それ以後、国際NGOは全部手を引いたんです。経済的に追い詰められて、手っ取り早い現金収入として残されたのは、人質をとること。およそ延べにして数百人の外国人が、ロシア人が、誘拐された。そして私たちもチエチェンに入国できにくくなったのです。

ダゲスタン問題が起こる前に、「普通のチエチェン一般の人たちは現金収入ゼロ。パンと砂糖なしの紅茶だけで生きている」という状況でした。ところが、チエチェン人は、それでも誇りを失わない。「武士は食わねど高楊枝」という一つの矜持を持つてるんですね。

今、いよいよ全面戦争に発展する過程で、この二か月を克明に、楽観的に、もう一度検証し直すと、九四年のチエチェン戦争を勃発させた時とほぼ同じ、仕組まれた戦争の過程が見えてきます。それは巧妙に情報操作されたロシア側の報道からさえも読み取ることができるとです。

ここ一週間のあいだの、プーチン首相の声明だけを追ってみるだけでも、一日一日どれだけ豹変しているかがわかります。「イスラム過激派に占拠された村を解放する」というのが、ダゲスタンへの武力投入の、連邦軍投入の口実だっ

た。その時点では、「チエチェンは関係ない、チエチェンには入らない」と言っていたんですよ。村を奪還してから、あの猛烈な復興主義のイスラム神権一致共同体を宣言したワッハブイスト（ワッハブ派イスラム教徒）狩りが起きたんです。魔女狩りと同じで、髭さえつけていれば有無を言わず逮捕された。これはもう許されない人権侵害ですね。中世の魔女狩りや、日本のキリシタン弾圧とまったく同じことが、今この二十世紀の終わり、人権が確立されたなかで公然と起こっている。そして、誰もこれを批判しないんですよ。

そんななかで、ダゲスタンで武器をとったワッハブイストたちは、いち早くチエチェンに逃げ込んだ。ロシアは「チエチェン側からダゲスタンに入ってくるルートをつ断つ」ということで、ダゲスタンとチエチェンとの間を封鎖した。それから数日経つと、今度は「内部のゲリラの本拠を叩く」ということで、空爆や砲撃が始まる。

そのうちにモスクワで、労働者や年金生活者のアパートに対する不可解極まりない爆弾テロが起きました。と同時に「これは全部チエチェンのテロリストがしたテロ行為だ」と一方的に決めつけて、空爆が一挙にエスカレートした。

チエチェンのテロリストだという根拠は全くない。いつさえ立証されていないのに、直接ゲリラに関係ない石油精製工場や、一般市民の村々の攻撃を始める。そしてチエチェンを完全封鎖してしまったあとで、無差別空爆が始まったわけです。

ところが、どういう空爆かは、ジャーナリストが誰もいないから、客観的な報道がないわけです。しかし、無差別爆弾があまねく起きた結果、一週間のうちに十万以上の難民が、たった一つの出口イングーシから逃げてきた。その間、救援物資も一切ないのですが、その難民の声も伝わってこないし、空爆の実態もほとんど報道されていないんです。そして、空爆の口実となった爆弾テロの実態は聞のまゝ、奇々怪々たる噂が飛び交うばかりなんですよ。

そのうち、六万とも八万ともいう大軍がチエチェンの国境をすべて封鎖した。「これで終わりだ、地上軍の侵入はしない、空爆だけだ」とロシアは言ったのに、一日後に、今度は地上軍が入ったわけです。

チエチェンのマスハドフ大統領は、チエチェンの民衆が正規に選挙し、国際社会も正当な選挙だと認知し、ロシア政府もそう認知したチエチェン唯一の合法的な政府として

テロ行為を批判し、「武闘イスラムとは一切関与していないし、政府軍は関与していない」と主張、あくまでも平和解決の用意があると言い続けているわけです。プーチン首相と会うということも提案したけれど蹴られ、エリツィン大統領に直接会うという話も蹴られた。つい三日前まで、マスハドフは平和的解決を呼びかけ続けているのですが、いまだに、ロシア側は、行動を二日一日エスカレートさせ、言った舌が乾かぬうちに変わっていく。それは、前回のチェチェン戦争とまったく同じなんです。

決定的な情報統制のなかで、ロシアの世論を誘導し、国際社会の世論を誘導して、チェチェンを奪回する全面戦争へ突入する。これはシナリオなんです。だからこそ、今チェチェンで何が起きているか、ダゲスタンで何が起きたかを、本当に客観的な情報を一般の市民たちは検証し直して、この一連の流れを重層的に、いろんな面から立体的に捉え直す勉強をしなくては、真相はぜったいに見えてこない。

今起きているこの事態は、地域的、突発的な問題ではない。ロシアの改革の命運に関わる問題ですし、ポスト冷戦後の世界のありようが占われる重大な根の深い深刻な事件なんだ、ということを厳しく認識してほしいと思います。

エリツィン政権が踏み込もうとしているシナリオどおりになると、後戻りのきかないたいへんな事態になる。このままチェチェンは引き下がるわけはないし、死闘になると思うんです。そうなったら、コーカサスの問題は、この一世代、二世代では解決していかないたいへんな禍根を残す。ポスト冷戦後の、ロシア、ユーラシアの改革は完全に破綻する。そういうカウントダウンに、もう入ろうとしていると、私は捉えます。

## エリツィン登場の筋書きとあまりにも酷似

ちよつと話は戻りますけど、九三年にエリツィン政権と反エリツィンのロシア議会側がぎりぎりのところまで対決して、妥協点がなくなった事件がありますね。この時に、戒厳令で、ホワイトハウスを内務省軍が取り囲んで、電気も水もガスも全部切った。何百人という議員と義勇軍がホワイトハウスに籠城し、エリツィン大統領とぎりぎりの対決になった時に、その取り囲んでいた内務省軍が全部引いたんですよ。そして、議会側にいた一般市民の共産党の支援デモが、モスクワ議会になだれ込んで、内務省軍は装甲車もタンクも機関銃も全部置いたまま、手を引いたんです。



そこで何が起きたかという点、流れ込んだ反エリツインのデモと、籠城していたルツコフ副大統領やハズブラートフ・ロシア最高会議議長が一挙に反転して、隣の建物を襲い、クレムリンを襲うという激を飛ばしたんです。そういう口実をつくって、翌日エリツインは、国会議員を含め何千人もが籠城しているホワイトハウスを包囲して、めちゃくちゃに攻撃したわけです。内部に何千人という人がいたあの時点で。ロシアには、そういう謀略を平気でやるという一面がある。何千人も殺したんです、一般市民も含めて。ところが、公表したのは百八十人。あとは全部、夜のうちに死体を地下室を通して、郊外に持って行って処理したんです。そういう政治文化を一九九三年の時点でもっているんです。一九九四年から九五五年のチェチェン戦争も、武力攻勢にいく前に、口実をつくるための謀略があった。

そういう前例を二つ見ると、今回のモスクワの三つのテロ爆弾は、私としては、限りなくクレムリンの謀略に近いと思わざるを得ないんです。プーチン首相の声明が刻々と変わっていく。そしてエスカレートしていく。

北アイルランドのIRAがロンドンのパブと地下鉄に爆弾をしかけたというそれだけの口実で、イギリス政府が北

アイルランド全土を完全封鎖して、その村々を攻撃しますか。テロを追いつめるという理由でも、現代社会で許される行為じゃない。それがまかり通るロシアはおかしい。もしテロに対する対策だったとしても、今チェチェンに起こそうとしている無差別爆撃は、決して許されることではない。

チェチェン空爆が起きる前、ダゲスタンで戦闘があったときに、チェチェンの国際人権委員会がリーダーとなって、紛争を平和的に解決するために、グロズヌイからダゲスタンの国境に向けて平和行進しているんです。それに呼応してダゲスタンの民衆もマハチカラから国境に向けて平和行進を始めた。それを支持する署名だけでも三千名ぐらい集まり、マスハドフ大統領も支持したんです。一か月前のことです。

ダゲスタンの問題を平和的に解決しようとする一般民衆の行動。それをなぜ、ロシアの報道も、世界の報道も、一行たりとも報道しないのか。戦争の危険があればあるほど、平和解決の行動こそ、大きく報道しなければいけないのに、チェチェン戦争の時の母親の行進同様、今回もまた無視された。

一般民衆の平和行動、非暴力の運動は、國際世論の支持があつて初めて、効力を持つんです。それを一切報道させないということは、誰かが戦争を欲しているんです。

## ダゲスタンの腐敗の中で先鋭化した復興主義

ここで一つ申し上げておかなくてはならないのは、なぜチェチェンの武闘グループ、正規軍ではない野戦軍がダゲスタンに侵入したか、多角的に知る必要があると思うんです。

二年近く前から、ダゲスタンの山岳部のイスラムの信仰深い人たちの中にワッハービズムという汎イスラム的な信仰形態の復興信仰によつて結束する共同体が生まれ始めています。ロシア連邦内にありながら、なぜロシアの政権を認めずに独立したイスラム共同体を宣言したかという背景は、ダゲスタンの歴史的背景にあります。

今のダゲスタン共和国の政権は、ソ連時代の共産党そのままなんです。彼らはイスラム教を信仰していたわけじゃなくて、共産党委員がソ連消滅後のロシア改革のなかでそのまま地方分散して、居座り続けているわけです。ダゲスタンのなかでは政治改革も、経済改革もいっこうに進んでいない。そしてチェチェン戦争中、膨大な人道援助のお金

が中央政権に送り込まれた。そういう物資もお金もすべて、居座り続ける共産党時代のボスの一族で着服してしまったんです。ダゲスタンの地方共和国政権は、腐敗しきつた、住民のことは全然考えない地方バリアなんです。そんななかで、山岳のダゲスタン人ほど、素朴で、純真で、信仰深い。そういう、いい伝統的な精神を持っている一般民衆が、生き延びていくくめども立たず、改革していく方策も方法もない時には、宗教によつて結束する以外には乗り越えていく道はない。自分たちの足元にある精神文化、伝統に頼らなければ、新しい明日への展開はない。そこにますますイスラム信仰が先鋭化していくわけです。

## イスラム復興主義はなぜ台頭するか

ワッハービズムがなぜ信仰されているかと言うと、俗権力を認めない、世俗国家を認めない教義だからです。神権国家共同体を強く主張する復興主義なんです。

もう一つは、近年サウジアラビアから直接きた、純粹なピュア・イスラム、中世アウジアラビアに端を発するイスラム復興主義で、それは世俗権力を認めない神権国家が最終目的の宗教です。

しかしダゲスタンにしても、チエチェンにしても、彼らの伝統的なイスラムは、そういう復古主義的な、純粹なイスラムではなくて、むしろユーラシアの遊牧民のなかに変形した形で信仰されていた神秘主義なんです。イスラム以前からの民族伝統の共同体のモラルというかエチケツトと言いますか、そういうものを濃厚に残したまま、イスラムというよりも中央アジア化したスーヒズム、神秘主義の派なんですね。ところが、サウジアラビアから今入ってきたピュア・イスラムというワツハービズムは、一切そういう地元の伝統、習慣を認めないんです。オリジナルなイスラムはこれだけと言う。

例えば、日本の仏教は中央アジア・中国・韓国を経て日本に来て千年以上経っていて、完全に土着化した仏教ですよ。浄土真宗にしても、日蓮宗にしても、日本で出来上がった仏教なんです。スリランカの人などは、日本にある仏教は土着の宗教であって、正しい仏教ではないと言う。「スリランカの仏教こそ純粹な仏教です。南無法蓮華經という仏教は純粹ではない」などと言われると、混乱が起きますよね。私も、ちよつと混乱します。チエチェンでも、ダゲスタンでも、そんな混乱がある。

あまりにも世俗権力が汚れきって腐敗しきって、抑圧したときに、宗教による結束が社会改革の骨になるのは世界の歴史によくあるんです。中国の太平天国の乱にしても、中世日本の一向一揆にしても全く同じです。西アジアでは精神文化はイスラムしかないのに、イスラムを根にした一つの社会改革のエネルギーが復古主義になる。それに対して腐敗しきったボスたちは、今ワツハーリスト狩りをやっているわけですが、宗教というものは、弾圧すればするほど先鋭化していくものです。近代世界ではそういう信仰の要素がほど遠くなってしまうから、なんだか遠い話のように思われるかも知れませんが、向こうでは、信仰による共同体が当たり前の日常生活です。それ以外に、社会を変えていくエネルギーや基盤がないわけです。

そして彼らは、「ムスリムの兄弟が、腐敗しきったロシア連邦によつて抑圧された時は、チエチェンの仲間たちがジハード（聖戦）で我々を助けに来てくれる」と信じていたんです。チエチェンの軍人たちが、ダゲスタンに入った本当の純粹な動機も、ある意味では、ムスリムの兄弟を不当な宗教弾圧から救おうとしたのでしょう。前回のチエチェン戦争の徹底した経験を踏んだ彼らの心情としては当

然のことなんです。そこに一切計算も働かない。これが国際社会にどう利用されるか、読めるような人たちではないんです。信仰が純粹であればあるほど、悪賢い連中はそういうものを利用して、自分たちが意図する状況を作り上げる。謀略として常套手段なんですね。そんなふうに前段階をつくって、モスクワのテロ爆弾事件の責任は全部チェチェンのテロリストにかぶせればいい。そうすれば、完全に一〇〇%、チェチェン奪回作戦は敢行できる。それを、ロシアのある一部分の人たちは、計算していたと思います。

もう一つは、この国際的なムスリムの民衆の心情として、チェチェンはアフガニスタンのタリバーンと同様に、ヒーローの一面はあるんですね。あれだけの超大国ソ連を小さなチェチェンが追い出した。まさに、イスラム教が世界一力強い正しい宗教だということを示したという気持ちで、世界的なムスリムのなかにあった。国際イスラムテロ集団はそういう心情を利用して、とくにアフガニスタンとチェチェンに標的を置いて、入っていったと思うんです。

チェチェン戦争の勝利は、イスラムテロリストの勝利ではなかった。チェチェンの一般の山の男たちが、自分の母親、妻、子ども、老人たちを守るために立ち上がった防衛

戦争です。ところが侵略に打ち勝った時に、ある一部の国際イスラムテロ集団は「イスラムの勝利」だと勝利の真実をすりかえて、チェチェンの勝利を乗っ取った。今度はイスラムの過激集団が入り込んだんです。そこで、チェチェンのなかで大きくニュアンスが変わったと思うんです。一般民衆は苦しみのかげのなかで、生きていくのに精一杯なんです。そんな人たちが戦争を喜ぶわけがないのに。

さらにもう一つ、今年十二月のロシア議員選挙と、来年のロシア大統領選にからんだ、権力奪取の争いが伏線にあります。選挙で選ばれた大統領が、自ら強大な権力を放棄して、あらたに大統領を選挙するということは、何百年というロシア人の歴史のなかで一度もない、未経験の選挙なんです。それが今まさに始まろうとしている。

ロシアのエリート政治家たちの間では権力奪取戦が行なわれている。ロシアの実態、民衆の生活感覚からかけ離れたところにいる彼らが、目前に迫った大統領という権力を守るため、あるいは取り込むため、魑魅魍魎たる謀略作戦を展開しているんです。チェチェンに対する攻撃は、当然そういう謀略の一環として眺める必要がある。このままで、議員選挙、大統領選挙は中止の方向に行かざるを得な

いと思われれます。そうになったらロシアの改革は、全部吹っ飛ぶ。そんななかでプーチン首相は、ソ連消滅後、民衆のなかにある苦い感情を払拭したい。チェチェンでもう一度報復をして、目覚ましい戦果を上げれば、一拳に大国としての自負心を回復することができる。でも、それは麻薬中毒患者が麻薬の致死量を自ら打ち込むに等しい自滅行為なんです。今のロシアの国力、経済状態、社会状態を考えれば、チェチェン戦争にさらに踏み越えれば、ロシアの改革は破算する。それは全世界にとっても大事件です。

今の時点で、ロシア内部でこういう戦争状態に対して反対する勢力はほとんどありません。我々がほそぼそと声明を出すものの、この前のような「母親たちの反戦行進」も今度はありません。一応、母親たちは、私たちと一緒に平和宣言を出しているわけなんです。行動ができるような状況ではないんですよ。前回のチェチェン戦争で激しく無差別攻撃を批判した人権委員会や、セルビアのセルゲイ・コワリョフ代議士のような人でさえも、今回のロシア連邦政府の軍事行動を支持しています。たいへんな様変わりなんです。

目の前で、三百人が二晩のあいだに殺された。あれだけ

の大テロ爆弾は、モスクワ市民には経験のないことなんです。そして政治家たちの頭のなかは、全部、議会選挙だけです。今、チェチェンを擁護するような発言をすれば自殺行為ですから、誰もしません。人権団体の〈メモリアル〉も、やはり今度はテロを封じる作戦だということで認めています。でも、爆弾の仕掛人がチェチェン人だという証拠はどこにもない。世界のNGOが立ち上がって、その非を指摘し、それぞれの国の政府を動かすほか、チェチェンを救う道は今はありません。

今、世界で恐れられているイスラム原理主義のテロリストは、多くは戦争で荒廃した国の若者です。例えばアフガニスタンでは、子どもたちは戦争しか知らない。その人たちが十代になったときに、宗教教育と称して、非イスラム文化をすべて否定して、イスラムの宗教、信仰を植えつけて、武闘訓練をした。近代教育を受けていない彼らは、戦うためのイスラムの信仰を教育されて、兵士に作り上げられたんです。国際社会からまったく孤立して、戦争の傷跡のなかで、戦争しか知らない若者たちを、イスラムの大義における戦士に仕立てあげたのは、パキスタンの秘密情報部です。職がなく、食べていく道もない若者を兵士に

して、パキスタンやチェチェンに送り込んでいる。若者は傭兵として生活の資を得る。今、チェチェンもそれと酷似した状況が、じつはある。今の二十代のチェチェン人は、戦争しか知らない世代。食うあてもない若者たちが、どんなアフガニスタンやパキスタンに送られて、そこでチェチェン本来の精神文化——伝統的なイスラムとはまったく違った、タリバーン風に作り直されたイスラム教育を受けて、軍事訓練を受けているんです。

そういうところには、都市生活をしている人は入らない。山里の人たちをかり出すんです。アフガニスタンのタリバーンもそうですし、チェチェンもそうなんです。ソ連崩壊後に入ってきた西側の消費社会に対する反発というのが、山の上のほうに住んでいる人たちにはすごくある。それが利用されているんですよ。

なぜ、二十世紀の今のこの時期に、これほどイスラムのテロリズムが蔓延するか。これは、もつと考える必要がある大問題です。しかし、G7とかG8とか、政府が国際テロ対策の国際会議をどんどんやっていますよね。「テロには妥協しない、徹底的にやっつける」と。ペルーのテロの時には、フジモリ大統領が最後にはテロ集団全員を殺しました

が、それが、政府間におけるテロ対策のマニユアルになっているわけです。けれども、そういうマニユアルで、テロ問題が本当になくなるのか、問題をそんなに平面的にだけ見ていいのでしょうか。もちろん、テロ行為は批判されるべきですが、「断固として全滅させるんだ」という強行路線の政府が、本当はテロの土壤をつくって、種を植えているんじゃないか。テロ発生の原因を解決する方向に向けないと、テロはなくならないし、減らないと思います。

### キルギス問題も根は同じ

チェチェンで起きているようなことが今、ウズベキスタンでもタジキスタンでも起きてます。キルギスでも起きた。ブチン首相が「旧ソ連の南側の鉄のカーテンが消え去ったあと、南にある最も柔らかないへビのおなかのような部分が全部イスラムテロの攻撃前線になった。そして、国際イスラムシンジケートは、今この長大なユーラシアのイスラムをねらっている」と、はつきり言っている。そういう認識のもとで、ロシアの安全保障会議は、核兵器、通常兵器の戦略コンセプトを変えた。核兵器を増強し、通常兵器も現代化すると言っているんです。そうすると二十一世紀は文

明の衝突の場所になる。非常に危険な状況です。

キルギス問題はチェチェン問題と非常に密接につながるかたちで起きて、日本人が拉致されたということです。キルギスの人権活動家のアクノフさんが、今、この拉致したグループと折衝に当たっています。アクノフさんを、私はキルギスの名前でトゥルスンベクさんと呼ばせて頂きます。トゥルスンベクさんは、チェチェン戦争中、私とずっと一緒に活動していた人権活動家なんです。ドゥダエフ大統領が殺される最後のインタビューのときにも、インタビューしておられた。中央アジア全体の人権保護に関するNGOのリーダーで、政治家でもあります。今のキルギス大統領に対しては野党側になる政党の人なんです、人権活動家として、中央アジアではダントツに活動的な人です。

実は、キルギスでトゥルスンベクさんとも会いました。

来年二〇〇〇年が国連の決議とユネスコ宣言二〇〇〇に基づいて、「未来世代のための平和の文化の創造国際年」になることについて話し合うために会ったのです。中央アジアでは、今言ったような復興主義的なイスラム化の流れがある。もう一つは、中央アジアがソ連から独立して、新たな国家像と民族のアイデンティティを模索しつつ、中央アジ

アの役割というビジョンを、みんなが模索しているわけです。その一オプシオンとして、昔のイスラムに戻ろうとしている。七十年間の宗教弾圧のなかで失われた宗教文化は、自分たちの民族のアイデンティティであると。それは、国家、政府として推進しているんですよ。自分たちの位置を忘れてしまった時に、じゃあイスラムってどんな宗教だったかと考え、本場のイスラムを移植しようとした。移植なんですよ。自分の過去の文化に戻ろうとするんじゃないやなくて、手っ取り早く、短絡的に、パキスタンや、サウジアラビアや、あるいはトルコのイスラムを移植するというかたちです。一方、イスラムの本国たちが積極的にそういうイスラム復興運動を外から支援するんですね。ですから、同じ国のなかの神学校やモスクなのに、イラン系もトルコ系もパキスタン系もある。はたしてそれが本当に自分たちのアイデンティティの再構築になるのか、単なる移植に終わるのかは、まだこれからの問題です。

今の中央アジアの政権は、イスラムの信仰者ではなくて、共産党員だったんです。共産党がだめになったから、今度は帽子をすげかえて、民族主義者になったり、回教の擁護者になったりしてるわけですよ。今の中央アジアの共和

国は全部そうなんです。移植されたイスラムのなかには、そういう今の政治リーダーは本物のイスラムではないというところで、反政府に流れるイスラムもある。とくに顕著なのは、タジキスタンです。内紛が十年近く続いてきた。共產党の地方ボスがそのままイスラムになったけども、もつと本物のムスリムがいて、それが今の政権に対して反抗するという構図は、ウズベキスタンでも顕著なんです。ウズベキスタン大統領はとくに抑圧的で、トウルスンベクさんの話によると、今年の春でしたか、大統領暗殺未遂事件があったんです。それを契機に、六百ともいわれるモスクが強権的に封鎖されて、一挙に何千人という政治犯が生まれました。それはすべて宗教弾圧なんです。政治的に意見が異なるというよりも、急進的な危ないムスリムの信仰だということ実で逮捕されている。そういう人たちを身内に持つ人たちがアフガニスタンに行つて、軍事訓練やイスラム教育を受ける。そういう連中がウズベキスタン、タジキスタン側からキルギスに侵入したのです。

地図を見ればわかりますけど、ウズベキスタンとキルギス、タジキスタンとはものすごく入りくんでいるんです、人種も入りくんでいて、ウズベキスタンの領土がキルギス





タンのなかに、孤島のようにちらばっているところがある。そこを拠点にして、今のウズベキスタン政府に対する反政府ジハードをする目的で入ったということになっています。この六百人とも八百人とも千人とも言われる武闘集団が、日本人も含めた八人を誘拐したんですね。本当の目的は、今のウズベキスタン政権の人権抑圧・宗教弾圧に対する反対運動が先鋭化したわけです。

トウルスンベクさんは、キルギスタンの一般世論は武力によらない平和的解決を望んでいて、平和的な交渉による人質解放を国民がバックアップしていると語り、「リーダーと会った時に、アフガニスタンのなかにいる彼らのさらに上のリーダーと直接交渉しなければ、人質解放交渉は進まないということがわかったので、アフガニスタンに入りた」と、私にアドバイスを求めました。たまたまその時に、私の尊敬する友人で、国際的にとても尊敬されている考古学者がイギリスから国際会議で来ていたので、紹介しました。ガンダーラとシルクロードの世界的な権威で、パキスタン政府にも尊敬されていますし、アフガニスタンのタリバーンとも接触をもっているその学者を通じて、トウルスンベクさんはパキスタンからアフガンに行ったんです。

## 日本政府の冷たい対応

私は一応そういうことをしたのだから、キルギスのビシケクに本拠を置いている日本政府代表（日本大使が一応リーダーですけど）に連絡をとりました。トウルスンベクさんがこういうかたちで動こうとしているということでもアドバイスしたが、人命に関わる責任もあるし、日本政府としてどういう動きなのか、一応政府の立場も聞こうと思ったんです。ところが「介入しないで下さい。私たちは政府として、極秘のうちに、重要な交渉と作戦に入っている」と冷たく言われた。日本政府がどういう交渉をして、どういう立場であるかは、ジャーナリストにもいっさい話してないんですね。厳しい緘口令で、外部との接触をいっさい断っている。それでも「あなたはどんなふうに相談したんですか」と聞くから、「彼らの闘争をあきらめさせるためには、ウズベキスタンの抑圧政策、人権侵害を停止させなければならぬので、国際人権団体NGOが連盟して武力闘争以外の道で、ウズベキスタンの人権尊重と、政治犯釈放の運動を進めようと確約する。それを条件に武力集団が武力闘争をあきらめれば、一応第三国に逃亡する道を提示し

て、第三国の受け入れをあっせんし、人質さえ安全に解放すれば、今回の行動に対する罪は問わないという合意をとらせて、それをのませたらどうかということで、アフガニスタンのリーダーと話したらどうですか」と、私の友人の考古学者を通じてアフガン入りをするようにアドバイスをしたことは一応伝えました。それでも冷たく、「あー、そうですか。でも、あなたはもう、いっさい関わらないでください。日本人人質がいるのに、日本人がまたへんな交渉にへんなどころからかむと、ますますややこしくなってるんがらがりますから」と、「介入すれば命も保証できません」とまで言われました。その時、私は、平和解決はすでにオプションにはなくて、中央アジア政府間で話し合う一方、ロシア、アメリカの宇宙衛星からのモニターを利用して人質のグループと武装集団とを割るという、解放作戦と全滅作戦の二面の軍事作戦が、もう密かに秒読み段階に入っているんだと、直感的に思ったんです。

トゥルスンベクさんは最初、武装勢力側から、ちゃんとした交渉相手として見られていました。しかし、今はカードがない。全面作戦が目前に迫っている武闘派に対して、人質と引き換えられるカードが、トゥルスンベクさんの前

にはないわけです。私は、彼が行く前に、「世界中のノーベル平和賞受賞者とか、アムネスティ・インターナショナルなどの人権団体のデータを取り付けろ。ウズベキスタンの政治犯釈放問題は、武闘闘争でないほうが賢いということを彼らに確信させなければ話にならない」と言ったんです。が、彼はそれをしないで飛び込んで行った。話だけでは彼らは信用しませんよ。人質だけが彼らの保障なんだから。そこをシビアにオブジェクティブに受けとめなかったのは読みが浅かった。彼は、チェチェン人とロシア兵との捕虜交換なんかでは、ずいぶん活躍した人なんですが。

私は思うけど、一つは日本の報道陣があまりにチャホヤして、トゥルスンベクさんを通じて人質解放の手柄をあげたいという野心を、彼に植えたと思いますね。申し訳ないけど、それを感じました。正直言って。

交渉はますます難しいところへいつてますよ、客観的にみて。今日のテレビ報道でも、人質の命が危ないって言ってますね。朝日の緊急ニュースで、今アフガニスタンで交戦しているキルギスの議員が、日本大使館に「もし軍事攻勢をやれば人質の命が危なくなるから、軍事攻勢をやらなように、日本政府からキルギス政府とウズベキスタン政

府に申し入れてくれ」っていうFAXをアフガニスタンから入れたって言うんですね。現地の日本大使館は、そういうFAXは届いていないという声明を出したそうです。

私も、人質の命が危なくなると思っていますよ。だって、アフガニスタンではソ連が敗退したんですよ。今のキルギスやウズベキスタンのにわかづくりの軍事作戦で、ああいうパミールの山岳地帯を自分の庭のごとく動く連戦練磨のアフガニスタンのゲリラに訓練された人たちを相手になんてできませんよ。どんな爆弾を落としたところで、彼らはソ連のアフガニスタン戦争中のときに全部経験済みだから、歯が立つと思えないですよ。そんなずさんな作戦で、人質の命を危険にさらしているのかねえ。あせってるんだね。雪が降って、冬になると終わりだから。ペルーの日本大使館の時みたいな、すごい奇襲作戦なんかやれませんよ。

\*

国際的な人権活動家として、世界のNGOや宗教者に深く信頼されている寺沢上人は、日本山妙法寺の僧として宗教問題にも精通。歴史の縦軸と国際社会の横軸の広い視野に立つて事態を的確に判断する機転と度胸を持つ人。上人を自由に泳がせたら、人質になった方々とも直接連絡が取

れたのでは、と惜しまれます。

このお話の約二十日後、日本人の人質四名は解放されましたが、多額の金が出たとも伝えられます。単に人質を取り戻すのではなく、問題発生 of 根本的な原因を取り除くために最善の努力をしようとした上人を門前払いをした日本政府。私たちの知らない情報は、まだまだありそうです。ソ連崩壊後、際立った一国の「武力」が世界に君臨している。その渦中で追い詰められていく弱小民族。その象徴であるチエチェン問題には、今後とも目が離せません。

完全非武装以外に平和は築き得ないと、全世界を行脚している寺沢上人は、いつも何の予告もなく突然帰国し、二三日でまた海外に戻られますが、〈あごろ〉には必ず連絡があります。次回の上人のお話を聞きたい方は、あらかじめ事務局までお知らせください。集会のご連絡をします。なお、〈あごろ〉では、今後とも、チエチェンの母と子への援助を続けていくつもりです。募金の振込先は

郵便振替001000-0-5264〈あごろ〉です。

◆〈市民平和基金〉でもチエチェン救援募金を呼びかけています。振込先は郵便振替001000-4-722213〈市民平和基金〉「チエチェン難民」と明記のこと。

## 危機に立つ沖縄

沖縄にサミット!と決まったとき、本土では喜んだが、「サミットを口実に、徹底的に沖縄を抑え込む狙い」と、沖縄県民の危機意識は強い。

大田県政の後を受けた稲嶺知事の下には、連日のように政府の要人が訪れ、普天間基地の「県内移設」を迫っている。知事は十一月二十二日、ついに「名護市に移設予定」を打ち出したものの、「ただし十五年の期限付き」は譲らない。政府は、これでは米国はのめないと、期限問題は棚上げする構想。「二百年間基地が固定されてなるものか」と、反対運動は連日展開されている。

「北京十5」を掲げて来年六月にニューヨークで開催される国連女性会議は、今回はNGOフォーラムを開催しない。「沖縄でNGOフォーラムを開き、この機会に世界の女性に真実を見てもらおう」という構想も、現状では沖縄の

女性たちが毎日臨戦状態で、その余裕が全くない。かねてから積み重ねている〈東アジア基地ネットワーク会議〉は、サミットの期間に開催予定で、会場も沖縄県女性センター「ていりる」を押さえているが、一般にどの程度開放するかは未定。

政府はサミットのために巨額の予算を計上、「子どもサミット」なども打ち出している。六、七月の島内のホテルは、すでにほとんど業者に押さえられてしまった。日本国内で今、最大の差別「沖縄問題」に、差別とたたかい続けて力をたくわえた本土の女たちが、今こそ「沖縄で女性サミットを」を打ち出そうという動きが始まった。

## 子ども虐待防止、法制化へ

児童養護施設に入所した子どもが親に強引に引き取られた後、八割が身体的虐待などを受けていることが、〈日本子ども家庭総合研究所〉の調査で判明した。一方、施設側の

半数は、強引な引き取りに対する対策を取っておらず、三割は引き取られた後の追跡をしていなかった。

厚生省の調査でも、九八年度に全国の児童相談所に寄せられた「子ども虐待」相談は六千九百三十二件で前年度の一・三倍。六年間で六倍を超えた。しかし、現在の法律では、体罰は親権として認められているため、親が「虐待ではない、しつこい」と主張すれば、児童相談所は、それ以上は踏み込めない。近所の人びとが「目に余る虐待」だと駆け込んでも、相談所には強制執行の権限がない。このため、通報を受けながら虐待死した例も、相次いでいる。国会の青少年問題特別委員会は、「児童虐待の定義を明記して、親によるしつけとの違いを明確にする」「児童相談所への通告を義務化する」を柱に、児童虐待防止法を制定しようとする議論を重ね始めたが、立法化は来春になる模様。

## 実質的に進む幼保一元化

幼稚園は文部省、保育園は厚生省という分割管理をやめ、幼稚園と保育園を一体化してほしいという要求は、四十年も前から出されていたが、官僚の壁は厚かった。それが少

子化と働く母の増加につれて、幼稚園児は減少、幼稚園の経営難も加わって、幼稚園児が帰宅したあと、働く母の子を引き続き預かる幼稚園が増えるなど、実質的な幼保一元化の方向が見え始めた。

文部・厚生両省の統計によると、幼稚園児数は、一九九一年に二百万人の大台を割り込み、九八年五月には約百七十八万六千人と、十年前の八七％に落ち込み、昨年は全国で七十六園が閉園した。これに対し保育園児数は少子化で漸減していたが、九四年の百五十九万三千人で底を打ち、九八年四月には百六十九万一千人になった。二歳児以下の定員が増えたことが大きい。幼稚園と競合する三・五歳児でも、九六年が百十七万一千人、九七年百十八万人、九八年百二十一万一千人と着実に増えている。

文部省も数年前から幼稚園教育の弾力化を強調、昨年の幼稚園教育要領の改訂で、それまであいまいな形で実施されていた「預かり保育」を正規の教育活動の一つに位置づけた。四月に三歳に達した幼児のための「三歳児保育」を「満三歳児入園」に早めることも、来年度から補助金を出して後押しする構想。しかし、四十年前から要望されている幼保一元化には遠く、文部省幼稚園課の小松親次郎課長

の「幼児教育機関としての幼稚園制度は堅持した上で親や地域の多様化したニーズに応えるようにしたい」が現状。

有名幼稚園の入試は二歳児が対象とあって、「お受験」競争が激化しているが、経営上、保育の長時間化や低年齢児化を計る幼稚園も増えている。一方、共同保育にはほとんど助成金も出ないなど、幼児をめぐる状況は、四十年前よりむしろ悪化している面も。保育所問題は、以前は働く母のメインテーマで運動も非常に活発だった。「子育て」の原点として考え直す時期に入ったのでは、と思われる。

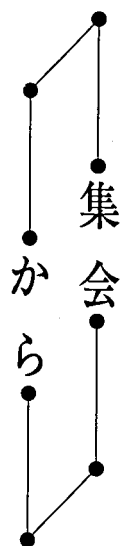
## 小選挙区比例代表制は「合憲」——最高裁の判断

小選挙区比例代表並立制が導入された九六年十月の総選挙について、関東地方一都四県の有権者が中央選挙管理会などを相手取って「選挙の無効（やり直し）」を訴えた訴訟で、十一月十日、最高裁大法廷は上告審の判決を言い渡し、「小選挙区制や重複立候補制を採用したことはいずれも国会の裁量の範囲を超えているとはいえず、選挙区間の人口の最大格差が二対二・一三七倍であっても憲法が求める選挙権の平等に反するとは認められない」と合憲の判断を示

した。ただ「一票の格差が最大二倍以上」になる区割り規定や、無所属には政見放送を認めない公職選挙法については、十四人の裁判官のうち五人が「法の下での平等に反するから違憲」と判断。

## どう変わる司法制度

「お金も時間もかかりすぎる」「閉鎖的でわかりにくい」と批判の強い司法制度の見直しが、七月に設置された内閣直属の機関、司法制度改革審議会で検討されている。池田内閣の臨時司法制度調査会以来、三十七年ぶりのこと。裁判官のキャリア・システムを抜本的に見直し、弁護士から登用する「法曹二元化」や、裁判長と一般市民が裁判に参加する「陪審制」、裁判官と一般市民が一緒に評決する「参審制」の導入などがメインだが、記憶力偏重の司法試験などにも問題があるように思われる。一般市民としてさまざまな体験を持つ人びとの中途採用試験なども考慮されてほしい。何よりも、裁判官の任免や登用が行政の手中にある現行制度は、司法の独立を侵すもの。市民の側からも、もっと声をあげていきたい。



## 99にいがた女と男フエスティバル

### ——語ろう！私たちの男女共生

十月十七日新潟ユニゾンプラザで開催されたこの会は、国の男女共同参画推進本部・総理府・新潟県の主催で、男女共同参画社会実現に向けての活動支援会議として、国内では最初の開催だった。

午前は六つのワークショップ。午後の基調講演「男女共同参画社会実現に向けてー女性の政治参画を考えるー」と、パネルディスカッション「女性と男性がともに歩む社会——男女共同参画社会基本法の施行を新たなストーリーディングポイントとして」では、それぞれ基本法を広め、GOとNGOの連携で真の男女平等へ向けてなお一層の推進を、が語られた。

ワークショップ「新潟県の長期計画と女性政策について」

では、県の女性政策課長から女性政策をめぐる現状・考え方や、県の長期計画へ女性政策をどう入れていくかなどの説明があった。新潟県では今年の七月に「県民参加でつくる新しい県の長期計画の構想素案」が県民に提示され、それに対する意見募集が行われた。この素案を見たが、「男女平等社会を目指して」や「男女共同参画社会を目指して」などの文言が一行もなく、この文言を入れるよう私たちは周りへ呼びかけ、ハガキ・FAX作戦をした。その結果、市町村長も含めて県民から二百七十七人・四百七十二件の反応があり、そのうち女性は六四％で、女性政策についての意見が多かった。

後半のフリートークから、県の長期計画に対して

一、基本目標に「男女共同参画社会をめざして」などの文言を入れること

一、「あらゆる施策にジェンダーフリーの視点で」などの文言を入れること

などをワークショップ参加者一同で県へ要望書を提出することになった。

県内各地から参加した女性たちは、今後も長期計画の中に基本法を反映させたり、地域の女性政策推進に向けて活

動することを確認した。(にいがた女性会議 村上恵子)

## これからの新潟を語ろう——新潟の政治状況とジェンダー

十月二十四日、新潟市女性センターで、〈ジェンダー視点に立った研究・教育者ネットワーク(新潟)〉(略称ジェンダーネットワーク)主催によるシンポジウム「これからの新潟を語ろう——新潟の政治状況とジェンダー」を開催した。

〈ジェンダーネットワーク〉は、県内の研究者・教育者を中心に専門分野を越えて、「ジェンダー視点について考えることを目的とし、会員同士の研究会・学習会を開いているグループ。今回は、「女性の政治参加が課題となっている今、新潟県の女性議員は春の統一地方選挙の結果、県議会議員二名、市町村議会議員八十数名となった。女性議員が増えたことによって、なにがどのように変わっていくのか、新潟県の政治状況の現在と未来に向けた課題と展望をジェンダーの視点からアプローチする」という趣旨で会員以外にも参加を呼びかけて、パネリストに大淵絹子さん(参議院議員) 西村ちなみさん(県議会議員) 松川キヌヨさん

(県議会議員) をお迎えし、公開シンポジウムとした。

第一部「女性議員を多数生み出した背景と諸原因は何か——『ジェンダー視点』からみた新潟県の政治状況の現在」女性議員が置かれている状況と諸問題——本当の意味での女性の政治参画の障碍と困難さ」では、各議員がそれぞれの立場から発言、第二部「女性議員の課題と可能性——新たな『ジェンダー環境』を構築していくために——」では、参加した会員をはじめ、県内各地からの女性議員、統一選挙に応援者としてかかわった人、また残念ながら議員になれなかった人などから活発な意見が交わされた。印象的だったのは、三人の議員さんが、女性議員の必要性を感じて立候補したこと、そして「議員になって本当に良かった、嫌だなと感じたことはない」と言っていたこと。保守的と言われている新潟県でも、女性たちが「政治の場」に意志を表明していくことの重要性」を認識してきた。今までは「政治は女性に向かない」と思っていた男性の意識の変化など、少しずつではあるけれど確実に状況が変化していること、また、さらに女性議員を増やすためにネットワークし情報交換していくことが必要ではないか、と感じた。

(ま)



## 「日の丸・君が代」強制を許さないつどい

国旗・国歌法案通過後、「日の丸・君が代」押しつけは以前に増してあからさまになっている。十一月六日、八丁堀の労働スクエア東京で開かれたこの集会では、事態が切迫していることをまざまざと実感させられた。

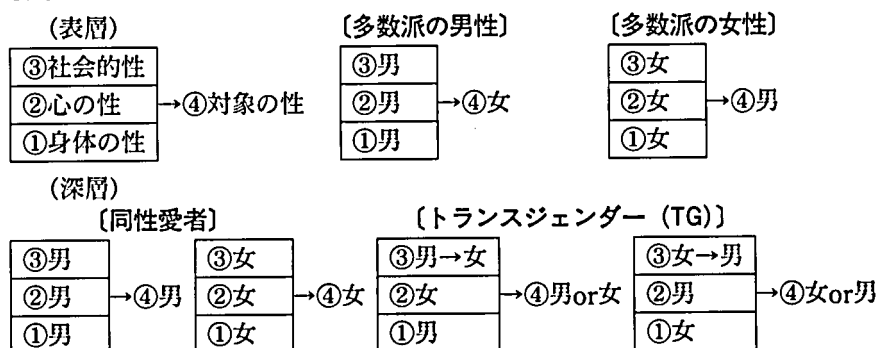
〈日の丸・君が代〉強制反対ホットラインを立ち上げた弁護士の内田雅俊さんは、記者会見での「日の丸」をめぐる攻防を報告した。〈ホットライン〉は十二月十二日の「天皇在位十周年式典」を前に、職場や学校で旗や歌が強制されないかどうかを調査する臨時電話相談(九日から十三日)で、五日に文部省の記者会見室で会見を行なったが、会場に「日の丸」があつたため数人の〈ホットライン〉メンバーが室外に撤去。会見中に文部省職員が「日の丸」を室内に戻したため、〈ホットライン〉側は反発して旗を黒い幕で覆つて会見を続けたという。内田さんは「文部省の態度は強制にほかならない」と批判した上で、「各地で『日の丸・君が代』不服従運動が起こっていることを実感する。激励の電話も多い」と述べた。

集会参加者からの報告は深刻なものばかり。例えばスポーツ連盟からは「国体」などのスポーツ大会での押しつけのひどさ、八王子の高校教員からは「日の丸・君が代」を考えよう」というプリントを教材に使つて処分されたこと、障害児学校からは「十月三十一日に都教育委員会から実施を要請する通達が来た」こと、東京外語大学からは十一月四日の「百周年記念式典」で日の丸を掲揚するという学長方針に対する教授会の反発、等々……。その一方、抵抗運動も頑張っている。〈市川市民の会〉からは「学校の先生を孤立させず、親と教師が連携してやっこう」という元気の発言。千葉高教組では、卒業式を目前にした来年二月十一日に集会を持ち、アピール署名に取り組む構えだ。

辛淑玉<sup>しんすく</sup>さんは在日コリアンの立場から「あの旗とあの歌」を押しつけられるやりきれなさを話し、「頑張りすぎないで、余裕を持つて、知恵を使って抵抗しよう」とアピール。佐高信さんは「本当に頑張っている辛淑玉がそう言うから重みがあるんだ」と評されていたが、「日の丸・君が代」への抵抗だけではなく、すべての市民運動に辛さんの言葉はあてはまる。十一月十二日「奉祝」の日の丸の海に戦慄を覚えながら、辛さんの言葉を思い出した。

(あ)

三橋氏は、伏見憲明氏規定の「性」の4要素——①身体の性、セックス(sex)②心の性(性自認) ジェンダー・アイデンティティ(gender-identity)③社会的性(性役割/性別表現) ジェンダー・ロール/ジェンダー・パターン(gender-role/gender-pattern)④対象の性(性的指向性) セクシャル・オリエンテーション(sexual orientation)を「多層的な性の構造図」にし、それを自己認識のよすがとする。



多数派の男女は、①②③が一致し、④が異性に向かっているのを当然と考えるため、それらが層を成していることに気づかず、性が強固な一体的なものだという錯覚をもってしまう。同性愛者の場合、①②③は一致、④のみが多数派と異なる。TGでは、①②③が一致しない。性の各層間の同一性が無いわけだから、性別違和感や性同一性障害などにつながる可能性もある、と説明。男性を白白白のバニラアイスクリーム、女性を茶茶茶のチョコレートアイスにたとえ、TGはバニラアイスクリームの上にチョコレートアイスが重なっていると思えばよいと言う。確かに、ミックスのほうが二つの味が楽しめるかもしれない。

多田氏は、第5章《性とはなにか》を次のように結ぶ。「私には、間性も間性的行動様式も、自然の性の営みの多様性の中で正当に位置づけられるべきと思われる。性の多様性が、基本的に生物学的な必然だとしたら、それを基礎にして生み出される性の文化的多様性も受け入れるべきであろう。女と、その加工品である男だけという単純化された二つの性と、それによって営まれる生殖行動しか存在しないよりも、さまざまな間性と間性的行動を持った人間の方が、生物学的にも文化的にもより豊かな種のように思われる。」

# Transvestite VI

(トランス・ベスタイトVI)

奥川 睦

免疫学者多田富雄氏によると(『生命の意味論』新潮社)、「性の明確な区別を常時もっている動物は、自然界ではむしろ限られている」という。

我々も、ミミズが雌雄同体だということくらいは理科の時間に習って知っているが、「へーそうなんだ。そんなことがあるんだ」くらいで通り過ぎてしまっている。でも、「多くの下等動物は雌雄同体であり、精巣と卵巣の両方をもっている。自家受精のほかには交尾して受精する場合は、どちらの性としてでも働くことが可能である」と説明されると、「性の自明」ってなんだろう? くらいの疑問は湧いてくる。

さらに、多田氏の挙げる実例。例えば、回遊魚のペラは、♂一匹に♀多数でハーレムを形成するが、そこから♂を除くと♀の一匹が♂になってしまうし、クロダイは、若い間が♂、年を取ると♀になってしまうという。爬虫類のカメやワニなどは、卵が孵化するときの温度で性が決まり、20~27度で生まれるカメは全部♂、30度以上ではすべて♀、逆に、ワニ(ミシシッピーアリゲーター)では、34度以上では♂、30度以下の条件ではすべて♀が生まれる。「そのため、土手のうえに作られた巣からは♂が生まれ、低温の湿地の巣からは♀が生まれる。自然界では雌雄の差はかなりファジーに作り出されるのである」と。

ところで、人間である。出生時に外性器の形から男か女かが決められるが、「実際には外性器が女のような形をした男性も、その逆のケースもしばしば認められる」という。外見とは別に遺伝的に決まるとする立場から見ても、「XXで男になっている場合もあるし、XYの女性も存在する」という。身体的に決定されるセックス(語源はラテン語secusで「別ける」の意)に対し、精神的、社会的な性であるジェンダー(こちらは基本的に脳で決定される)からすれば、「自分を女性として意識している男性も多いし、女性でありながら社会的には男性として暮らしている人もいる」。科学者である多田氏の説明は、典型的な文系の私にもよくわかり、〈本質を掴んだ人だけがができるやさしい言葉で難しい事象を〉の例えそのままに、実験や豊富な実例をまじえ、かみ砕いてくれる。私も友達に薦められたのだが、一冊まるごと何処もかしこも面白い。(ぜひ、ご一読を!)

普天間基地移設に全国で積極的な関わりを！

十月十八日、沖縄でへ心に届け女たちの声ネットワークの会議に参加する機会があった。夜道を車を走らせ、宜野湾の教会に参集しての会議だ。去年の五月東京での「道ジュネー」でお会いした懐かしい方々が二十人近くもそろっていた。時間も惜しいとばかり手際よく事務局の係を決め、早速本題に入る。この日は、県議会が移設容認を可決した危機的状況のなか、宜野湾で行われる「10・23県民集会」や、これからの取り組みなどの打ち合せをした。私はたまたま参加したのだが、沖縄のどうしようもない孤立感、追いつめられた危機感、理不尽さに対するガマンのならない怒りなど、空気の緊迫を感じた。

去年、東京で「女たちはもうガマンしない！基地は知らない、どこにも」と、意表をつくスタイルの大胆な行動をやつてのけた沖縄の女性たちが、何の進展もみないまま、むしろ追いつめられた状況の中で、今日も全く同じテーマで善後策を考えている。あの時の信念と

情熱をそのままに、何とか突破口を見いだそうと必死の思いでいる。そして真剣に何度も話し合った末「どこにも」という大きな理想から一歩踏み出し、「県外移設」を前面に出したという。へ心に届け女たちの声ネットワークは、断じて沖縄での基地の新設を容認しないという、強い姿勢を鮮明にしたのだ。「県外」の私たちへの危機感の共有と現実的な打開への、同時参加の要求にほかならない。

本土の多くの人は暗黙の内に「米軍基地は沖縄にありき」と他愛なく思い込んではいないだろうか。このギャップ、このもどかしさが沖縄を追いつめ、ひいては政府に利する結果となつていく。沖縄の今の局面をどう打破し、現実の「どこにもいらない」をどう勝ち取るのか、私たちも試されている。「県外移設」に込められた真意を汲んだ大きな運動をあちこちで起こそう。「沖縄にいらぬものは本土にもいらぬ」ではなく、「本土にいらぬものは沖縄にもいらぬ」という積極的な関わりを持たなければ、いずれ沖縄の人びとから見限られるだろう。普天間の米軍基地返還の問題は決して沖縄だけのローカルな問題ではない。ともに

「普天間基地無条件返還」に力を尽くし、政府の横暴を頓挫させ、希望の見える新世紀を迎えよう。

十一月九日、稲嶺知事が名護市への移設を表明した。同日の『沖縄タイムス』によると地元各団体、そして真志喜トミさんからネットワークのメンバーも、岸本名護市長に受け入れを拒否するよう要請を行なったと報じている。政府や受注企業のサミットにかこつけたシナリオに惑わされない粘り強い運動を作りだし、熾烈を極めた九七年の住民投票の意義を確認しよう。

(山野(宜野座) 澄子)

## 果敢な闘い——沖縄の「うない」たちの抵抗

〈基地・軍隊を許さない行動する女たちの会〉は十月五日県庁前で抗議メッセージを貼った傘を手に「歴史の改ざん・基地の県内移設を許さない」うない行動を行い、知事室に向かって傘を振った。十月十五日には同会の高里鈴代さん、糸数慶子さんが県庁に親川知事公室長・金城文化国際部長を訪ね、普天間基地県内移設反対と基地の整理・縮小・撤去を求め、新平和

資料館の展示内容の改ざんをやめるよう要請した。

また〈心に届け女たちの声ネットワーク〉は、十月二十三日に宜野湾市で行なわれ、一万二千人が参加した県民大会でお芝居を披露。基地の県内タライ回しを大きな「タライ」で表現し、大喝采を浴びた。十一月初めには県知事、名護市長、宜野湾市長に「普天間基地の県外移設を求める要請」を提出した。

## ジュゴン保護基金に協力ください

普天間基地の移転候補地にされた名護市辺野古の海は、天然記念物・ジュゴンの生息地。この貴重なジュゴンの保護を通じて、自然との共生思想をはぐくむために〈ジュゴン保護基金〉が設立された。委員代表は池原貞雄さんと香村真徳さん（共に琉球大学名誉教授）。基金はジュゴンの生態調査、環境調査、ジュゴン保護のための広報や啓発活動を目的としている。一口千円から。郵便振替口座は0178015190603（ジュゴン保護基金）。お問い合わせは098・055・8587（事務局）へ。

# 語りかけたいあなたへ 26

大里知子

## 線香花火

なんだかパチパチ音がするので、四階の居間の窓から外を見ると、近所の子どもたちが打ち上げている花火だった。

いくら、子どもが打ち上げる花火といっても、このごろの花火は大がたで、ものすごくきれいなものができたものと感心して見てしまった。

でも、子どもの花火の主流は、なんといっても、あのはかなげに火花を散らす線香花火なのではないだろうか。

幼い子が怖ごわ持って、アサノハや菊の花の火花を散らして、おわると小さい火の玉がポトリッと落ちる。

こういう光景は、欠かすことのできない真夏の風物詩のひとつに、あげられるような気がしてならない。

私は、この線香花火にたいへん残念な想いがあって、いまだに心の中でくすぶり続けている。どんなことでも不自由でない人のやることを、ときには無理とわかつていることでもやっていた私も、火をつ

けた線香花火は一度も、自分で持ったことがなかった。

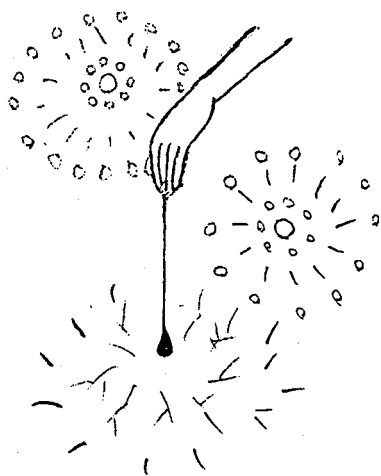
自分でやりたい気持ちはあっても、線香花火を持った手を静止できないことが、もともと大きなさまたげになっていたと思う。

手が自分の意に反していくら動いても、線香花火を自分でやってみればよかったと、これほどまでに切なく思うのは、今の私の手では線香花火を持つことが、不可能になってしまったからなのかもしれない。

現在、私の手はジャンケンのパーもグーも自力ではできる状態でなくなっている。

(一九九九・八・十五)

◆二月から、約五か月、高い熱に悩まされていた私も、七月、とうとう大湯リハビリ温泉病院に熱の原因をつきとめるための入院検査をし、連日の猛暑の前に高熱から解放され、ほんとにラッキーだったと思っています。



## あこら読書室

市民科学者として生きる

高木仁三郎著  
岩波書店刊

発行日は臨界事故のちょうど十日前、九月二十日。あまりにもタイムリーなので驚いた。

この本は、この号の巻頭の解説文の筆者、高木仁三郎さんの最新著書だが、個人史という側面と、日本の原子力技術と反原発運動の歩みという側面がある。この二つの面を結ぶのが、著者が生涯をかけて取り組んでいる〈原子力資料情報室〉の仕事である。

著者は一九三八年群馬県の医者の家に生まれ、空襲を経験している。敗戦後、大人たちの手の平を返したような変化を目のあたりにして、「物事を鵜呑みにせず、自分の頭で考えて判断する」ことを

学んだ。中学高校時代にあらゆる分野の本を乱読、級友たちと切磋琢磨し、東大で化学を専攻する。学生運動と出会い、デモに参加したりもするが、深くはめり込まず、卒業後は日本原子力事業に就職する。ここまでは、自立心と反骨心の強さはうかがえるものの、まずはエリートとして「順調な」歩みである。

ところが原子力事業から東大原子核研究所助手、都立大助教授と研究者の道を歩むうちに、著者は「核のネガティブな面」を見ようとし、原子力研究のあり方に強い違和感を持つようになる。ついには大学の枠を飛び出し、在野の研究者として〈原子力資料情報室〉の設立に参加、「市民にとって必要な情報」を研究し、提供する科学者になろうと決意する。

一九七五年の設立以来、〈原子力資料情報室〉は反原発運動とともに歩んできた。

国家権力に後押しされた原発推進勢力からの嫌がらせに加え、内部でも慢性的な財政不安や、「運動体なのか研究機関なのか」という論争があった。その中で著者は時にはリーダーとして先頭に立ち、時には疲れ切って一時休止する。何とも壮絶な生き方ではあるが、もし納得できないまま象牙の塔の研究者を続けていたら、著者はこれほど意義のある仕事はできなかっただろうと思う。

〈原子力資料情報室〉も、もうすぐ四半世紀、今年五月には月刊の通信も三百号に達し、過去の通信すべてを収録したCD-ROMも発売された。今回の臨界事故の情報を得るにあたって一番頼りになったのも〈原子力資料情報室〉のホームページだった。『あこら』も同時期の七年に生まれ、女性情報を送り続けている。市民にとって本場に役立つ情報とは何かという点で、共感するところが多い。資料室の世間的な評価が高まるとともに著者の評価も高まり、一昨年、「もう一



つのノーベル賞」とも言われるライト・ライブリッド賞を受賞した。ところが、その直後にガンが判明する。この本はガンとの闘いの中、大半がベッドの上で書かれたという。

高木さんの回復を心から願い、最近始まった「高木学校」の試みからさらに多くの「市民科学者」が巣立っていくのを期待している。(あ)

〔新書判 二六〇ページ 七〇〇円〕

◆『原子力資料情報室通信』三百号記念CD-ROは一万円。お問い合わせは03・5330・9520 (情報室) へ。

〈2000年危機〉から身を守る本

「地球の集まり」+津村喬編著

洋泉社刊

この本のもとなった英語版『Y2Kアクションガイド』は、百万冊に届くほどのベストセラー。しかし、決していたずらに危機感をあおる「予言の書」では

なく、むしろ一般市民が危機を回避し、Y2K(「コンピュータ2000年問題」)から生活を守る知恵がつまっている、とても実用的な本である。Y2K市民ネットワーク(世話役の中川一郎さんも、執筆陣の一人として参加している)。

Y2Kについて最も対策が進んでいるアメリカでも最先端を行くコロラド州デンバーでの市民の取り組みを皮切りに、個人・家族単位でできること、地域で取り組むことなど、内容は極めて具体的。特に強調されているのは地域での取り組み。コミュニティの対策がしつかりしていれば、もし大変な事態になってもパニックは最小限に押さえられるだろう。「2000年対策と言えは備蓄」と思っていたが、個人でため込むのと地域で協力しながら備蓄するのでは安心感が違う。Y2Kは地域コミュニティの再生のチャンスであり、コンピュータやエネルギーに頼りすぎた現代の生活を見直す千載一遇の機会であると、この本は説く。

Y2Kは絶望ではなく、二十一世紀に向けての再生のきっかけかもしれない。しかし、私たち一般市民が自覚を持って準備をし、その時を迎えなければ、パニックになってしまう危険性もあるのだ。

日本政府もようやくY2Kへの警告を呼びかけはじめた。今まで「大丈夫だ」と言い続けていたのに、ここに来てようやく危機を認識したらしい。もつとも、十月三十一日に行なわれた「Y2K市民フォーラム」では、政府の呼び掛けは「何もしなかったわけではない」という免罪符程度でしかない、という評価であったが……。何せもう2000年まであとわずか。狭い国土に原発は五十二基もある。果たしてこの国は大丈夫なんでしょうか!?

ともあれ、個人としては備蓄をしつかりするとともに、地域を中心に、できかぎり多くの人に呼びかけようと思った。Y2Kをナメたらアカン! (れ)  
(A5版 一七六ページ 一二〇〇円)

女性起業家・支援者のアメリカ研修

【テーマ】連邦政府の女性起業家支援制

度とニュービジネス

【期間】二〇〇〇年三月十二日～二十日

【訪問先】ニューヨーク、ワシントンDC

【研修視察】アメリカ女性経済開発法人

／中小企業庁女性ビジネス・

オーナーシップ・オフィス／

全米女性ビジネス評議会など

【費用】三十八万円（交通費・宿泊費・

研修費込み、朝食つき）

【コーディネーター】真弓敦子さん

A・M・Rインターナショナル代表

【問い合わせ先】TEL60・0004

新宿区四谷一二一（財）国際教育振興

会内 日米文化センター日本事務所「女

性起業家アメリカ研修プログラム」係

TEL 03・33359・0576

FAX 03・33359・0562

Eメール josei@usjpc.com

【編集後記】

◆電力供給県の新潟は、いくたびか環境破壊をくりかえしてきたが、今度は生命の危機が現実のものとなってきた。私たちの生き方と政治のあり方を考えさせられた。

（倉）

◆新潟県は四十八年ぶりに女性県議会議員二名が誕生した。そのお二人から議会の様子を聴く機会を得た。四十八年もの間男性に牛耳られていた県議会に、これから少しでも女性の視点が採り入れられていくことに期待したい。と同時に、女性たちがもっと政治に関心を持ち参画することが、男女平等の社会につながるのだということ再認識した。

（み）

◆柏崎は市長がブルサマル一年延期の方針を示し、東電も諒承。ポーズよね、という声も聞かれますが、まずはこの一年を有効に使うことが課題です。

（ま）

◆新潟女性史年表づくりにまわっている

ものですから、ウロウロするばかりでした。〈白井博子・地の塩賞〉が誕生し、第一回受賞も発表に。優しさについて、新たにかみしめております。

（植）

◆「原発のことを実名で書ける人は少ないです」と、言われた。危険なものを押しつけられ、お金で黙らされる構図は、まさに米軍基地と沖縄の構図と同じ。それに気づかない大都市住民の鈍感さも恐ろしい。

（れ）

◆各地の〈あごらメイト〉からのルポ、生命を産み育む女（母親）だからこそ強い憤りが、雷に打たれたようなさまじさで伝わってきました。本当に女はもっと強くならなければ！

（オ）

◆高木さんの解説で、臨界事故の真相が初めて理解できた。高木さんの意見を聞いたマスコミは共同通信一社だけだった。〈政府御用〉の評論家だけを重用する日本メディア。これも怖いですね。

（千）

# 『あごら』が 第5回「平和・協同ジャーナリスト基金」 運営委員会賞を受賞

平和・協同ジャーナリスト基金(PCJF)は、反核・平和、人びとの協同を推進するための報道に寄与したジャーナリストらを顕彰するために、市民の基金によって1995年8月に設立された団体です。このたび、第5回基金賞の選考で253号『闇を照らす閃光——長谷川テルと娘・暁子』をはじめ、『あごら』の平和問題に関する継続的な評論活動が高く評価されて、62点の基金賞候補の中から「運営委員会賞」に選ばれました。

〈その他の受賞者一覧〉

## ★基金賞(1点)

『写真記録 チェルノブイリ・消えた458の村』

広河隆一氏(フォト・ジャーナリスト)日本図書センター刊

## ★基金賞奨励賞(6点)

◇朝日新聞原爆投下取材班の「原爆投下55年目の真実」など一連の報道

◇朝日放送、株式会社才SAI制作〈驚きももの木20世紀スペシャル〉

「シベリアの奇跡—『妻よ!』『子供たちよ!』収容所から届いた遺書」

◇諏訪中央病院院長・鎌田實氏の「鎌田實がたずねる地域医療の先達若月俊一・早川一光・増田進」(『月刊総合ケア』医歯薬出版株式会社刊・99年8月号)

◇北日本放送制作「鍋割月の女たち～米騒動から80年～」

◇テレビ東京、クリエイティブ21制作のドキュメンタリー人間劇場  
「みすてられてなるものか」

◇『セミパラチンスク』森住卓氏(フォト・ジャーナリスト)高文研刊

●12月3日(金)18時から授賞式が行われます。

場所:日本青年館(JR 信濃町駅/千駄ヶ谷駅徒歩7分、地下鉄銀座線外苑前駅徒歩5分)

ぜひご参加ください。参加費 3000 円です(レセプション込み)

あごら 255号 臨界事故と私たち

●発行1999年11月10日

●編集 あごら新潟

●発行所 あごら MINI 編集部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

●TEL 03-3354-3941 ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.ne.jp.

●定価 本体857円+税 ●振替 00100-0-5264



9784893060983



1920036008575

ISBN4-89306-098-8

C0036 ¥857E

女による女のBOC出版部

〒160-0002 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体857円+税

この ひろい宇宙に  
たった一つの地球  
その 大きな地球に  
たった一人のわたし  
そして あなた  
かけがえのない地球  
かけがえのないわたし  
かけがえのないあなただから  
たいせつに たいせつに しょう  
あなたも  
わたしも  
地球も

たった一度きりの人生だから  
思いきり  
のびやかに生きよう  
だれもが だれをも  
ふみしだくことなく  
胸の底まで深く息をし  
ああ 生きててよかったねと  
ほほえみあえる地球にしよう  
へあごら  
人と人の出会うひろば  
へあごら  
人と人の共に生きるひろば

雑誌・書籍の編集・印刷  
平和・女性問題の講師派遣  
翻訳・速記・調査その他  
へあごらを支える  
へあごらに  
ご発注ください

創業1960年——  
女性専門職集団  
BOC

☎ 03-3354・3941 ㊞ 9014  
E・meil XLV05467@nifty.ne.jp.